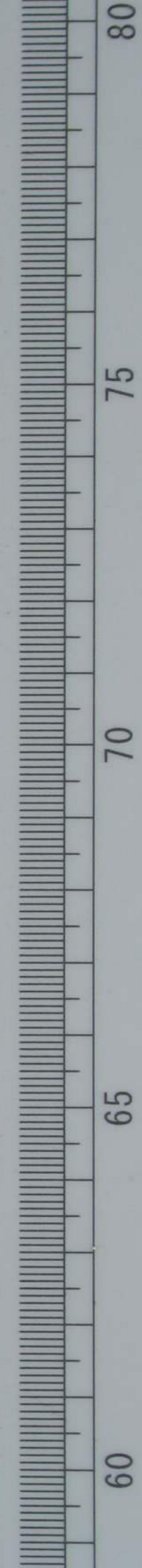


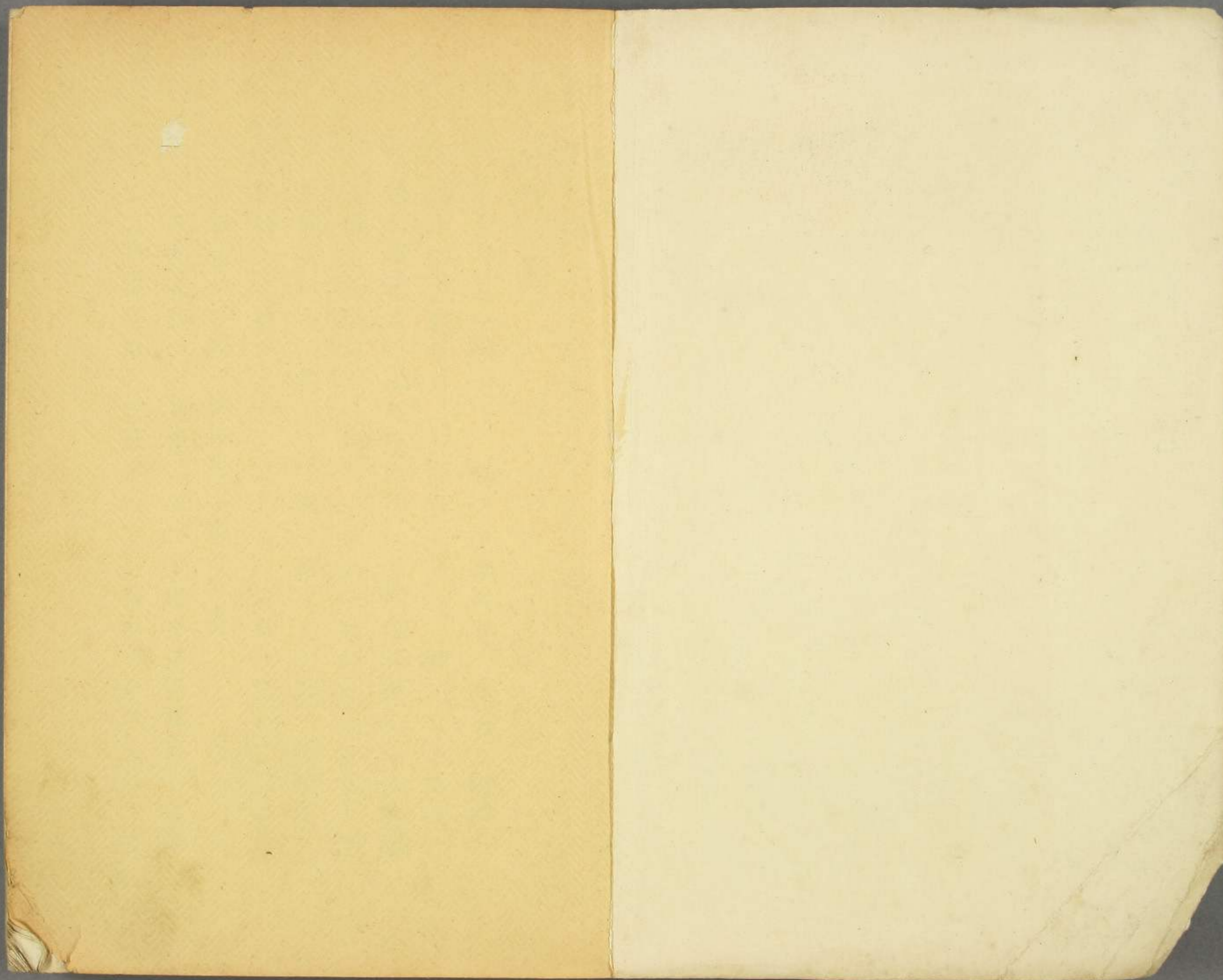
瓊音著

瓊音









轉に宛す

聲の腔を出づる、軟あり剛あり、鉅あり微あり、
鋭きあり緩きあり、急なるあり、靜かなるあり、
或は斷續し、或は連絲す。其類僕を更ふるも枚舉
し盡すに由なし。就中、小鳥の喉を出づる者、之
を轉といふ。軟にして微、緩にして靜、斷續して
連絲し、嫋々として盡きず。百鳥の集つて、森林
に歌ふは、是れ轉の最も美なる者。

友人瓊音子、其手に成れる大小長短諸篇を蒐輯
し、其集に命じて轉といふ。瓊の音を以て自ら名

づけ、而して其集を轉といふ。對照して殊に聯想の妙あることを覺ゆ。聲腔を出で喉を出づ。瓊音子の轉は、耳を以て之を聞くべからず、目を以て之を観ることを要す。是れ之を観音といふ。凡人は耳を以て之を聞く。而して達人は目を以て之を観る。瓊音子の轉を観む者は、耳を以てすることなかれ、それ必ずや目を以てせよ。珠玉の水晶盤に走り、絃なきの琴、觸れずして自ら鳴る者、耳聞及ばずして、たゞ目覩これ瞬間に在り。遲疑すれば、一の見る所なく、斯集亦一の轉あることな

し。之を几上に寘けども、寂として聲なく、之を風誦に上ほせば、珊として響かざるなし。瓊音子の此集に命ぜし者、始めて偶然にあらざるを知る。雲雀呼び、黃鸝啼き、杜鵑叫ぶ。三春老い盡きて、綠天綠地、なほ百轉千轉を絶たず。其音を聞かむとする者は、目を開いて見よ。

己巳孟夏

犀東居士種徳識

轉 目 録

土 筆……………一
 梅 花 賦……………二
 孤 雲……………五
 交 際 家……………六
 音 樂……………三
 少 女 の 歌……………五
 小 學 教 師……………九
 鶯 笛……………六
 責 任……………七
 盲 乞 食……………六

義 妓……………四〇
 糸 遊……………四五
 葱 の 露……………四六
 朝 顔 の 歌……………五二
 夜 の 聲……………五七
 籠 枕……………五九
 書 架 氛 埃……………六〇
 虎 の な さ け……………八四
 冷 雨……………八九
 朦 朧 の 詩 趣……………九〇

轉や野は薄月のさしながら 嘯山
 轉に獨起き出るや泊客 召波
 轉るや頭黒きむら雀 幽篁



轉

目錄終

晒井……………二六
 愚なる我……………二七
 歌謠の拍子辭……………二四
 炎……………二五
 ストーム……………二八
 月華……………二六
 自惚……………二六
 常磐樹……………二九
 自我の主張……………二七
 松露……………二八

西鶴の文章……………二八
 琵琶島……………二九
 猿酒……………二〇
 玉手函……………二二
 戀……………二五
 雪の賦……………二六
 銀竹……………二九
 悟……………二六
 朽葉……………二四
 西眼に映じたる俳諧……………二五



轉

土筆

雲裂けて初日の富士となりけり
 早口に剽輕者の御慶かな
 夕月や御車寄に残る雪
 春風に轉がる紙のバイブ哉

文學士

沼

波

瓊

音



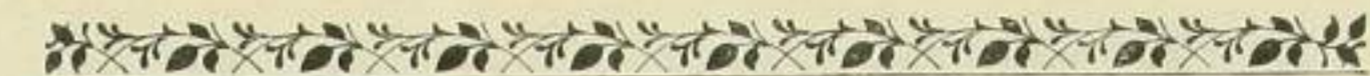
春風や岡の會堂で鈴が鳴る
春風や搖籃の子の夢に笑む
水ちよろ／＼若草そよぐ夜明かな
ふわ／＼と沖へ行くなり春の雲
赤い紙鳶霞む鎮守の杜の上
朧夜を鶴去て梅に微風かな



梅花賦

春も長閑に梅屋敷、吾妻の森のうら／＼と、霞にむせる柳島の

景色ぞまことにあかぬ春の色なる。その色に白きあり、紅なるあり、遠見の梅も興あれど、近まさる香もたゞならず。人はたゞ情なまけ、それ、梅はにほひよの、と歌はれ、梅はにほひよ、木立は入らぬ、人はこころよ姿は入らぬ、とはやさる、を思へば、色ありて香なきは、まことなき傾城の厚化粧したると同じかるべし。櫻に先だちて咲けばこそ梅の色も珍らしけれ、同じ庭に比べられなば、たゞ香によりてたけくらべするなるべし。花は櫻よ、かゝるは梅よ、初音ゆかしき山ほど、ぎす、といふに非ずや。小梅振りよきしな梅、しなと拍子をとり／＼に、數へ數ふる手まり梅、の愛らしさは、兒わげの少女のやうなれど、うたがひの雲なき空や二月の、夕かげに折りつる袖も、くれなるにほふ梅の花笠、ありとやこゝに鶯の、なく音、折しる羽風にはらり、ほろりとふる



は涙か花か、の折、さては、おぼろの月をたのみに夜もすがらなが
めた、はや春風、かをりもてくる軒端の梅はいのく、の夜半に至
りては、忍ぶ戀路に亂れ心の少女子を弄ぶ、罪多き花となりけり。
されど又、梅が咲けかし、いよやへ、梅が枝を、枝を手折るふり
して、必ずござせとさ、様を招く、必ござせと、様を招く、とやう
に、身をそこねて媒する折もあれば罪はつぐなはるべし。
さても艶なる梅の花よ、いまし鶯に親むより、わたしや鶯主は梅
とたとへられ、時に隣れる青柳とむつれしより、梅が主なら柳がわ
たし、となぞらへらる。色あり香あれど、枝ぶりのすくよかに、い
かめしきは、男のこの性さがに似たるなんめり。
されど又、いくよの夢をむすび文、かたさままるる梅よりと、お
もひまゐらせ候べく、わけのさかづき色見えて、と女の名に借ら



れては、その口の小さく、その舌のやうならむと思はれて、やさし
く聞ゆるもおもしろし。

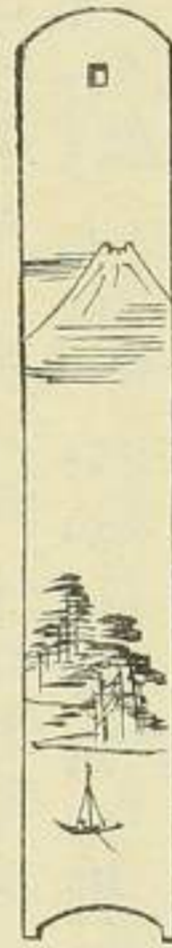
かくもやさしく面白き梅の花を、なほ足らずとて、梅のほひを
櫻花に宿らせて、青葉のま、になかめばや、とうたひ、そよやあら
まほしきは、梅が香を、櫻の花に匂はせて、柳が枝に咲かせてしが
な、とうたひしは、いかに心無の髯男なりけむ。



孤雲

夜嵐に乘行く行者眞白なる袖打振りて妖星を呼ぶ

迦具土の神の血汐ぞ黄泉の空に凝りて炎の雪と降り頻る
此所にして仰げば清き天つ星も行かば汚なき浮世なるらむ
亡妹の夢に語らく君が家の眞上の紅き星に妾あり
猪待つと猛る獵夫が振り立つる弓弭に弦に山嵐鳴る
巖より巖に翔ける荒鷺の影こそ走れ白浪の上に



交際家

A君は實に交際家であつた。會の案内状を受けて斷るといふ事は殆無かつた。生憎會が二つ重なる場合にも、寄席へ出る藝人のやう

に、車を飛ばして掛持をやるのが常であつた。遠き知人の名は帳簿にイロハ順に控へてあつて、其初めから順を追うて一日三通といふ規定を守つて怠らず書信を出して居た。東京及東京附近に住む知人の名は、別の帳簿に方角別けに控へてあつて、これに由て彼は萬遍なく訪問して廻るのであつた。彼の日課はこの訪問と書信と來客に接する事とであるが、月に日に交際が擴がるのでなか／＼多忙を極めて居た。

A君はまた目立つ程美しい容貌と氣味のよい音聲を持って居た。その上話が實に巧い。誰でも日常見聞してゐる様な平凡な事柄でも、A君の口に懸ると趣味津津たるものになる。かるが故に彼は到る處に歓迎された。彼に訪問された家は、忽ち春、海の如しといふ光景になる。家族が悉く客間へ集つて、彼の面白い話に笑ひさざめくから

である。

この社會の寵兒 A 君は嘗て酔醒に風邪を引いたのが原因で、一年程煩つて居たが、仕舞に重い肺患に陥つてしまつた。醫者は全治の見込が無い事を家族に斷言して、ただ間に合せて興奮劑を與へるのみである。

或夜、A 君は昏睡から醒めた。上野の鐘が今二時を報じて、其最後の響が細く／＼残つて遂に消えてしまつた。枕頭の藥瓶、コップ、檢温器等が、洋燈の弱い光に照されて、淋しい淡青い様な色を呈して居る、生温い室内の空氣にはケレオソードの香が一面に漂つて居る。餘寒の風が時々戸を吹いて、遠い／＼處で犬の吠えるのが聞える。A 君はこの褥が自分の病軀を載せた儘、限無き地の底へ沈んで行くやうに思つた。死の冷かな手に、もう引張られて居るかのや

うに感じた。あ、死、A 君はこの死の前に立つて、己が一生をつくづくと顧みた。

自分は相當の財産があるので、金を得る爲に額に汗する苦は知らなかつた。人と競争をして氣を苛つた事も無かつた。この廣い世の中に一人の敵も無く、あらゆる人に愛されて居た。自分の生涯は萬人の羨む理想の生活、平和の生活であつた。併し自分はこの平和を買ふ爲に全く自我を犠牲に供して居た。あらゆる人に服して居たのみで、己れに服する一人をも見出さなかつた。成程人に愛されては居た、併し愛される者は常に愛する者の脚下に跪いて居るのである。小なる者こそ人に愛されるので、偉大なる丈夫は、愛されるといふやうな卑い低い境遇に居るべき者では無い。人に尊ばれ敬はれ、多數の人には寧ろ憎まれるのが常である。人偉大なれば偉大なるだけ、

其だけ多くの敵を持つのが自然である。一生一人の敵なしといふ事は、大丈夫の寧ろ耻辱とすべきことである。あ、自分は愛を受ける位置に絶えず立つたのみで、敵を持つだけの価値は無かつたのである。自分は實に無價値無意味の一生を暮してしまつた。御世辭をふり蒔いて人を満足させたことは有つたかも知れぬが、自我を満足させる丈の、満足させぬまでも慰める丈の事業もしなかつた。事業と交際、これは到底兩立すべきものではない。人間の身軀はこれを兩立させるべく餘り小さい。人間の生涯はこれを兩立させるべく餘り短い。前生後生とこの娑婆との關係は、ごんなだか解らぬが、兎に角この娑婆に生れたからは、何か己れの存在した活動した痕跡を、永久の紀念に具體的に留めて置くといふことが、大なる快事である。旅行をして名所に到ると、樹の枝、柱の蔭に己れの名を

記すといふのは、東西を分たず人の癖である。まして無限から無限に渡る我が心靈の大旅行に、何の紀念をも留めずして、この世を去るといふのはいかにも残念である。なせ自分は事業を爲無かつたか。なせ自分は自我の満足を企てなかつたか。なせ事業の爲に交際を犠牲に爲無かつたか。自分を重んずれば良かつた。自分を尊べば良かつた。もう少し他人を輕んずれば良かつた。もう少し他人の感情如何を蔑視すれば良かつた。あ、交際の生涯。愚な世を送つてしまつた。併しもう無益だ。いくら悔んでももう無益だ。死の手は既にこの胸を抑へつけて居る。あ、この限無き不満を抱いて自分は死なねばならぬのか。自分程不幸な生涯を送つた人は又ど在るまい。この煩悶の夜のほのくくと明くる頃に、A君は遂に息を引取つた。

某男爵は屢、碁の相手をして呉れた報酬として放鳥を贈つた。某博士はいつも自分に阿諛して呉れた報酬として花籠を贈つた。某女史は世間話に徒然を慰めて呉れた報酬として花環を贈つた。この類の華やかな寄贈は數へ切れぬ程有つて、紅紫爛漫相映發して、晴れ切つた午過ぎの大通りを、春風に吹かれて練つて行く葬儀の有様は實に目覺ましいものであつた。彼を知るものはいづれも會葬して、A君のやうに幸福な生涯を送つた人は又と在るまいと羨まぬ者は無かつた。



音 樂

割るゝが如き喝采に迎へられて、フロックコート潔き樂士は壇に上り、徐ろに一揖してピアノに寄れり。細く細き絶え／＼なる絃の音は漸々にこの幾千人の聽衆の胸より胸に響き行きて、果ては地の底の底に浸み行く如き心地して、我は覺えず悲みの逼るやうになりて瞑目しぬ。……………

たゞ狭霧のみ籠め渡りて天も地も別ちなし。霧のうすらぎ行く儘に、朧なる月影さし來れり。限無う長き流あり、流はさゞ浪も無うたゞ何方へと無う眞直に流るゝなり。

霧忽霽れ、月忽明に、大江一面に燦めく浪の影、花は繽紛として四方より亂れ散る、花忽ち白く忽ち赤く忽ち緑に、銀の雨、黄金の

雪また横様に降り頻る。……………雪やみぬ、……………雨やみぬ、……………
花消えぬ、大江失せぬ、月隠れぬ、星一點も無き夜は深し。
黒き魔軍は黒き闇を縫うて四方八面に狂ひ廻る。藍色の炎燃え出
づ。群魔益多し。神を亡し人を亡し、時も處も悉く亡し盡す大嵐は
起れり。炎愈熾りに、群魔悉く映えたり。
何處いづくよりとも無く絲の如く清き光さし來れり。光やうくくくに増し
來れり。魔はやうくくくに遠ざかれり。星も出でぬ。月も出でぬ。日
も出でぬ。六合明晃々として、影といふもの更に無し。……………
忽ち拍手の響雷の如し。
ふと眼を見開けば、少し面赤おもてみたる樂士は今や壇を下れり。



少女の歌

少女よ、隣の小女よ、聲清き少女よ 玉を轉ばすといひ清水流る
るといふ、いかでか君が聲音にたとへ得べき、眠れる人の世を靜に
てらす月の光に音ねありせば、朝朗遠山の端にたなびける紫の雲に音
ありせば、君が歌にこそ似るものならぬ。そのぐもる日すがら花も
色なき折にも君が歌を聞けばあかねさす日の影のさし出づる思あり、
雨氣の風に松の響おごろくしき夕にも君が歌を聞けば久方の星の
林の輝き出る思あり。

うるはしきかなや君が歌、想おもひ涸れてゆきかひたごくしき我筆に
忽ち神力かんぢからをふるミュージズなり。
めでたきかなや君が歌、濁る世憤るわが心をえばし天つ宮に伴ふ

エンジェルなり。

耻にふるはざる君が聲より思へば、君が齡は未だ幼きと若きとのあはひなるべし、憂さに曇らざる君が聲より思へば、君が暮し、月日はさこそ温かに豊けくありつらめ。

嗚呼くみ垣一重のこなたには、静けき戀を浮世の浪に碎かれて、常闇の谷に陥りながら、うさ慰むる光やあると、なえぐく文の山路をたごりのぼるはかなの我ありと君は知らじな。病みて思ひて死なむとせしこと幾度ぞ。泣きて怒りて狂はんとせしこと幾度ぞ。幸に我ここに庵を移して、ゆくりなくも君がすみのぼる歌をき、ては、流石に世にある甲斐も覺えて、わが瘠せし頬に笑みも浮べるなり。

少女よ其はかなさを思へ。心なう唱ふる君が歌にしかく妙なる力あるを思へ。更に思へあどけなき少女よ、花開き花落ると度を重ね

て、うき世てふもの、いかにうきかを知る折來らんことを、君の歌の耻にふるはむ後、久しからで君が聲のうさわびしさに曇る折あらむ。

我未だ君が姿を見ず。されど氣高く雅びかなる君が聲を聞くに、ふさやかなる黒髪を紫のリボンに束ねて、うす染衣袂ゆたけく、胸高に緋袴よそほへる少女なるべし。君が眼はかゆきかくゆく夕づ、の並べる如く、君が頬は天つ神園に咲きををる薔薇の如く、君が唇は雪の霏含みて、朝日にはゆる紅梅の如くならむ。さばかり美しき君ならばまたさばかり君の罪多からむ。

少女子よ、ゆめ人をして泣かしめそ。ゆめ人をして恨ましめそ。

また少女自らの一生も涙少なかれ。うき世の風も君があたりには徐ろに吹け。濁る世の浪も君がほとりには穩に立て。荒魂の荒き男神

たち、和魂の和き女神たち、願はくははしき少女の行末を守り給へ。
あ、君が歌、あ、君が聲、我はただそをき、て樂まむ。さはれ我
庭の梅の花君が肩に散りかゝる折もあらむ。君が眞袖の香りの垣を
もれてわが衣に通ふ折もあらむ。君もどより久しく隣にあらざらむ。
我もどより永くその庵に住み難し。唯しばし機會の神につながれて
かゝるのみ。つながるゝその程に、心ゆくまで君歌へ、心ゆくまで
我聞かむ。

春も日に夜に深からむとす。おぼる夜のますくおぼるとならむ
夜、咲く花のいよゝ色香添ひなむ日、君が歌はや、くゝに妙にな
りゆくべし。あ、君が聲、あ、君が歌



小學教師

日清和破れて將士出征の途に就きし時、國民はこの未曾有の壯舉
に驚けり。皆思へり、敵國は文明の度こそ低けれ、疆土我に三十倍
するの大國なり、皇軍如何に強くとも一二度の敗報を齎すことはあ
りなむと。而してそは、まことに杞憂なりき。國民の受けたる戰報
は悉く勝利、占領の文字を以て充たされぬ。斯くて一回の耻辱を
も被らずして役全く終り、國民は綠門國旗、紅燈樂隊、萬歲聲裡に凱旋
の師を迎ふるの光榮を得たりき。

爾來十年を経たる今日、端なくも露の亡狀日本をして赫怒せしめ、
更に東亞の天に戰雲の漠々たるを見るに至れり。露國や清國と異な
りて文明の度敢て低しとなさず、その疆土は我の五十倍に餘り、實

に世界に於ける一大強國なり。嘗て歐洲を席卷せし千古の英雄ナポ
レオンをも散々に打破りし一大強國なり。而して我これを敵とし
て怯ひるまず、既に仁川に勝ち旅順に勝ち、今や東洋の海權悉く我に歸
し、なほ幾萬の貌貅雲の如く海を蔽うて北す。馬に鴨綠に飲ふの日
期して待つべし、旗を哈留賓に樹つるの日期して待つべし、世界の
強國露西亞帝國が戈を投げて罪を謝し命を我に請ふの日實に期して
待つべきなり。

あ、壯さかんなる哉國威の振ふや。而してこの事や實に將士の決死に依
れるなり。聞くならく現今世界の兵法に於て、砲臺を背にして森列
せる艦隊とは決して對抗すべからざるることとなり居れりと。しかも
我勇敢なる水雷艇隊は第二回旅順攻撃に際して、彼の對抗すべから
ざる艦隊に大打撃を與へて一新例を開けり。將士決死せずんばいか

でこの冒險を克くせむや。あ、決死なる哉、決死なる哉、死を決し
て初めて大に活くるを得るなり。

死を見ること歸るが如しとは、古來東洋人の美なりとせし所、然
れども科學的文明大に進み、他界に對する信念衰へ、個人を重んじ
生命を貴ぶの今日に於て、なほ君國の爲に貴き生命を抛つ事恰も歸
るが如き美風の我に存せるは誇るべき事實ならずや。

抑かゝる美風の養成せられしは何にか原づく。秀麗なる國體もど
より其因たり、壯嚴なる歴史もどより其因たり、而して其國體の秀
麗を教へ、歴史の莊嚴を教へ、君國の爲には笑て死せよ、と教へし
ものは誰ぞ。大政治家か。非ず。大詩人か。非ず。大學の教授にも
非ず。中學の教諭にも非ず。これを教へ、且つ今も教へつゝあるは、
實に尋常高等小學校の先生ならで他にあらざるなり。

われ未だ十歳に足らざる幼童にして、郷里の小學校に通ひし折、
校に某といふ先生ありき。先生一日亞細亞の地圖を掲げて説明する
に際し、樺太島を指ざして、千島樺太交換事件を畧敘し、而して曰
く、日本が斯る不利益なる交換をなし、は何が故ぞ。あ、諸子よ、
日本が露國と比して弱國たりし故ならずして何ぞや。さて今日は如
何。今日に於て日本果して露國其他世界の強國と對立し得べき位置
に登れりや如何。あ、未だし、日本は今日もなほ弱き國なり。
貧しき國なり。更に、日本をして強からしめ、更に、日本をし
て富ましめ、列強の間に立ちて國威を輝かすを得るに至らしむるは、
實に諸子の執るべき務なり。諸子のなすべき大事業なり。諸子これ
を思ひこれを念うて勉めざるべからずと。

あ、この教訓や、若し中學以上の教室に於て聽かされたらむには、

吾人は或は陳腐なる説平凡なる論として、一笑に附し去りしならむ。
然れども小學校の教場に於て、小學教師の口より發せられたるこの
教訓は、いかに我等の小さき胸を刺したるか、我等は幼な心にも、
雙肩に懸る責任のいかに重大なるかを感悟せしなり。我はこの折の
先生の容姿舉動言々句々今も忘るゝ能はざるなり。

苟くも小學に入りしものは誰しも斯る類の刺撃を受けし經驗ある
べし。かの普佛戦争の結果、佛國大敗して、アルサス、ロレインの
二州を讓與せし後、佛國のあらゆる小學教師は、兒童にこの敗軍の
顛末を語り、國辱の紀念たる二州の名を堅く記憶せしめて、爲に國
民の一致、國基の鞏固を、非常なる度に達せしめたりといふ。

嗚呼尊き小學教師や、彼等は羽織の木綿なるに甘んじ、袴の小倉
なるを耻とせず、白堊の粉を被り、墨汁の滴に汚れつゝ、日々東西



をも辨へざる兒童に對して、極めて忠實に教鞭を執りつゝあるなり。彼等は兒童に對して萬知萬能の人たり。兒童はあらゆる知識を彼等に仰ぐなり。あらゆる判断を彼等に仰ぐなり。兒童は彼等の言に一點の疑をも挿まざるなり。悉く眞理なりと信するなり。彼等の是とする所兒童悉くこれを是とし、彼等の非とする所兒童悉くこれを非とす。彼等斯々の事あり喜ぶべしと述ぶれば、兒童は雀躍して喜ぶなり。彼等斯々の事あり悲むべしと述ぶれば、兒童は流涕して悲むなり。彼等斯々の事あり憤るべしと述ぶる時んば、兒童は實に切齒扼腕して憤慨するなり。而してこれ等小學教師によつて與へられたる感情は、兒童の腦裡に深く刻せられて、幾多の星霜を経とも決して磨滅せられざるなり。成人となり老齡に達し、幾百の禍福に遭遇すとも決して磨滅せられざるなり。是を之れ國民的感情といふ。



國民的感情は實に小學教師三寸の舌より注入せらるるなり。今や正義の爲、人道の爲、日本國の爲、陛下の爲、彼れ露討ち果たさるべからずとは、四千萬の國民一人の如く一致したる大願なり。大目的なり。出で、征する者も、居りて守る者も、劍を執る者も、劍を執らざる者も、唯君國を思うて一身一家を忘るゝなり。この火よりも熾なる熱情、巖よりも堅き一致を、見るに至らしめしは、實に多く小學教師の力に依れるなり。この莊嚴なる勢力、この偉大なる貢獻は、恐らく國民の知らざる所なるべし。小學教師自らも知らざる所なるべし。吾人は將士の勞を謝すると共に、小學教師の勞を謝せざるべからず。將士の勳功を謳歌すると共に、小學教師の勳功を謳歌せざるべからず。國民は、國家を護る爲に、國力を張る爲めに、俊英なる

小○學○教○師○の○極○め○て○必○要○な○る○こ○と○を○決○し○て○忘○る○べ○か○ら○ざ○る○な○り○。國○民○
は○、小○學○教○師○の○尊○重○す○べ○き○人○士○な○る○こ○と○、優○待○す○べ○き○人○士○た○る○こ○と○
を○決○し○て○忘○る○べ○か○ら○ざ○る○な○り○。



鶯 笛

竹林梅の林の間なる古き庵に墨製る叟
無憂樹下陽炎燃えて永き日を麻耶夫人の夢未だ醒めず
水晶の簾を洩る、簫の音に景雲動く龍樓の春
裏町の生垣續き花散りて飴屋の笛の遠ざかり行く

誰が懸けし櫻の枝の空瓢吹き鳴らす風に夜半の花散る
磬の音に白桃緋桃散交ひて色奇しき禽塔に飛ぶ



責 任

夜が更けるに従つて寒いこと夥しい。火をうんとおこして徹夜の
讀書。一時、二時、三時、感興湧くが如しであるが、奈何せむ頭が
痛み出した。斯ういふ時には水の様な空氣に曝すに限ると、雨戸を
押開けて庭へ飛び出た。

月が實に良い、風は非常に冷たい、體が引締るやうで寒いながら

に一種の爽快を覚えて、霜柱を踏みつゝ、徜徉して居ると、ふと影がさした。仰向いて見ると、これは妙だ、薄綿のやうな小さな雲に乗つた、子供見たいな者が、空中に彷彿して居る。は、ああれあ本の表紙畫などでお馴染のキュピットだな、本郷臺は乃公の本場だてえな様子をしてゐるのが癪だ、ちと調弄つてやらう。

「おい小僧、話相手に降りて来い」と聲を懸ける、とつい目の先まで降りて来た。月の光でよく見ると、これあー驚いた、繪にあるのは大違ひ。成程羽は附いて居るが、顔から手足から、身體中一面に小さな角が生へて居て、まるで金米糖の化物だ。そしてそれが變な聲をして、兩手で目を擦りながら啜泣をして居る。「おい不景氣な化物だな、お前はキュピットぢやあ無いかい」、「はい、私はそんな粹なもんぢやありません、事件の子の責任です」、「あゝ、さうか、よく

新聞なんか責任々々といふことが出て居るが、僕はどんなものかと思つてたら、始めてお目に掛つた、責任てえなあ金平糖の化物のことか、そしてまた何を泣いて居るのか、その理由を聞かうぢやないか、まあ涙を拭いて、其處の梅の枝に腰掛けて詳しく話して呉れ給へ、

「私は今名乗つた通り責任といふ者で、何か事件が起ると、其途端にひよつくりと生れ出るので、而して誰かの肩に引懸らなきあならない性質を持つてます。この角の澤山あるのも、引懸り易い爲です。」

このついお隣に内槍さんといふのが居ませう。此間彼處の五つになる男の子が、森川の通りで自轉車に衝突して、足に怪我をした騒は貴君も御存じでせう。私はあの騒ぎの刹那に生れたのです。あの時あの子を守りして居たのは、彼處の炊婢でした。私は生れるなり直

ぐ炊婢の肩に止まつたのです。すると炊婢は、「坊ちやんが可けないのです。妾が中央へ出ちやあ危い」と言つてるのに聞かないで、獨りで往來の中央へ出なさるもんだから、こんな怪我をなさるんです」と云つた、私は氣の毒だと思ひながら、泣いてる坊ちやんの肩に移りました。

それから炊婢は坊ちやんを抱つこして家へ歸つて、何も彼も悉皆子供に抹り付けて顛末を語つた。すると細君は非常に憤激しました。「いふことを聞かないのは子供の當前さ。何の爲にお前が附いてるのだ。全體森川の通りなごへ連れてくが悪い。なせ椎の木邊の靜かな所で遊んで居ないのか。適守りをさせると、直ぐ此れだ。雜司ヶ谷の木兎見たいな眼玉が二つ付いてるぢやないか。必度子供は手放しておいて、繪端書の看板でも口を明いて見てたんだらう。而して坊

ちやんが言ふことを御聞きなさいませぬので等と、よくも云へたもんだ」と嚙付く様に叱りつけた。それで私は、また炊婢の肩に止まつたのです。

そこへ主人が歸つて來まして、細君に向つて、「そんなにお前が喧しくいふ権利は無い。臺所を手傳はせるのは可いが、子供の守りは必ず母親が自らしなくてはいけない、奉公人に任せるべきものぢやない、といふ事は、毎々言ひ聞かせてあるぢやないか。それを守らないで、今更炊婢を叱つたつて仕様が無い」といふのです。だからわたしはまた細君の肩に飛び付きました。

すると細君が向き直つて山科のお石といふ見得で、「貴郎は實に健忘性ですねえ、今朝お出かけに何と仰いました。明日は會に出るんだから、この羽織を是非今日中に仕立て上げて呉れ、と仰つたぢや

ありませんか。妾だつて手が二本しきありません。子供が傍に居つちやあ、とても仕事が出来ないし、今日中には是非仕上げなければならぬんだし、據なく炊婢に子供を任せて、肩を凝らしてやつこのことで此通り仕立て上げたんですよ。そんなことを云つて妾を責めなさるなら、なせあんな急な無理な命令をなさるんです、子供の怪我也、もとは貴郎の故なんですよ」といふんです。だから私は更に主人の肩に飛び移りました。

それから夫婦の舌戦が、暫く酣でした。その間私は彼方へ飛んだり此方へ飛んだり、ちと古いが五條の橋の牛若の様な體裁でした。そのうちに奥の間から白髯の隠居さんが出て来て、これはまた忌に落着き拂つて露店の賣卜屋のやうに咳一咳して、「災難といふものは全く運ちや、天ちや、人力の如何ともし難きものちや、お前達の故

ぢやない、諦めるが善いわさ」とこの御裁判これで辛つと夫婦喧嘩の治まりは付いたが、困つたのは私です。先刻から大分永らく牛若を演じたので、草臥れて居るのに、隠居殿の言で、到頭此處に居れなくなつて、天の神様の處まで行かなければならなくなつたのです。

仕様が無いから雲を呼んで、羽で梶を取りながら、遙々昇つて行きました。そして辛つと神様の傍へ着くと、神様は、「俺はもとより人間世界の見張りはして居るが、いかに何でも、そんな小さな事にまで引合に出される筈は無い、そんな事件から生れたお前は、無論人間のどれかに止まるべきものだ。それからまた、お前はいつまでも、そんな角だらけの身體で居るのでは無うて、お前を安全に肩に止まらせて、過誤は過誤にして他に謝するといふ人間があると、頓てお前は美しい幸福の神と成つて、其人間を守るといふ、目出度い

事になる。さういふ人間が澤山あればある程人間界の幸福が増すのだ。つまりお前が人間界に生れるといふことが人間に取つては幸福なことなのだ。それに天まで逐ひ昇せる人間も人間だが、自分の身分も顧みないお前もお前だ。速に下界に降つて、然るべき人間に取附いて、頓て目出度い幸福の神となれ」どの御詫宣。

それで又々私は降りて來たんですが、内槍さんでは相變らず傍へ寄せ付けても呉れないんです。前にお話した通り、私は人の肩に引懸らなけあならない性質で永く肩を離れてると死んでしまふのです。幸福の神にも成れなくて果て、しまふんです。あ、斯うして中有に迷つてるのは實に辛いんです」といつて、また歎歎を始めた。

これを聞いて、僕はつくづく過去を考へると、隣家の不届を罵る譯にもいかない。大分自分にも後暗いことがあるので、大に言に窮

して、せうことなしに空を眺めて居ると、まだ彼方此方に同じ様な責任の、大きいや小さいのや種々な姿のが見えて、同じ様な泣聲が啾々と聞えて來る。

やがて上野の鐘が曉を報じて、鴉が啼き鶏が鳴いて、月が淡れて、星が消えて責任の姿も解なくなつて仕舞つて、曙の光は華やかに大學の屋根から八方に散つた。僕は大きな嚏を續けてしたから、風邪を引いたと思つて、急いで部屋へ這入つて枕について、午過に目を醒ましたが、責任を見たのは、この眠つたうちの夢であつたのか、また眠らない前の事實であつたのか、その所は未だに解らない。



盲乞食

僕が嘗て家を探すために殆ど終日歩き回つたことがあつた。其の一日の中に絶妙なる對照を見た。

僕が丁度菊坂へ來懸つた時に、五六歩前を一人の女の盲乞食が、例の憐れな調子で惠みを乞ひつゝ、歩いて行く。行き過ぎ様にふと顔を見ると、僕が學校に居る頃からよくこの邊を徘徊して居つたのである。もとより何の氣にも留めずに、それから方々を回つて根津權現を抜けようとする時、あの門の脇で乞食が二人話をして居る。

僕は實に驚いちまつた。乞食が話をするのに何の不思議も無いが、其の一人はたつた今菊坂で逢つた女乞食であるのに、兩眼明らかに見開いて、啣へ烟管で悠々と足を伸して話してゐるのである。金毘羅

様の御利生か弘法大師の御利益かただしは此處の權現様のお蔭かは知らぬが、餘り効驗ききんが早過ぎる。

彼は白晝公然人を欺いて、奪ひ得たる鳥目を、歸つて數へる時をも待たず、途上、しかも同區内に於て目を開いて、平然たるものである。

しかし、この乞食の大膽にのみ驚くでもあるまい。この乞食の罪をのみ責めるでもあるまい。金や名譽の爲には、あらゆる手段をして耻ぢぬ世の中、收賄事件を慷慨する先生が、實は危く網を免れた人であつたり、優等生の名噴々たる生徒が、カンニングの妙手であつたりすることは珍らしくない。これを思へば角を隠して歩いてる往來の男女、多くはこの乞食の類である。寧彼の如きは其の中の最も無邪氣なものかも知れぬ。

こんなことを思て厭な心持になつたが、その日の午後である、疲れた足を引きすつて歸途に就いて、小日向水道町へ來ると、又一人の女の盲乞食に遇つた。これは破れ三味線を抱へて居る。

今其處の長唄の師匠の家の垣に寄り添うて、頻りに内の絃聲に聽き惚れて居る。内では今吉原雀の本調子の序が濟んで、二上りに移つて、「その手で深みへ濱千鳥通ひ馴れたる土手八町口八町に乘せられて」といふところで、三筋の糸は婀娜な音色を盡して居る。

外に立つて居る盲の態度は實に趣味あるもので、見えぬ目を動かしたり、首を振つたり、時々音せぬ様に、おのが三味線の糸を指で打つて、其の手を眞似て居る、俣が袖を摺つて通つても自轉車の鈴が耳近く響いても、小動をゆるぎもしない有様は實に尊い見ものである。僕は暫くその様を熟視して居たが、徐ろに歩を移して曲り角にな

つて振返つて見るとなほ依然として立つて居た、彼はあの長い唄の終まで聽き果てるのであらう。あ、彼は家毎の軒に破れ三味線を弾いて、一厘二厘の恵みに露の命をつなぐものである。一軒でも多くまはらねばそれ丈の損である。多くの唄を覚える必要も無い身である。しかし彼は確に三味線そのものに趣味を持つて居る。其の妙音を味ふ爲めには學ぶ爲には、時の経過も錢の損失も身の危険も一切忘れて居るのである。

僕はこの清らかな盲女の爲に、根津境内で得た不快を忘れてよい心持になつて家に歸つた。



義 妓

名は忘れられど、長沙の里に噂高き唄女、甚く秦少遊の樂府を愛で、聞けば寫し寫しては吟み、これならではと深く思入りけり。こゝにかの少遊訖しくも人のまきぞへに、罪を被せられ、遠き南の國に流さる、身となり、旅路悲しくもこの長沙を通りけるが、あはれしよしこゝに憂さをも晴らさばやと思ひて、唄女のよきは非ずやと人に問へば、なにがしといふ女殊の外なりといふ。殊の外なりとはかたはらいたし、都より千里距てるこの里の女、さこそ土の香ありて卑しからめど少遊心に笑ひしが、さて行きて遇へるに、世にも美はしき姿都にも稀なるべく、家居さへ清げにしつらひたり。少遊思ひの外にて賞むること限りなし。

物語のひまに、ふと傍の机なる書を手まさぐるに、「秦學士詞」と題したり。これはと思ひ繙きてつくぐ見れば、卷の中悉くわが作りし唄にて外のは更に無し。いぶかしさに堪へず、この秦學士といふはいかなる方ぞ、と素知らぬふりして問へば、女目の前に其の人ありと知らで、才あり品高きこと等細やかに語りぬ。さて御身はこそ歌ひ給ふやと言へば、常に習ひ侍りと答ふ。少遊霧に迷ふ心地して、樂府作る人世に數知らずあるものを、この人のに限りて愛でつ習ひつ歌ひつする御身は、なご心なくてやは、秦學士に遇ひしことにてもありてかど問ふに、をかしの御言問ひよ、秦學士は花の都の貴人、妾は片田舎の賤の女、學士遙々どこゝに來給ふこともあるまじく、よしや來ますとも妾如きは願みもし給はざるべしとかこちぬ。少遊戯れて、御身秦學士の唄をこそ愛づれ、現前其の人に遇は、何の情

もかけまじといへば、女いたく嘆きて、あはれ一度幸ありて秦學士に遇ひ奉らば、婢となりても、後の世まで恨あらず、としみづく思ひ入りし赤心嬉しく、さらば眞を明かさむ、我こそ秦少遊なれ、こたび公に罪蒙りて流さる、道なり、といふ。唄女大に驚きいかにせむと惑ひしが、やがて徐ろに退きて、この家の媼に事の由を告げぬ。媼出で来て少遊を堂にのぼらせ、唄女は冠嚴めしく、階の下に立ち、北に向ひて拜しけり、少遊其席を立ち禮を避けんとすれど、媼袖を取りて動かさず。やむなく拜を受けぬ。それより宴になり、左より右より酒を勧め、杯一めぐりして、女少遊詞の二節をぞ歌ひける。かくて醉心地面白く夜に入りて寔果てしに、女少遊を宿さむとて、自ら褥をのべ枕を据ゑ、彼夢に入りて後おのれも眠りぬ。さてあくる朝は女とく起き出で、姿を正し、湯桶を捧げて帳の外に立ち、

謹みて少遊の醒むるを待ちけり。ほどくこの心ばへに感じ入り、こゝに目を重ねしが、何の厭らしきことなく愈禮を厚うしてもてなしけり。

はや別れとなりし折、唄女いひけるは、妾かゝる賤しき身の、しばしにても御傍に事へ奉りしこと嬉しども嬉しう侍り。君は公の仰なれば長くえ留り給はず。妾は切に御供なさまほしけれど其れも叶はず。この上はたゞ身を清く守りて御歸りを待ち參らせむ。再び北にのぼり給ふ折更に立寄給はゞこの上なき喜びにこそと、少遊諾ひて袂を分ちぬ。その後年を重ねて少遊はあはれ果敢なくも藤の地の露と消えにけり。

かの唄女は別れて後門の戸堅く閉ざして、客人を拒み、媼とたゞ二人身を謹みて月日を送りき。ある日この女晝寢の夢に、少遊に遇

ふと見て、あはれく、妾かの君と別れてより更に夢といふもの見ざりしに、今日しもかゝる夢見しはよも吉き兆にはあらず。學士の御身の上覺束なし、とて下部走らせて問はせたるに果して悲しき報知得て歸り來ぬ。よしやあの世の人となり給ふとも妾の心いかで變らむと、しほらしう喪服着て、幾百里の長路遙けく、かの館に着き、門守りに身の上明かして内に入り、少遊の棺を打ちつ回りつ、泣きてく泣き伏して遂に絶入りぬ。在りし人々驚きて抱きおこせば、はや身内冷えわたりて可哀や少遊のあとを追ひけるぞぞ。(情史)



糸遊

逢戀の猫に冷たき瓦かな
陽炎のすれく高し城の垣
夕風に蝶と董の別かな
礎を守り顔なる胡蝶かな
うた、寢の夢又夢や虻の聲
永き日や桃太郎待つ爺と婆
琴知らぬ妻さうくし春の月
鞆を下りし女の吐息かな
髯撫で、よい智慧も出ぬ日永哉
花ちらりく端艇の美少年

行春を一本細き柳かな



葱の露

今友去り、我獨り残る。小雨降りみ降らずみ、土藏の雀と鐘樓堂の鳥と相語る。錢の如き牽牛花凋まむとし、つり葱の露玉の如し。時この時、大魔來つてわが腸を裂く。句あり、
うき人を葱にやどる雫かな

世に純なるものなし。白刃を閃かして財を奪ふ、彼れ盗人、世に

棄てられ道に遠ざけられ、萬斛の涙干て、次ぐに熱火を以てしたるもの。金庫を開放して貧を救ふ、彼れ仁者、地位を保つためか、世望を得んが爲めか、醜怪の利己の策假に面を被りたるもの。誰か是をしも純惡といひ純善といふ。誠意の時は去り、策略の代は來り、商人氣質は他を壓し去らむとす。なんぞ戀のみ純なるの理あらむや。
きれ草鞋底に見えすく清水哉

瓢を携へずして只花下の席に日を暮す者、専ら花を愛するの人なり。妓をかへして獨り夜半の月に嘯く者、唯月の美を知て他を顧みざるの人なり。萬人これを見て痴と罵りこれを誹て狂といふ。愛憎の故を問ふものは愛憎の何たるを解せざる者。あ、今の世誰と共にか直覺の妙を語らむ。

道連れの理窟好きなる暑さ哉

我、人を怨むの愚なるを知り、世を憤るの妄なるを知る。しかも
なほ醜しとの丈夫まうらむ、半夜悶々の情を遣る能はず。會堂に行かむか、禪に
參せむか。

おそはれて蚊帳つかんだる夜半かな

たゞ道にのみ是れ則る人、果して人の上乘なる者か。たゞ情にの
み是れ走る人、果して禽獸に近き者か。心ならずして道を行く人と、
衷心情に熱する人と、何れか尊く何れか卑き。人は不知いさ、我は唯純
誠を貴とす。

夕立の降るだけ降て海の月

千載の下に知己を待つといふ、寧ろ迂ならずや。世を罵るの人は
世を率ゐる能はざるの人。人を誹る人は人を容る、能はざるの人。
俗を避けて山下庵いほりを結ぶ、これ屏風畫中の人なり。活人なんぞ畫人
を學ばむ。

店閉す小厮もつき、けり子規

年少氣銳の士、孔丘の教戒なほ足らずとし、佛ぶつ陀だの説法なほ信せ
ず。如かず自ら行ひ自ら教へむには、遠き慮に過ぐるは逡巡に陥り
忍耐のあまりなるは遲鈍に傾き易し。大に勉め大に遊び、大に泣き
大に笑ひ、而して百鍊の鐵となれ。

仙佛魔現じ盡すや雲の峰

昇らむとして落つ、なんぞ絶望するに足らむ。その昇り途不可なりとの知を得たるなり。危に近よりてこそ危を避く術も得れ。美人の握手、凶漢の鐵拳、我にとりて同じくこれ快。百雷眼前に落つ、戦慄する人とならずして快哉を呼ぶ人となれ。かの劇を見る者、或は泣き或は恐れ、而してなほ快と稱す。世を見るまたかくの如くなるべし。

うたれてもなほこそ光れ大螢

あ、失意の士、あ、失戀の人、汝等嘆くを止めよ。こゝに失へばかしこに得よ。得れば必ず失を忘れむ。人に常住の見なし、不易の智なし。一の因一の果を得れば事の去りたるなり。汝等いたづらに死をな願ひそ、一因一果ここに生を終るは小人なり。既に生をこの

世に受く、よろしく萬因萬果を通してながらふべし。され共我世とともに汝等を笑ふ者ならむや、誹る者ならむや、罵る者ならむや、汝等のために同情の涙を揮ひ、汝等の手を執り、汝等と共に歌はむ。されど汝等に憂ひを贈りし者に對し、斧をふるひ刃をかざすを助くる者ならず。只怨恨の行方を天に任じて、軽く眼を他に轉せんことを勸む。

さつばりと消えて涼しき花火哉

入相の鐘に五月雨はれ、夕風に虹の色はえたり、小童螢狩らんと友を呼び、娘子新調の浴衣を門に誇る、氷屋急ぎ蟲賣走る、今宵公園の賑合察すべし、我もいざ車を驅て、球簾の月をめむ哉。

電燈や大妓小妓の舞扇

朝顔の歌

街談文々集要亥の巻の下に「朝顔の奇怪」と題せる一話あり。湯島手代町に岡田彌八郎といひて御普請方の出方を勤むる人に、おせいといへる美しき一人娘あり。歌をまなび、十四歳の時朝顔の歌を詠す。其冬歿せり。乙亥の秋この娘の文庫の中より朝顔の種子出でたれば、靈を慰めむとて、母なる人庭に蒔き色々世話しけるに花咲かず。或日彌八郎東叡山の御普請に出で母晝寝したるに、夢の中に娘の聲にて、「おかいさま花が咲きました」といふと見て醒めたるに一輪の朝顔まさしく咲き居たり。その花翌朝まで凋まざりしとぞ。予一讀慘愴の感に堪へず、採て詩材となす。

世心知らぬ薦たさや
寝亂れ髪を搔き上げて
裾かるく庭草履

たゞ歌をのみ思ひ寝の
市松模様の華美浴衣
踏めば冷たき露濕り

干ぬ間を榮の朝顔を

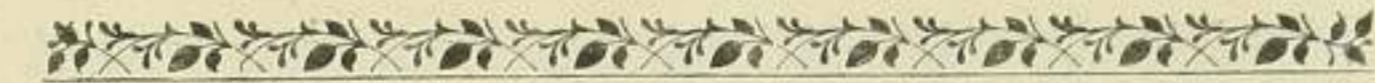
うち眺めつゝ

「いかならむ色に咲くかとあくる夜を

まつのとぼその朝顔の花」

三五に満たぬ齡にて
愛での御言葉身にしみて
寄せては返る浪の泡の
變らぬ命運同じくは
吹きしか嵐木枯の
湯島の花と唄はれし
晴着振袖ふり棄て、
あわたゞしくも亡き數に

よくぞ詠みしと師の君の
なほこそたざれ和歌の浦
果敢なく消ゆる人の世の
うき世の憂さに泣かさじと
風の情も情なや
才女おせいは來ん春の
師走の闇に飛ぶ星の
入り果てしこそ哀なれ。



「あ、朝顔を好きにしは
あまりに早き歌の才
いとし思ひ子先立て、
繰反しつ、涙川
天満宮の梅が香や
誰忍ばずの蓮の露
様も斯くやと思ほへば
盡きぬ悲いと切めて
探ればあはれ
奉書の包細やかに
色様々の書付けは
見れば目も眩れせきあげて

疾う凋まむの兆なりし
愛しと佛や召されたる」
親の愚の繰り言の
流れて早き月日かな。
忍が岡の花明り
あはれあの世の無熱池の
あきらめられぬ女親の
おせいが手馴れし小文庫を
朝顔の種子
紅、白、絞、濃紫
やさし娘の筆の跡
籠めし心は空にせじ



魂天翔けり垣に来て
取るや小鍬の鍬の柄に
恵みの露の繁ければ
蔓も戦げば葉も戦ぐ
花咲かざらば亡き魂に
種は七種ありと言へど
清き執もや残るらむ
亡き跡までの親の慈悲
獨り留守居の日の永さ
間遠に響く風鈴の
うとりくと轉寢の
枕に近く

又も盛りを見よかしと
傳ふは露の外の露
やがて小竹に纏ひ寄る
たゞ恨なり花なきは
何を手向けむ秋草の
汝が艷容に取分けて
咲けかし咲けよ咲けかしと
残る暑さの身も懶く
音も夢誘ふ八つ下り

「母上、咲きぬよ、咲きぬよ、母上、」

「おせいか」と一聲、

眺め遣る夢の行方、

蕾も見ざりし、

雪より真白に、

咲きしよ朝顔、

問へば答ふる朝顔の

日影淡れて東叡山の

晚鐘高う響き渡りぬ。

我ど我驚き、

あな、あな、怪しや、

朝顔一輪、

玉より色澤めき、

あはれおせいの魂や何處と

けた、ましくも釣瓶落しの

晚鐘響くよ東叡山の



夜の聲

心のなやみは晝と夜とを分たず、胸の狂ひは限りど休みとを知らず。夜の静寂人界を蔽ひ、我獨り醒むる折、遠く唱歌の聲を聞けり。其聲漸く近づけば、皆うら若き少女のそれなり。中にわが戀人の聲紛れず高くきこゆ。我は心の底よりほ、ゑみて其の姿を見むとすれど、たゞ聲のみなりけり。

忽ち其聲はたと止みて、せ、ら笑の聲四方に起れりこは人を玩ぶ戀の魔神の聲なり。戀人の我を嘲み笑ふも交りてきこゆるに、わが眼は覺えずあがり、衾を蹴て立たんとする時、聲は啾々たる怨み泣きとなりぬ。こは戀を失ふ者の魂悉く集りて泣けるなり。わが涙も滂沱として兩頬を流るゝなり。

忽ち中空にさゝやきの聲あり。前きの世にわが苦しめし人の相集ひて、この世に我を苦しむる企を語るなり。その聲あるは雲の上高く、あるは枕邊近くなりて、果ては風の響に消え行きぬ。

風は強くく吹きすさみぬ。戸障子悉くきしめく中に皺枯れし聲にて呼ぶ者あり。わが庵をめぐりく、往きつ戻りつ隙を求むるが如し。あゝこれ死神の夜嵐に乗り來りて我を誘はんとするならずや。ありて甲斐なき身、喜んで従はむと、高く應といらへば、聲夜氣を衝いて遠く響き、四邊しばらく寂たり。

寂たることや、久しく、靜に物の降る音聞え初めつ。降ること漸く繁くなり行きて、地に物の燃ゆる響たかし。あゝ魔神の降らす火の雪は今や全世界の「まこと」を燒盡すなり。忽ちにして又大地を裂きてとぶ奔流の轟きあり。人心の「あはれみ」はつゆも残らず、このために流れ果つるに非ずや。魔の炎と魔の流と、かはるく、耳朵をうつうち、聲漸く低うなり行きて終に昏睡に陥れり。

次の夜もかくの如し。次の次の夜もかくの如し。人はいふ、そは血のめぐる音なりと。我は信せず、たゞわが血わが體內をめぐる響の、かく様々の聲をなすとは我斷じて信せざるなり。



籠 枕

蠅拂ひくく食ふ茶漬かな

梅雨晴や小さき鮮屋の店開き

帷子や碁に勝ち誇る大和尚
水飯に眼光清き給仕かな
風鈴やさらりとしたる小酒盛
蚊帳吊て嬉しいやうな一夜かな
讀んだノート讀まぬノートや子規
蝙蝠を吐き出しけり鬼瓦



書架氛埃

一、古書、

ふるき木焚くに宜し、ふるき酒飲むに宜し、ふるき友交るに宜し、ふるき書讀むに宜し、(アロンゾ、オフ、アラゴン)、

この國の博士どもの書けるものも、古のは哀なること多かり、
(徒然草)、

石上ふるの高はし古き世をふみ見る度に戀ひ渡りつ、(佐喜草)
古きを貴ぶもの豈書のみならむや。像にまれ、書にまれ、器具にまれ、時の觀念を離れて見れば陋劣笑ふべきものと雖、古代の遺物なるが故を以て、萬金をも惜まざるは世の常なり。古そのものが伎術以上の價あればなり。古書は聊趣を異にす、書籍は著く社會の淘汰作用を被るものなり。千年以前の書は千年の淘汰の關を打越えし書なり。無限距離競走に於て足力の健なるを誇りつ、ある撰手チャンピオンなり。古書の價値は古そのもの、價と共に書籍そのもの、價を意味せり。

古書の讀むべきはこれが爲なり、古書を讀んで古を慕ふに至るもこれが爲なり。

したふから流れての世も其かみの心くまる、水ぐきのあと、(春葉集、)

古の人の心を友千鳥ことごとてやあとのこしけん、(小野古道、) 書は心霊なり、古書は古人の心霊なり、不滅に傳はれる心霊なり。吾人の心霊これに接する時んば吾人の天命創始以前遙遠なる所に往きて相會する時なり。時間の束縛に打克てるの時なり。誰か思はざらむや、古書を讀んで心霊をして時間の束縛に打克ちて遊ばしめむことを。又誰か思はざらむや、不朽の書を著して、心霊をして吾人の天命終局以後遙遠なる所に、後代の心霊と相會せしめむことを。教へおく法の道芝ふみ見れば露もあだなる言の葉ぞなき、(公什、)

親の親の世をくみしらる水莖の跡や子の子のしるべにはせむ、(春葉集、)

誰かいふ、道義は時代に依りて變移すと。變移するものは道義の外面のみ、流行の殻のみ。道義の中心は不易なり、時代と相關せず。吾人古書に教訓せらる、際深くこれを思ふ。

いにしへの昔の事もさだくと今たゞ今ぞふみよみて知る、(高田與清、)

天地の遠き始も見てぞ知る神代の書を今に傳へて、(村田春海、) よしや其千代の古道ふりぬともふみ見て遠きあとは尋ねむ、(同、) 淺薄なる讀書家は文字以外の意味を讀むこと能はず。かかる輩いかに古書を讀むとも古代に通曉すること能はず。一を聞きて十を悟り、一斑を見て全豹を知り得べき、鋭敏なる推測力ありて、初めて

明瞭なる古代の全景を眼前に出現し得らる、なり。

ひとり燈のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とすることこそこよなう慰むわざなれ、(徒然草)

かしこきや奈良の都の宮人と語ふものはふみにざりける、(うけらが花)

わけ入りて問ふも語るも静けしなやまこの書のふかき教に、(春葉集)

或は寒蛩砌下に鳴く夕、或は雪盛にして却て聲無き夜、燈を明かにして机に倚り、静に古人を友とし古人と相語る、何等の趣ぞ。この友や平等なり、貴人なほ匹夫と語る。この友や永久なり、我があらむ限り傍を離れず。

二、外國の書

からやまどかしこき百の道々もふみ見てぞ知る跡のまに、

(稻葉集)

遠つ國知らぬさかひの言の葉もふみ見る道に行きかよひけり、
(同)

書籍は縦に古人と語るを得しむると俱に、横に外人と語るを得しむるなり。彼の場合には時間に克てり。此の場合には空間に打克てるなり。されどここに難關あり。そは外國文を自在に讀破し得る能力是れなり。この能力を得るや一朝一夕の業に非ず。器械的奴隸的の長き歲月を経ざるべからず。漢字漢文の爲に一般の人が許多の歲月を費さざれば、常識だも得難しといふ時代は過ぎ去らむとす。慶事なり。外國文を讀み得ずとも醫學を研究して開業醫の免許を受くるに障碍なき時となれり、慶事なり。外國文を讀み得ずとも、西洋

史を研究して檢定試験に及第するに障碍なき時となれり、慶事なり。これ等の結果は翻譯の進歩を示せり、國文の自立を示せり。されどなほ未だし、日本は未だ邦文の淵鑑類函を有せず、邦文のエンサイクロペチアブリタニカを有せず、和譯一切經なく、和譯シェークスピア全集なく、和譯シラ全集なく、和譯ゲーテ全集なし。乏しきかなや。かくの如くにして學生は絶えず語學の研究に忙殺せられつ、學途を終るなり。しかも割合に得る所少なく、却て自國文を十分に學ぶ餘裕もあらで了るなり。あ、漢文を知らざれば常識だも得難き時代は去らむとすれど、洋文を知らざれば常識だも得難しといふ時代の去るは、今日に於ては殆期待し難き事に屬す。この缺陷を補ふ方法としては、大規模の翻譯事業に不斷從事する團體を建設せざるべからず。官省に於てか、大書肆に於てか、會社としてか、其法案

に就ては謹んで識者の教を俟たむ。

三、會得の困難

終夜窓のともしびか、げてもふみ見る道になほ迷ふかな、(權少僧都實壽)

書讀むとさ夜ふくるまでか、げても悟る心のともし火の影、(本居宣長)

ともし火の影にむかふもまばゆしな書見てもなほくらき心は、

(本居大平)

現代の人と雖、個々特有の思想表示法あるが爲にその著書を読み難解の意味に逢着することあり。況んや時代隔たれる書籍に於てをや。燈下に孤坐して不會得の條を左思右考す、夜は愈更け、腦は愈亂る、作者の筆足らざるか、我が思考力強からざるか、この際の

煩悶は學者屢受くべき苦痛なり。

凡そ内外の和漢の書反覆之を讀めば必ず其義を知る、義に於て疑ふ無しと雖再三乃至數四に及べば必ず道義の心に染む有り、手の舞ひ足の蹈むを知らざるの心、自然にして來る者なり、讀書の人必ず此の心を以て稽古すべきなり、(花園院御記)

難解の意味悉く氷解せらる、興ここに湧く。その書を愛する念亦ここに起る。更に讀み更に讀む。書と我と漸く相接し、書中に我あり、我中に書あり、遂に書と我と全然一となり了る。こゝに於て初めて眞の會得の境に入りしなり。

のこし置くひじりの文はありながら誠の道は知る人ぞなき、(亮遺稿)

我が讀破せし書我悉くこれを會得せり。眞價の那邊に存せるかを

悟れり。翻て世上を見るに、それ等の書を讀まざる者、讀んでなほ會得せざる者多し。これを知て心安からず、深くこれを慨ふるに至る。この慨へや實に教育家の第一要素なり。

四、讀まざる書

閉ぢたる儘の書は石塊と異ならず、(西諺)

讀書に音讀と默讀と積んごくの三法がある、(邦諺)

いつよりか開けながらの窓のふみ風ばかりこそ弄びけれ、(草徑集)

繪書を展して床の間に掲ぐ。客と談笑しつゝもこれを味ふを得べし、酒を飲み歌を謠ひつゝもこれを味ふを得べし。然れども書籍は繪書と異なり。専心熱中せずんばこれを味ふこと能はざるなり。懶惰の人なほ繪書に通じ易し。勤勉の人なほ書籍に通ずるを難しと

す。

外装を以て書籍を判断すべからず、(西諺)

貸本屋外題ばかりの學者なり、(柳樽)

予平生尙古堂に到りて書を買ふ、主人曰く某は宋本なり、某は

元本なり、某々は足利本なり、金澤本なり、實に日月を提げて、

康衢を往くが如し、(典籍秦鏡)

學者中に奇なる一民族あり、先輩と會する時、後輩と會する時、

殊にその初對面に際して、某書は某書は、と頻りに書名を喋々し、

其批評を云々す。而して實は一讀をもせざるなり。白河の關を知ら

ずして白河の關を歌ひし能因の無邪氣はなほ恕すべし。この族の書

を瀆し人を欺くの罪赦すべからず。學者として赦すべからず。彼等

は尙古堂主人の好繼嗣者たるのみ。貸本屋の好番頭たるのみ。

書は其の用法を教へず、(ペーコン)

論語讀みの論語しらす、(邦諺)

大丈夫書を讀まば、宜しく活讀すべし。書によりて得たる所は潛

勢力たらしめよ。折にふれ時にふれ、自己に對し、他人に對し、社

會に對して、十分に發動せしめよ。これをしも書を讀むといふなり。

否らずんば讀むと雖も讀まざると等し。かの書を讀まむが爲に書を

讀む輩は所得零なり、死讀者なり、蠹魚なり。蠹魚はなほ書を嚙ん

で口腹を養ふ。死讀者は養ふところなし。蠹魚に劣ること數等。

五、書に對する酷愛

燈火の影に向ひて窓のどの白むも知らず文を見しかな、(河邊一

也)

老いて尙ほ詩卷を把る、眼力已に疲ると雖、心志殊に未だ倦ま

す、(歐陽修)

重華詩を詠じて以て己を終り、仲尼易を讀んで以て身を終り、原憲潛吟して賤を忘れ、顔回精勤して貧を輕んじ、倪寬口誦して芸嫗し、買臣行吟して薪を負ふ、聖賢それなほ孳々たり、況んや中才と小人とをや。(東哲)

圍碁を好む者、佳境に入れば臨終の父をも顧みずと。圍碁は無用の閑戲、耽るを不徳とす。讀書は高人の要務、耽るを徳とす。俊通の妻は、京の物語ある限り見むことを藥師佛に祈れり。ダンテは店頭に讀書して行列の過ぐるを見ざりき。曹褒は寝ぬるに鉛筆を懷にし行くに詩書を誦せり。隣幾は驢に騎れる時鞍に據つて書を讀み、道を失ふに至れり。酷愛極まれる哉。

くるごあくご何に心を慰めむ書といふもの、なき世なりせば、

(亮々遺稿)

ふるふみの無からましかば今よりの秋の長夜を誰と語らむ、(同) 士大夫三日書を讀まざれば、義理胸中に交らず、鏡に對して面目憎むべきを覚え、人に向て語言味無し、(黃庭堅)

春や、暖風遲日蝶芳草に舞ひ、秋や、靜夜月明雁寒水を渡る。自然の美觀まことに盡くるなし。然りと雖吾人原始の代に生れず、未開の國に人と爲らず、獨り自然とのみ親みて怡々たる能はざるなり。書なる哉書なる哉、神の自然、人の書籍、この兩者あつて世棄つべからざるなり。

千萬世の心術を合せ、千萬世の治迹を聚め、千萬世の語言を傳へ、千萬世の理道を演ぶ、皆書に於てか是れ頼る、士や千年の後に生れて千年の前を知り、一物の形を具して萬物の理を悉し、一

室の間に處りて萬物の勢を周らす、書に非ずば曷んぞ以てこれを致さむや、(丘瓊山)

一室の内に居て天下四海の内を見、天地萬物の理を知る、數千年の後にありて數千年の前を見る、今の世にありて古の人に對す、わが身愚にして聖賢に交る、これ皆讀書の樂なり、(貝原益軒)

方尺に満たざる書籍、なほ意味に於て碧落より黄泉に至るあり。高い哉、大いなる哉。而して其高きを認め大いなるを認むるは、實に書を酷愛するの人なり。讀書の樂の高くして大なるを味ひ得るの人なり。

余は書籍に對する間ほど快く樂き時を知らず、(ジエームスシャーレー)

余は諸帝國の版圖を獻げらるることも、讀書の愛と交換する事能は

ず、(フェネロン)

書を受する人は、篤實なる朋友を要せず、有益なる教訓者を要せず、快活なる夥伴を要せず、有力なる慰藉者を要せず、(アイザクバロー)

我が友某子、學を好み又色を好む。嘗て大金を獲得し、悉くこれを懷にして、輕車、倡樓に向ふ。途に一書肆の主翁に逢ひて珍本ありと聞き、直に車を回らし、財囊を倒にしてこれを購ひ、欣々然として還れり。子や甚だ色を好むと雖書を受する更に甚だしきなり。あ、子が品性を非とする者は非とせよ、我は子が愛書好學の人たるを敬うて已まざるなり。

六、書と名利と

金庫に金を充たすよりは、書齋に書を充たせ、(リ、ー)

上の之を養ふ所以の者未だ其道を盡さず、下の人又時の昇平を幸として售るの急なるのみ。官既に手に到れば或は學ぶに暇なく、或は自ら學に用なしと爲す、(蔡虛齋、
碩儒、名を得るあり、利を得るあり。然れども其の名其の利は偶然の隨伴者たるのみ。碩儒はその得らるゝと得られざるに關せず讀書に耽り研鑽を事とせるなり。得らるゝとも喜ばず、得られずとも憂へず、孳々として死に至るまで已まざるなり。かくの如きを碩儒といふ。碩儒の骨は朽つべし、碩儒の靈は千萬歳を経とも活けるなり、輝けるなり。彼の金の爲に學ぶ者は金を得れば、書を棄つ。名の爲に學ぶ者は名を得れば、書を棄つ。向上こゝに止む。小なる哉、小なる哉。

七、書と俗人と、

我、書齋にありて賢哲と語る、書齋を出で、俗人と交ること能はず、(ウ・リアムウォーラー)

黄卷中、方に聖賢と相對す、何ぞ俗吏と語る、暇あらんや、(狄仁傑、

讀書の人多く寒暄を述ぶるにも拙し。交際場裡の失敗者なり。これをしも變物と罵る輩よ、彼は汝等が對する能はざる大人物と、常に對しつゝ、あるなり。汝等が解する能はざる大事件を、常に研究しつゝ、あるなり。かるが故に壇上なる彼が言語は極めて壯大なり。紙上なる彼が文章は極めて深遠なり。

八、書の感化、

それ虚無の書を読めば、則ち心頽然として世を厭ひ、軍陣の法を觀れば、則ち心奮起して其生を輕んじ、縦横の説を味へば、則

ち詭譎を思うて忠信を忘れ、刑名の學に熟すれば、則ち苛刻を喜んで廉隅に泥み、隱道の篇を誦すれば、則ち意先づ水石に馳せ、宮體の辭を詠すれば、則ち志益匣を出でず、文外に見はれて心内に動く、百變して百これに従ふ、諒に淳氣素より具はり通識傍照するに非ずんば、則ち其の敗壞する所となる、手を覆すが如きのみ、(肝江李泰伯)

濁浪空を排し、日星曜を隠し、薄暮冥々虎嘯き猿啼く時んば、人これを望んで、满目瀟然感極まつて悲み、上下天光、一碧萬頃、沙鷗翔集し錦鱗遊泳する時んば、人これを望んで、心曠神怡其喜洋洋たり、この人を化する力、豈に岳陽樓の風光のみならむや、書籍もまた斯の如きものあり、然りと雖紡績器械の絲を吐くが如く、年に月に日に、間斷なく發行せられて、代るく書肆の店頭に新裝を輝

かすもの、多くは是れ化せむとするものに非ずして、化せられしものなり、彼の靈界の王となつて人を化するは書の最も大なるもの、風潮に化せられて成り、而して風潮の化力を助くるものはこれに次ぐ、成りしと成らざりしと、人に對して相關せざるものは物質たるのみ、物質の爲になほ化せらるゝ、讀者も亦物質たるのみ。

良書は友の最良なるものなり、而して永久に最良なり、(タッパ)
良書は良友の如し、極めて稀なり、大に選むべし、(アルコット)

腦を働かす者は腕を働かす者より短命なるか、病魔はより多く勉學の人に禍するか、よし果して然らば然れ、學者の貢獻は良書を作るにあり、良書を作り得ば、短命憾みとするに足らざるなり、而して其良書とは何ぞ、必ずしも當代の良と認むるをいふに非ず、作者自ら固く良なりと信するものをいふなり、讀者中必ず良書と認むる

者あらむ。年代中必ず良書と崇むる時代あらむ。

吾人は悪友の爲の如く悪書の爲に墮落し易し。(ライルディング、
悪書を著はし、者は、墓に入るもなほ罪を犯しつ、あるなり、
己が骸の腐敗しつ、ある時なほ他人を腐敗せしめつ、あるなり、
(ロートサウズ)、

悪書より悪き賊なし、(伊國諺)

帝國圖書館の閲覧室を見よ、半は是れ年少の中學生ならずや。篤
學の志まことに嘉すべし。然れども私に憂ふ、彼等は書の良否を識
別し得る力あるか、悪書の悪書たる所以を看破し得る力あるか、と。
あ、これ杞憂か、あ、これ老婆心か。

九、讀書の時、

書を読むには、力の到る所に随ふべし、少しく倦まば則ち止め

よ、惟此の心間斷すべからざるなり、(吳康濟)

古書を多く見れば隙ごり、著述にか、れば五三日も手間取りて、
讀書のはかゆかず、こゝの所さてく、學者は誰も苦むことなり、

(南郭)

書を読むには、朝早く起きて、先づ假名書などを見、又は人の
見せおきたる詩文を読み、又校正の書をなし、又會業の下見など
といろくせらる、故倦み疲る、事なし、(先哲像傳、太宰春臺の
條)

學生たる間は讀書が唯一の職務なり。既に家庭を作り、家族を養
ふに至ては俗事紛々として讀書の時を得るや甚だ難し。然りと雖、
吾人いかに多忙に際してもなほ食ふなり。食は體を營養する所以な
ればなり。吾人已に食す、何ぞ讀まざるべけむや。讀は靈を營養す

る所以ならずや。強ひて讀書すべし、能ふだけ俗事を省くべし。吾人は俗事を處理せむが爲のみには生れざりしなり。

十、書の保存、

書の保存法は一言に盡く、曰く貸す勿れ、(西諺)

總じて御藏の御書物は儒者共に望み次第に御借しあるべき事なり、書籍は他の物と替り、かねて見置かずしては、急に用に立たぬ物なり、御庫に聚め置かれても見る人なければ反古を詰置きたると同然なり、蟲に喰せて捨てむは惜き事甚し、(政談)

見さしたらむところには、夾箋菜などを入れて、あからさまに角をな折りそ、爪もて字をな汚しそ、ましておよびに唾してなあけそ、手枕になせそ、頓の事ありとも消息文等な入れそ、うち損へらば、疾くおぎなひ、開き見る毎におほひなば、百千歳經とも破

れ損はむやは、(季鷹)

書の貸借は金の貸借の如く重んぜらるべし。斷然貸さざるも道ならず。漫然貸し捨てにして顧みざるも道ならず。そは人と場合を見て宜しきに従ふべきなり。假令貸さずとも其人にして書を重んずる觀念なくば、保存の事遂になし難きなり。實着ならざるを大なりとする若者よ、物を輕んずるを寛しとする若者よ、汝の書齋のいかに不整頓なるよ。汝は、書齋の、秀靈の鍾る所なるを知らざるか。書籍に不滅の生命あるを知らざるか。聞く清韓の人字紙を敬ふと。吾人謹んでこれを模範とすべし。



虎のなさけ

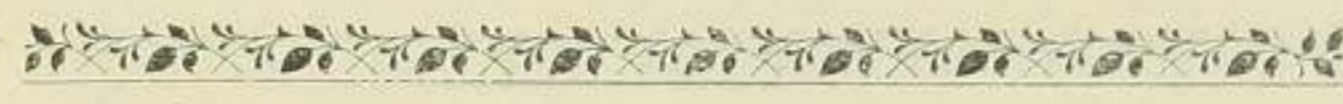
山西孝義縣のあたりは高唐孤岐なんごいへる山々群立ちて虎多く
住むところなり。ある朝一人の樵夫藪の中を行きけるが、誤りて虎
住む穴に陥りぬ。内には小さき虎二匹臥したり。この穴の様釜を覆
したる如く、三方は岩かごしく、一方はや、平にして高さ丈に
餘る壁となれり。こは虎の出で入る道なるべし。

樵夫この壁を攀ちんとして踊り舉り踊り舉れどもたゞいたづらに
磨くのみ。せん術なければ壁をめぐりて涙に咽びつゝ、死を待ち居け
り。折しも夕日落ち風一しきり吹き立ちて大なる虎嘯いて壁を降り
來れり。口に糜を銜みけるがそを小虎に分ち與へつ。樵夫の蹲れる
を見て爪を張りて搏たんとせしが、俄に身のまはり見めぐり何やら

む思へる様なり。や、ありて残れる肉を樵夫に食はしめて、おのれ
は小虎を抱いて臥したり。

樵夫思ふやう、虎は今肉に飽きたりとおぼし、されど夜明けなば
必ずわが命なからむと。さて夜も明けぬ。虎は躍りあがりて穴を出
で行けり。ひる頃になりてまた麂銜みて來り子に食はせ、餘れるを
ば樵夫に與へたれば、樵夫飢に堪へかねてそを啖ひけり。

かくて月日經るまゝにやう／＼に虎と相馴れぬ。ある日小虎もは
や壯になりたれば虎はそを負ひて出で行くに、樵夫空うち仰ぎて、
大王よ我を救ひ給へと叫びたり。や、ありて虎入り來りて足をまげ
首を垂れて樵夫の身をのせて壁をかけのぼり、其處にうちおきて子
とともに立去りけり。山影暗く叢生ひしげりて鳥の聲もなく、ただ
物凄き風の音ぞかぐるき林におこるなる。



樵夫また、大王よ、と呼びぬ。虎はふりかへれり。樵夫跪きて、我大王の厚き御慈悲によりて命助かりつれど、今別れ奉らむには、またいかなる禍にかゝらむも測られず。我を助け果てむと思さば道ある方まで我を導き給はずや、死ぬることも御なさけの程忘れ奉らじといひけるに、虎うなづきて道に至るまで送りつ。

樵夫またいふやう、我は西關に住める貧しき民なり、今別れ奉らばまた逢ひ見ん時も來るまじ。我歸らばさゝやかなれども一匹の豚を西關三里隔たれる郵亭のほごりに供へまゐらすべければ、何の日何の刻に其處に來給ひてわが志を受け給へかし、ゆめ忘れ給ふな、といひけるに、虎はうなづきぬ。樵夫泣きぬ。虎も亦泣きぬ。

樵夫家に歸りて、驚く家人にありし事の本末語りて喜びあひけり。さて約せし時になりければ豚を屠りて肉切りなごしけるに、虎は



其時はやうかの處に來り樵夫の見えざれば竟に西關の内に入り來れり。人々驚きて獵夫呼び集へ、關を閉ざして、矛を執り、梃を執り、銃を執り、弩を執り、むらくと打圍みて、生けごりのまゝ、邑宰に奉れど罵り合へり。

かの樵夫奔り來て、この虎我に大恩かけしものなれば傷け給ふな、といひけれど、はや人々虎を擒にして縣に引き行きけり。樵夫鼓うちならし大聲あげて呼ぶ。官人怒りて何ぞと問ふ。具に語れど眞とするものなし。然らば我虎に向ひ問ひ試み候はむ、若し偽なりせば幾千の筈も拒むことには候はずといふ。

官人さらばとて虎に近く進み寄りぬ。樵夫虎を抱きて涙ながらに、我を救ひしは大王なるかと問へば、虎うなづきぬ。大王は約を守りて關に入り給ひしかと問へば、またうなづきぬ。我は大王の爲に御



命乞ひ仕らむ。若しかなはざらむには、我も大王諸共命すて侍らむ。
 といひも果ぬに、虎は涙を雨の如くはらくと落しぬ。

山なして観る人々皆あはれを催し、官人は直に虎を釋き許して郵
 亭にやり、かの豚を投げやりけるに、喜ばしげに尾をあげて、腹充
 つるまで食べ果て、樵夫の姿をふりかへり、遂に山に入りて見
 えすなりぬ。後この亭を人呼んで義虎亭といふぞ。(義虎記)



冷雨

月に泣き蟲の音に泣き風に泣き涙脆くも我はなりにけり
 心狭しくと人は言へど心狭きぞ戀の常なる
 終夜悶えし心の姿かも狭霧亂る、曉の空
 戀歌を束ねて焼きて打捨て、強ひて臥す夜を蟋蟀鳴く
 なかくに憂あらずば一年も暮し飽くべき世にやあらまし
 鬼も出でよ神も天降れよ一向に人のみの世はをかしくもなし
 名の奴君は罵れ金の奴我は罵りていざ酌まむ酒



朦朧の詩趣

前世紀の文明は、科學の文明なりき。科學は、朦朧を排して、宇宙萬象悉く明々白白たらしめむと勉むるものなり。かくてこの科學の特性は、ひいて文界に侵入し、想像を骨子とする文學に於て、なほ明瞭を尊み、所謂餘韻の如き朦朧美は殆ど忘れられむとす。もとより淺學の我、ひろく世界の氣勢に就ていふ能はずと雖少くもわが國の文壇には、確にこの傾向ありと信ず。本來、わが國古來の文體語法には、朦朧の分子甚だ多く、國民嗜好の趣味も、ほのかといひ「かすか」といふ方に向へり。もとよりこは、わが國文の短處なりと雖、なほ一方には長所たるなり。偏するは不可なり。解剖的の筆法はよし、されどこれと共に瞥見的の筆法をも繼續したきものなり。國民

的趣味をも保存したきものなり。

天然の美を味ふに於ても、積極的に、外に出で、花の香に染み、月の光に浴むの趣と共に、内に籠りて、消極的に、想像美を味ふも興深し。

「徒然草」

花は盛に、月は隈なきをのみ見るものかは、雨にむかひて月を戀ひ、たれこめて、春の行方知らぬも、なほ哀れに情深し、

「同」

すべて月花をば、さのみ目にて見るものかは、春の家を立ち去らでも、月の夜は、聞のうちながらも、思へるこそ、いとたのもしけれ、

かく、深く探らず、遠く追はざる處にたしかに一種の趣あり。歌道

に於ては、殊にさる趣を詠するをよしとし來れり

「心敬僧都庭訓」

かすかなる所に、心をかけ玉ふべし、ひとへ白梅の、竹の中より
咲き出で、雲間の月を見る如くなる句がおもしろく候、八重紅梅
の咲き亂れたる末をきりつめ、八月十五夜の月などのやうなるは、
このましからず候、

「心敬ひとり言」

誰ごしもしらぬ別の悲しきはまつらの沖をいづる舟人

此歌を、不堪の人の、筑紫は、旅の別の、もろこしへ行くなご、
いひあらはし侍るべし、それは幽遠餘情おくれ侍るべし、
この、心敬の所謂「かすかなる處」「幽遠餘情」は朦朧の詩趣をいへ
るなり。「誰ごしも知らぬ別」といひたるにて、其悲哀が狭き箇性の

ものならず、極めて汎きものとなり、讀む者をして、ごことなく悲
情の湧出し來るを覺えしむ。かゝる側の詩趣が從來和歌の理想なり
しなれど、あまりに其方のみに偏し來りし結果、人、單調に飽き來
り、和歌革新の聲高くなりたり。此を破りて、彼を立つるは却て進
歩ならず、此の外に彼を建て、漸次、詩趣の範圍をひろくすべきな
り。

かゝる體のみを、歌論者は、幽玄體といひ來れり而して其趣を説
明して遺憾なきは左の文なり。

「清巖茶話」

いかなるを幽玄體と申すべきやらむ、これぞ幽玄とて、ただかに、
詞にも心にも、慮りいふべき事にはあらぬにや、行雲廻雪を幽玄
體と申侍れば、空に雲のたなびき、雪の風にたゞよふ風情を、幽

玄體といふべきにや、定家の書きたる懸紐とやらむに、幽玄體を物にたとへていはゞ、もろこしに、襄王といふ帝おはしましき、或時、晝寢すといひて、ひるねをし給ふところへ、神女天降りて、夢ども現どもなく、襄王と契をこめたり、襄王、餘波を惜みて、慕ひ給ひければ、神女、我は上界の天人なり、前古の契有て、今爰に來て、契をこめたり、此地にとゞまるべきものに非ずとて飛び去らむとしければ、王あまりに慕ひかねて、さらば、せめて、かたみを残し給へと有ければ、神女、我かたみには、巫山とて、宮中に近き山あり、此巫山に、朝にたなびく雲、夕に降らむ雨をながめ給へ、とて失せぬ、此後、襄王、神女を戀慕して巫山に、朝にたなびく雲、夕に降る雨を、かたみに、ながめ給ひけり、此朝雲暮雨をながめたる體を、幽玄といふべし、と書きたり、これ

も、いづくが幽玄なるぞといふ事面々の心のうちにあるべき事なり、さらば詞にいひ出し、心に明かに、思ひ分くべき事にはあらぬにや、飄泊としたる體を幽玄體と申べきか、南殿の花の盛りにあき亂れたるを、きぬばかま着たる女房四五人ながめたらん風情を、幽玄體といふべきか、これをいづくか、さても幽玄なるをと問はむに、爰こそ幽玄なれと申さるまじき事なり、この襄王の故事をとりて説明したるは、其當を得たるものなり、人間ならぬ神女、既に其性に於て朦朧なり、而してそれと契りしこと、夢にもあらず、現にもあらず、また其紀念たるものは、朦朧性の雲雨なり、こを眺むる襄王の心持を、想像すれば、一種幽玄なる詩趣あればなり、又こゝに面白きは、この「茶話」の文章も、朦朧體にて、何となう、門外漢には、わからぬやうに書きたることなり、

襄王の故事は、神秘的の、理想的の、ものなれど、實事にして、この趣あるを拾ひて、史に傳へたる事多し。例へば、

「今鏡」たけのよの中

わかくおはしける程にや、右近のうま見に、郭公尋ねに、夜をこめて、おはしたりければ、女房車の雑色一人具したる、先に立てりけるに、郭公はなかで、やうくあけゆく程に、水鶏のた、きければ、女の車より、

いかにせむ待たぬ水鶏はた、くなり

といひおくり侍りければ、

やまほと、ぎすか、らましかば

とつけて、かへし給ひにけり、女は誰にかありけむ、ゆりはなにやとぞうけたまはりし、いかにもやさしく侍りけること哉、この

世には、さやうのことありがたくぞあるべき、

とある如き、是なり。何者とも知れざるところ、深き趣あるにあらずや。景情相助けて朦朧の美をなせり。もし今ならば、この朦朧趣を味ふに暇あらず、直にその女の車を追ひて住所氏名を確めずんば、やまざるべし。

人事にこの趣あると共に、又天象の壯嚴の如きもその朦朧の分子一要素たり。若し天に見ゆる星辰、百ならば百と定まり居たらば、殆ど莊嚴の美は無かるべし。明に見ゆる星既に無數にて、しかも有無も判然せざる、所謂星塵なるものあり、望遠鏡もても見る能はざるものあり。かくて、或る限を越えては朦朧として見る能はず算ふる能はざるがために、暗夜星辰を仰ぎて無限の壯美に撃たる、なり。

「カント美論」

壯美とは、理性に絶対大の理念を起さしめ、よりて想像力をして、
竟に之を量る能はざらしむる底の再現をいふ、
種々想像を自由ならしむる朦朧あり、もはや想像力の及ばぬ朦朧あ
り、この後の者は即ち壯美なるなり
人世の大疑問たる生死に對する感想の如きは、大朦朧にして想像
以上たり。

〔玉勝間〕

すべて、物の理は、限りなきものにて、火の色は赤きに、焼けた
る物は、黒くなり、又灰になれば、白くこそなれ、すべて、かく
思ひの外なること有て、思ひはかれるとは、いたく違へることの
多ければなり、されば、人の死て後のやうも、更に人の智もて、
一わたり理によりて、はかり知るべきわざには非ず、思ひの外

なるものにぞ有べき。

かく想像以上のものと観じたるを、俗人のなす如く低き想像にて、
説明すると、比すれば、朦朧の量多き前者の観想の方莊嚴なり。

趣味低き俗人輩は、含蓄餘情の味を知らず、露骨に事をなすを興
するを常とす。

〔徒然草〕

よき人は、偏にすける様にも見えす、興する様も等閑なり、片田
舎の人こそ、色こく、萬はもて興すれ、花の下には、ねぢより、
立ちより、あからめもせずまもりて、酒のみ連歌して、はては、
大なる枝、心なく折り取りぬ、泉には、手足さし浸して、雪には、
おり立ちて跡つけなご、萬の物、よそながら見るこゝない、
この「よそながら見るこゝ」は朦朧趣を解することにて、前陳の雲

間の月をめぐると同種類なり。

人の趣味は、普通、露骨境より漸次朦朧境に上るものなり。この程度にて、人の品格の差等も生ずるなり。春海の「歌語り」に、この趣味の進歩を論じたり。

或翁の、繪を深く好めるあり、から大和古今の名高き筆のあとを集へて、其が品を定め言ひて、常に樂みとせり、その翁のいひけるは、我繪を好むこと未だしかりし時は、うるはしき色どり、清らにうつしなせらむをのみ、上の品と思ひたりしを、深く好みもて行くまゝに、事の心を、よく思ひたざれば、繪は墨がきのおぼろげなるが、筆の勢強く、かくべき所をも、かきも盡さぬが、おのづからに高きこゝろばえあるこそ似るものなけれ、今はこを上品の品とぞ定むる、かの昔、上の品なりとて、めでおもひけるは、

今は見るもうるさきまでなむおほゆるといへり。

以下、各題目に就いてこれを敘べむ。

妖怪

妖怪の怖しき所以は、其朦朧より來ること多し。これを描寫するに於ても、明瞭なる筆法を以てすれば、其凄味を減殺し終るものなり。かの繪畫に於て幽靈を淡彩にてあらはし、其半身以下は描かざるは、朦朧法を用ひて、其妖怪の性を發揮せるものなり。これを文に寫すに當りても、この畫法の如くなるべし。

「今昔物語」

男馬に鞭を打てはすれど、化物もつゞきて驅け來る、男見かへりて見れば、面の色は朱に似て大き圓坐の如く、目一つ有て、長八九尺ばかりにて、手の指三つあり、爪は五寸ほどにて、色は綠青

にひとし、眼の光、琥珀のやうにして、頭の髪は蓬の如く亂れた

この如きは、鬼形を寫す、あまりに精密に、あまりに解剖的に、概括したる凄氣に乏し。殊に「爪は五寸ほどに至りては、法を得ざる甚だしき句なり。恰も濃丹濃青極彩色の化物繪の如し。小兒を泣か

することは得べけれど、大人を戰慄せしむるには足らず。

「曾呂利物語」怨念深き者の魂迷ひ歩く事の中、まづ一番に、或日の酉の刻に、大きな家を、地震の搖るやうに、動かす、次の日の同じ時に何とは知らず家の内へ入り、裏口の戸を叩き、はつはね／＼と呼ば、る、主の女房聞き付て、汝何物なれば、夜中に來り、斯くはいふぞと叱る、化物叱られて、右の方に又口ありけるが折しも戸を明けて置きけるに、其處へ來りける、

其姿を見れば、肌には白きものを着、上には黒きものを着て、いかに色白き女房、髪を捌き内へ入らんとしける、

この、初めより種々の怪あるを記し、その何物の仕業なるかは知れず、後に始めてその正體を見たるなれば、其描寫は、ともすれば、密に傾き易き所なるを、こゝには僅に二行程にて、その衣服を寫すも、漠と「白き物」「黒き物」といふ、自ら人倫ならざる趣を帯びたり。又容貌も單に色の白きことと、髪を捌きたることとをいふのみにて、描寫足らぬところに十分の凄氣あり。殊に「いかにも」の文字力ありて、その怪女の容貌を瞥見したる時の印象よく現はれたり。

「同書」女の妄念迷ひ歩く事、

或者、上方へまた夜をこめて登るとて、さはやといふ所に、大なる石塔ありける、其下より雞一つ立ちて居る、月夜かげによくよ

く見れば、女の首なり、彼男を見て、けいからず笑ふ、

この文に於て、女の首を雞のやうに見しを、雞の如きものといはず、判然「雞一つ立ちて居る」とあり、而して次に「女の首なり」とあるに對して、いづれがいづれなるか朦朧たるころあり。この所に凄氣あり。もし雞の如きものありしを、よく見れば女の首なりとせば、これより凄氣減すべし。

中心「女の首」にありて、より判然たればなり。また女の首の形容は、ただけしからず笑ふとあるのみなれど、このけしからずの短句にて、其笑ひ様の凄さを現はして餘蘊なし。筆恬淡なれど味ふべき文なり。又、妖怪の來る時、處を精密に描寫して、妖怪其者はたゞ漠とうつしたるあり。こは隈を以て月を現す書法と同じ。例へば

「雨月物語」菊花の約の中

もしや、と、戸の外に出で見れば、銀河影消え、く、に氷輪我のみを照して、淋しきに、軒守る犬の吼る聲すみわたり、浦浪の音もこもどにくるやうなり、月の光も山の際に陰くなれば、今はとて戸を閉ぢて、入らむとするに、たゞ見る、おぼろなる黑影の中に、人ありて、風のまに、く、來るを、あやしと見れば、赤穴宗右衛門なり、

この文に於て、宗右衛門の衣裳などくしく書き陳べむには、全く、敘景の妙を無効にし終らむ。

この同筆法を用ゐたる名文は、かの源氏夕顔卷中の一節なり。なに心もなき差向を、あはれとおぼすまゝに、あまり心深く、見る人もくるしき御有様を、すこし取りすてばやと思くらべ給ひける、宵過ぐる程に、すこし寝入り給へるに、御枕上にいとをかし

げなる女かて、おのがいとめでたしと見奉るをば、たづねもおもほさで、かくことなる所なき人をゐておはして、ときめかし給ふこそいとめざましくつらけれどて、この御傍の人をかきおこさむとす、み給ふ、ものにおそはる、心地して、おごろき給へれば、火も消えにけり、うたておぼさるれば、太刀を引抜きて、打置給ひて、右近をおこし給ふ、これもおそろしと思ひたる様にて、まゐりよれり……

手をた、き給へば、山彦の答ふる聲いとうとまし、人はえ聞きつけで参らぬに、この女君いみじくわなきまごひて、いかさまにせむと思へり、汗もしどいになりて、われかの氣色なり……西の妻戸に出で、戸をおしおけ給へれば、渡殿の火も消えにけり、風少しうち吹きたるに、人は少くて、さぶらふ限り皆ねたり

……
（脂燭をめしよせて見給へば、たゞこの枕上に、夢に見えつる形したる女、おもかげに見えて、ふと消えうせぬ……）
そひ伏して、や、とおごろかし給へど、たゞ冷えに冷え入りて、息はとく絶え果てにけり、

この邊の文は、いかに國文に趣味なきものも感ずる所なり。而して紙面にあふる、凄氣は、いづれの邊より來るかといふに、物の怪たる女は、何の形容もなく極めて朦朧にて、印象され難く、たゞ周囲の夜景の淋しさをうつしたると、女君の驚かされ終に死するに至る様をうつしたるとにて、いはん方なき物おそろしさを覺えしむるなり。就中初めは夢に見し如くかき、女君、右近、ともにいたく驚きたる様をかき、其れど、源氏の君の夢と關係あるが如く、無きが如

く終りに夢が現實のやうになりたるを描き、讀む者をして、幻境に、さまよはしむる邊の如き、極妙といふべし。なほこの文に就きては、後段夢の部にいはむ。

なほ妖事を寫すに、たゞ一通り讀みては、何の理とも解し難く、何か裏に意味あるやう思はしむる筆法も、妙味あり。例へば

「雨月物語」青頭巾

さて、かの僧を居らしめたる簀子のほとりを、もとむるに、影のやうなる人の僧俗ともわからぬまでに、髭髪も亂れしに、葎むすぼふれ、尾花おしなみたる中に、蚊のなくばかりの細き聲して、物ども聞えぬやうに、まれ／＼唱ふるを聞けば、

江月照松風吹 永夜清宵何所爲

禪師見玉ひて、やがて禪杖を取直し、作麼生何所爲ぞと、一喝し

て、彼が頭を撃給へば、忽、氷の、朝日にあふが如く、消え失せて、かの青頭巾と骨のみぞ草葉にとまりける。

の如し、こゝにて結末とせばよきものを、この次に

現にも、久しき念を、こゝに消し盡きたるにやあらむたふとき理あるにこそ、

といふ説明的文字を置きたるは惜むべし。

語句を短かく切りて寫すも、幽靈の消ゆるが如く、消えざるが如き様を描くに適す。謠曲に、この例多し。たとへば、

「朝長」

「ふしぎやな、観音懺法聲すみて、燈の陰幽なるに、まさしく見れば朝長の、影の如くに見え給ふは、もし／＼夢か、幻か、シユモもごよりも夢幻の假の世なり、其疑を止め給ひて、なほ／＼御法を

講じ給へ、^{ワキ}げにくくかやうにまみえ給ふも、偏に法の力ぞと思
ひの玉の數くりて、^{シテ}聲を力にたよりくるは、^{ワキ}まことの姿か、
^{シテ}まぼろしかど、^{ワキ}見えつ、^{シテ}かくれつ、^{ツキ}おもかげの、^歌あれ
はとも、いはゞ形や消えなまし、きえずばいかで燈を、背くなよ、
朝長を、共にあはれみて、深夜の月も影そひて、
この中シテ一句、^{ワキ}一句、極めて短き句を唱へあふどころ、よく
朦朧の趣を發揮せり。

神

神を寫すにも亦朦朧たるべし、妖怪を精寫すれば、凄氣を減する
が如く、神を精寫すれば、其壯美を減すること甚しきなり。壯美の
要素の、朦朧たることは前述したり。讀者をして直に神容に接する
が如くには感せしめず、たゞ神氣に打たる、如く感せしむべきなり。

「日本振袖始」

日の神の御弟、素戔鳴の尊、御身の長八尺、力千人引の岩を轉ば
し、猛く烈しき勢に、神を碎き仇を打つこと、暮秋の嵐木枯の、
草木を破るに異ならず、惡鬼退治の宣旨に任せ、軍慮をめぐらす
小車の、錦のきせなが、銀の心葉、びんづらに取て付、韓鋤の御
はかせ、太手纏に白木綿かけて、千のりのえびら、樟の弓をゆは
づ高にふり立て、天の斑駒白泡かませ、ゆらりと召せば、馬の背
も、撓むばかりの御骨柄。

この文に現はれたる素尊は、何となく神らしくなく、武者繪に近き
心地す。こは口調の輕きにもよるならむが、餘りに描寫密にして、
人化俗化し終りたればなり。總じて近松の筆には、神佛を寫すにも、
英雄を寫すにも、この弊あるが如し。

「古事記」

すなはち、御髪を解き、み、づらにまかして、むだりみきり左右のみ、づらにも、みかづらにも、左右の御手にも、皆やさかのまが玉のいほつのみすまるを、まき持たして、背そびらには千のりのゆぎをおひ、いほのりのゆぎをつけ、またいつの高ともを取りおはして、弓腹ゆばらふりたて、堅庭はむかも、に蹈みなづみ、沫雪なす蹴くまはら、かして、いつのをたけびふみたけびて、待ちとひ給はく、

この文の如きは、随分精寫したる方なれど、敢て壯美を損することなし。こは語も調も古きが故なるべし。いかに學者なりとも、今體の文を見て印象さるゝものど、古體の文を見て印象さるゝものど、比すれば、必ず後者朦朧たるべし。故に神を寫すには、描寫密なるべからず。若し密に寫すべき要ある時は、必ず古語古體の文を用ふ

べきなり

又、神の成生を寫すに、其當を得たるもの、古事記に多し、例へば、

國若く、浮脂の如くして、くらげなすたゞよへる時に、あしかびの如、もえあがるものによりて、成りませる神のみ名は、うましあしかびひこぢの神、

の如し、この神を作り出し、物は、何物ともわかず、たゞあしかびの如もえあがるものどあるのみ。かく成生の朦朧は、其神の壯美を増すこと大なり。後世いふ如き、柳より出る柳の精、菊の化したる菊の精等と比して、雲泥の差あるは他にあらざるなり。

美人

妖怪にあらず、神靈にあらず、されば朦朧は美人の一要素なりと

はいふべからず。されど古來詩文によく見ゆる美人の形容の中、楚人を動かすものは、美人の美中その要所を摘出したるものにあり、美の焼點を描寫したるものにあり。頭の先より、足の指先まで、こちたく列擧する如きは、あから様になりて、却て美感を損じて、支離滅裂の印象をおこさしむ。大町文學士嘗てこの事を論じて、抒情詩は、とりわけ含蓄を尙び、簡勁を喜び、散漫を嫌ひ、露骨を厭ふものなればなり。今美人を形容するに、螻首蛾眉蟬鬢花顏明眸皓齒豐頰細腰など、長たらしく詞を並べ立つるよりも、其美いふべからずと云方が、時によりては却て一層切なる刺撃を與ふるに非ずや。抒情詩は、むしろ朦朧暗黒なるも、徒に冗長にして散文的なるべからず。といへり、眞理ありといふべし。馬琴の美人を寫すや、往々解剖的

筆法を用ひて失敗したるところあり

顔は彌生の櫻花の、吉野の山に馨へる如く、眉は仲秋の新月の、明石の浦に出るに似たり、小町態なる細腰は、風に靡く楊柳も及ばず、衣通像なる素肌は龍の腮の珠玉をや延けむ、輝れる哉、玳瑁の櫛子、花あり蝶あり白銀の釵兒、解かば身長にも餘るべき翠の雲鬢、朧闌たる綾羅の袂は、目に赫變て、陸奥山に、黄金花開き、錦繡の裳は地上に曳て、龍田の川の丹楓葉流る、秋波眺にして愛敬溢れ、蓮歩軽くして、羅綺にも勝へざるべし、千金擲つに厭はずと雖、玉音未だ聽く事を得ず、神邪人邪妖幻邪、正に是、沈魚落雁閉月羞花の、妙年二八の一佳人、今これを看て初めて知る、盛短き朝顔も、果敢なく凋む夕顔も、夜光の前なる燕石ならずば、鸞鳳の傍なる烏雀なりき、と羞思ふ、

衣裳は垢つき破れたれども、肌膚は残んの雪より白く、鬢梳るに由なけれども、緑鬢、春花より芳し、細腰いよ／＼瘦て、風に堪へざる柳の如く、玉指ます／＼細りて、筈に惱める筈に似たり、前者は盛装の美人、後者は天真の美人なり。されど、共に描寫散漫にして、中心なく、読み終りて、更に印象するところなし。

これに反して、萬葉に、末、球名娘子の美をうたひたる如きは、容姿を寫す、極めて粗にして、これが爲に人の恍惚たる様を精密に述べて、そのいかに美はしきかを想像せしむ。かの妖怪を寫すに、その周圍の物凄さを寫すと同筆法なり。

しなが鳥、安房につきたる、梓弓末、球名は、胸別の廣き吾妹、腰細のすがるをこめの、其かほのきら／＼しきに、花のごと咲みて立てれば、玉梓の道行く人は、おのが行く道は行かすて、呼ばな

くに門に至りぬ、さし並ぶ隣の君は、忽におの妻かれて、乞はなくに鑑さへまつる、人の皆かく迷へれば、うちしなひよりてぞ妹は、たはれて有りける、

ウエルテルを讀む者はロツテの非常なる美人たるを印象さる、なり。しかも篇中彼女の容姿を詳記したるところ更になきなり。この歌と同格なりと謂ふべし。

この人體美の描寫につきては、嘗て太陽紙上に、高山氏の論ありき。感覺に於ける朦朧美

前述の條にいひしは、おもに視感に關することなりしが、特に特色あるものに就きていひしなり。こゝにはおもに天然の景物より感ずる朦朧美及其描寫に就ていはむとす。

視感

遠く物を望む時、朦朧として甲なるか、乙なるか分ち難き折あり、其處に一種の趣あるなり。故に詩人は、多分或は確に、甲なりとわかり居ても、故更に甲と似たる乙を持ち來りて、甲なるか乙なるかと朦朧的に歌ふ事あり。

はる風の霞吹き解く河面にはれぬ烟や柳なるらむ 春海

一むらの雲こそか、れ山のはのどほき梢の花や咲くらむ 蘆庵

元來、邦人はかゝる朦朧たる、見わたし、の景をめづるが如し。

月に就ても、大江千里が

照りもせず曇りもはてぬ春の夜のおぼる月夜にしく物ぞなき

さうたひしも、その朦朧趣を賞せしなり。この歌さほど面白きものとも見えざるに、人口に膾炙し來りしは、さる方の趣に同情を表するもの多き故ならむ。

また、春ならねど、霜曇りの曉月は、また同様の趣ありて、それを詠せし歌は幽遠の味あり。

霜結ぶ眞柴の庵の月影に烟きりあふ明ぐれの空 爲家

山里の雲のどぎしの明方に月影うすし庭のはつ霜 教家

頻りに、朦朧美を主張する兼好はまたいはく、

〔徒然草〕

望月の隈なきを、千里の外までながめたるよりも、曉近くなりて、待出でたるが、いと深く青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる、木の間の影、うちしぐれたる村雲がくれの程、又なく哀なり、

これ等いづれも曉の月をよしとしたり。くもりたる月は、また一種の悲趣を含むものなり。

「狭衣」に

うす霞にくもりたる月影、さやかにあらぬしも、いごゝ物心ぼそげなる空のけしきを、道すがらながめ給ひても、又、これ等と反對に極めて、隈なく明き深夜の月に對して、一種の無限感にうたる、折あり。「更科日記」に、かゝる高尚幽遠なる趣をうつしたるを讀みて、いふべからざる興を感じたり。

その十三日の夜の月、いみじく隈なくあかきに、皆人も寝ねたる夜中ばかりに、椽に出で居て、姊なる人、空をつくぐゝながめて、只今行方なく飛び失せなは、いかゞ思ふべきと問ふに、なまおそろしと思へる氣色を見て、異事にいひなして、笑ひなごしてきけば、

こは、直接の朦朧あるにあらねど、あまりに清く靜に更け行く空に、

たゞ月のみ澄みわたりたるを見れば、我は地上のものにあらず、この感もおこり、天地の別も消え失する感もおこり、無限に遠く飛び行くか、この感もおこるなり。この無限なる感想は實に天地の大朦朧たるなり。あまりなる壯美壯感には、幼者の、怖しき思を起すものなり。もとより大人と雖しかるなれど、幼者は殊に然るならむ。こゝに「なまおそろし」といへるも其感想なり。

「山陽詳傳」

甫六歳忽問夫人曰、天何如物也、母曰、旋轉不止、如彼而已、師遽下庭、仰天嘆曰、不思儀哉、啼泣半時許、

こは有名なる話なり。啼泣は甚だしく無限感に打たれし爲なり。斯る無限の空に對しては古今以後の歌人も、随分大なる詩趣を歌へり。あまつ空霞へだて、久方の雲井遙に春や立つらむ

定家

この如き想は、よくありふれたるものなれど、よく思へば大なる詩想ならずや。春はいづくよりたつならむとの疑も極めて朦朧なるを、霞みたる雲井遙に想ひやりたるは、その見る所の朦朧なるが爲、一層朦朧無限の趣を持てるなり。こは、春の立つをいへど、また春の暮る、空を歌ひて朦朧を發揮せるあり。

ゆくへなきながめばかりをなごりにて雲のはたてに春ぞくれぬる

忠良

この春の去る趣よりは、有形的なれど、雁の遠く遠き空に消え行く様の如きも、朦朧美に入る現象なり。

いづちとかさして行らむ山高み朝ある雲に消ゆる雁金

何となう、心細う。あはれなる趣なり。旅行く人を見送るも同じ情なれど、人ならで雁、地にあらで空、なる丈、この方の趣は、まさ

る心地す。

おぼろ月の悲趣あるは、前にいひたり。同じく晝間の霞の景も、四邊さびしき處にては、悲趣をそふるものなり。

〔更科日記〕

三月の朔日頃に、西山の奥なる所にいきたる、人目も見えず、のどくど霞み渡りたるに、あはれに心ぼそく、花ばかり咲き亂れたり、

これは人氣なき朦朧景なれど、人多くて賑はしき處に、霧の立ちこめたる様は、人々のあらはに見ゆるよりは、一種興あるものなり。

〔蜻蛉日記〕

宇治の河による程、霧はきし方見えす立わたりて、いとおぼつかない、車かきおろして、こちたくどかくする程に人聲多くて御車

おろしたてよどの、しる、霧の下より、例のあじろも見えたり、
いふ方なくをかじ、

また霧の景の悲趣をうつしたるあり。

〔狭衣〕

川霧さへ、麓をこめて、道さまたげに立渡りたるにるせきにもり
わづらふ水のおとなひもいとむせ返り、物のみ悲しければ、
春の霞、秋の霧、皆朦朧趣を生命とするものなれど、夏にても、な
ほ明けきらぬ朝の様は、この趣あり。殊に木立繁きあたりは、折節
陰暗くて、大にこの趣を助くるなり。

〔更科日記〕

念佛する僧の、曉にぬかづく音の、尊く聞ゆれば、戸を押しあけ
たれば、ほのくくと明け行く山際、こぐらき梢どもさりわたりにて、

花紅葉の盛りよりも、何となく繁りわたれば、空のけしきも、く
もらはしくをかしきに、杜鵑さへ、いと近き梢に、あまた、びな
いたり、

かくて、この朦朧よりいへば、夜は晝よりも價あるものなり。

〔徒然草〕

夜に入りて、物のはえなしといふ人、いと口をし、萬の物のきら
かざる、色ふしも、夜のみこそ、めでたけれ、晝は、こそそぎ、
おやすけたる姿にてもありなむ、夜はきら、かに、花やかなる装
束いとよし、人のけしきも夜の火影ぞ、よきはなく、物いひたる
聲も、暗くて聞えたる、用意ある、心にくし、匂も物の音も、た
だ夜ぞ一層めでたき、

かくて〔枕草紙〕には、火影よりも、更に朦朧なる炭火に照らされて、物

の見ゆるを、趣ありとして、その心にくきものの中に算へたり。
いみじう、しつらひたる所の、おほとなぶらは參らで、長炭櫃に、
いと多くおこしたる火の光に、御几帳の紐の、いとつや、かに見
え、御簾の帽額のあげたる鉤のきはやかなるも、けざやかに見ゆ、
よく調じたる火桶の、灰清げにおこしたる火に、よく書きたる繪
の見えたる、をかし、

あまり、人の味はぬ趣を捕へたるは「枕草紙」の特色にして、識者をし
て、今も清女の審美眼に敬服せしむる所以なり。

又、これは、景色にあらで、手紙の墨つきに就て、其色濃く明白
なるよりも、うす墨にて書き流したる方情こもりて見ゆる折あり、

「源氏」葵上

おほうち山を思ひやり聞えながら、えやはとて、「秋きりに立ちお

くれぬと聞きしよりしぐる、空もいかゞぞおもふこのみ、ほの
かなる墨つきにて、おもひなし心にくし、

嗅感

に於ても、いかによき香なりとも、あまりにけざやかなるよりは、
たゞほのかにかをりたる方趣深し、

風たえて月もおぼろのねやの戸に、それかどばかりに、ほふ梅が香
これは香の朦朧を、更に視感上の朦朧もて助けたり、

聽感

に於ても同じ、物の音、の風などに紛れて遠く聞ゆる如きは聽感
に於ける朦朧美なり。仲國、小督の琴を聞きて嶺の嵐か、松風かど
疑ひし刹那の感想の如きをいへるなり、

時々の鳥獸虫の聲に就ても同じ趣あり。杜宇をほのかに聞きつけ

たる趣をいへるあり。

〔枕草紙〕

すこし曇りたる夕つ方、よるほど、杜宇の遠う、空耳かとおぼゆる、
まで、たゞしくしきを聞きつけたらむ、何ご、ちかはせむ、
空耳かど、我を疑ふ邊に、いふべからざる幽遠の趣あるなり。

蟋蟀につきては、同書あはれなるものの中に、いへるあり。

九月三十日、十月一日の程、たいあるかなきかに聞きつけたる、蟋
蟀の聲

蟋蟀の聲元來あはれなるものなれど、其あるかなきかの様になりた
る所、一層あはれなるなり。

又、あまり面白くもなき聲も、朦朧のために、哀に聞きなさる、
ものなり。

〔更科日記〕

鹿の椽のもごまで来て、うち鳴いたる、近うは、なつかしからぬ
もの、聲なり、「秋の夜の妻戀ひかぬる鹿の音は遠山にこそきくべ
かりけれ」。

夢

夢てふものは、神秘的にして、朦朧趣多きものなり。而して、そ
の夢を描きて、判然、こ、より、こ、までは夢なり、こ、よりは現
なり、と區劃するよりも、その夢現の限界を、おぼろに書けば、愈
この趣深くなるなり。

〔大和物語〕に、をどめ塚の下に宿りし旅人の、夜中怪を見しことを
記し、次に、

いとむくつけしと思へど、珍らしき事なれば、問ひきく程に、夜

も明けにければ、人もなし、あしたに見れば、塚のもとに、血なごなむ流れたりける、太刀にも、血つきてありける、
とあり、こは夢に似て夢にあらざるところ、幽遠の趣あり。露伴の「對髑髏」の一節も、これと同筆法を用ひたり。

君は片科川に浮く花、香は急流に伴つて、十里を飛ぶ遙やかに、
我は其川の岸に立つ柳、影は水底に沈んで、一步も動き難し、逢ての喜、別離の辛さ、戯けし戀の後朝ばかりには非ずといふ、時しもあれ、朝日紅々ささし登りて、家も、人も、雲霧と消え、枯れ残りたる去年の萱沓の中に、雪沓の紐つなぎかけし儘、我たゞ一人にして、足下には、白髑髏一つ。

又、前に擧げし夕顔の巻に於ても、かの物の怪を、判然夢といはざるは、妙筆法にて同趣味あり。「評釋」にかの條を評して

「ものにおそはる、心地して云々」上に夢といはずして、驚き給へればといへるに、さめ給へる意を含めて、まぎらはいしたる筆つき、いとめでたし、

といへり。すべて夢を描くには、この「まぎらはしたる筆法」を用ふる方幻美あり。

「清巖茶話」

さけば散る夜のまの花の夢の内にやがてまぎれぬ峰の白雲
幽玄體の歌也、幽玄といふ物は、心に有て詞にはいはれぬものなり、月に薄雲の帯びたる、山の紅葉に秋の霧のかゝれる風情を、幽玄の姿とするなり、是はいづくが幽玄なると云とも、いづくといひ難き事なり、それを心得ぬ人は、月のきら／＼と晴て、青き空にあるこそおもしろけれといはむは道理なり、幽玄と云は、更

にいくが面白きとも、妙なるとも、いはれぬ所なり、夢の内にやがて紛れぬは、「源氏」に、源氏、藤壺にあひて、見ても又あふ夜稀なる夢のうちにやがてまぎる、我身ともがなとよみしも、幽玄の姿にてあり、見ても又逢夜稀なるとは、もともあはず、後にも逢まじければ、逢夜稀とはいふなり、此夢がさめずして、夢ではてたらば、やがてまぎれたるにぞ有るべきなり、夢のうちには、逢をさしたるなり、此あふと見えつる夢の内に、我身もまぎれて、夢にて果てよかし、となり、藤壺の返しに、世がたりに人や傳へむたぐひなしうき身をさめぬ夢になしてもさあり、藤壺は源氏の爲には、ま、母なり、さるに、かゝる事ありしとは、たとひうき身は、夢にて果てたりとも、うき名はとごまりて、後の世がたりといひ傳ふべしとなり、夢のうちに、やが

て紛る、心を、よく折返して、よみしなり、さけばちる夜の間の花の夢のうちとは、咲かど見れば、夜の間にはや散る物なり、あけて見れば、雲は、まぎれずしてあれば、やがてまぎれぬ峰の白雲とはいふなり、夢のうちとは開散あひだをさすなり、この峰の白雲の歌、夢といふ文字を用ひて、深き趣を持たせたり又その語の續き様も極めて、朦朧なり、源氏の歌も、夢に關したる詩想の、いかにも面白きものなり、夢てふ幻界に、わが心の現身がまぎれ入れかすと願ふなり、かゝる縹緲たる詩想は、この頃いたく發達したるものなるべし。

「同」

寄夢戀

涙さへ人の袂に入ごみし玉と、まらぬ夢ぞうきたる、

夢を詠に、みる、覺る、などいへば、安道とてわるきなり、入とみしといひたるに、見たりと云事は聞えたれば、さむるといはねども、玉とまらぬといへば、醒めたる所は、きこゆるなり、入と見れども、とまらねば、夢がうきたるなり、こゝにも、語を紛らはすべしと説けり。こゝに引きし歌よしとにはあらねど、朦朧語法の標本とはなるべし。前述、夢の中に我身入れかしの想の如く、又夢の中に或る靈所に至ればその人死すといふ想あり。

〔出雲風土記〕

自磯西方有窟戶、高廣各六尺許、窟内有穴、人不得入、不知深淺也。夢至此磯窟之邊者必死、故、俗人自古至今、號云黃泉之坂、黃泉之穴也。

既に、その窟深淺を知らず。故に現實的には、人入ることを得ざるなり。さるに、夢の中にては、こゝに来ることあり得。されどこの窟中には入らずとも、この邊まで來れば、必ず死すとなり。實に玄の又玄なる想にて、以て莊嚴なる詩材とすべし。若し人あり、さる夢を見る者即死すとならば、誰か其死因のさる夢なりしを知らむ、と詰るものありとせば、その人朦朧美を語るに足らざる人なり。夢幻美を語るに足らざる人なり。壯美神美も語るに足らず、ひろく詩其者、趣其者をも語るに足らざるの人なり。



晒井

雲の峯海の入日に崩れけり
新夫婦涼に出でし噂かな
松脂の五色に光る暑かな
悪墨をそろくゝと磨る暑かな
日本の女の帯の暑かな
煩悶の戀をのせけりハンモック
潮浴みて一盞のビール妻の酌
羅や白扇や家は山谷堀
羅の汗わりなしや主の前
夏菊や馬の尿のほどばしり

愚なる我

わが友某、もゆるが如き戀のあはれを、見るやうに、かきおこしける文、時には日に二度まで受くることもありしが、しばし途絶えて、行秋の障子に落葉の音さむき夕、また次の如き文を着きける、愚なる我哉、一筋にま心盡せば世にならざることなしと思ひて、未だ謀の世となりしを知らず、妄なる涙にわが袖をくたし、たらちねの袖をもうるほしまつりし愚さよ、ま心の涙には泣かぬ人やあると思ひしは大なる誤なりき、泣くものは唯天が下に父と母とのみなりき、戀はたゞ物語の中のものこのみ思ふ世なりけり、戀はたゞいやしむべき若人のたはむれこのみ思ふ世なりけり、小説の戀になき、劇の戀に泣き、浄瑠璃の戀に泣く者も、わがもゆるが如き戀を指し

て、心せまし、をこなりとして嘲み笑へり、もの、心知れりと思ひし人等も悉く嘲み笑へり、晝といはず、夜といはず、世擧りて笑ふ聲の絶えずわが耳に響くこ、ちするなり、大路行くにも、天が下のうつけ者は、さげすみの指ざしと罵りの眼ざしを恐る、なり、わが既往の僅の名譽は悉く地を掃ひて、大なる耻辱代りて身をつ、むに非ずや、いかに愚なる我よ、我はわが戀人が我をいかに思ふかも知り得ざるなり、一筋に思ふことはおのづから先に通ふと思ひしは古の古の信仰なりき、さる不思議なきこの世のうらめしきよ、わがかく戀狂ふことはたゞ彼女に笑ひの材料と誇りの材料とを與へしのみならむ、彼女の父も彼女の母もまことに氷の如く冷酷なりき、彼等はたゞわが戀を輕みしのみならず、思ひても胸もえあがる如く我を罵れり、我のみに非ず、わが父を罵れり、母を罵れり、わが家を罵

れり、乞ふ方と乞はる、方と果してかくまでも權力の違ひあるものか、之を聞く毎に我は努めて憤りを抑へたり、一時の憤の、永久の戀の幸を破らむことを恐れてなりき、あ、遂に今に至るまで、憤り易き我の、このためには更に洩らさでありしものを、何事ぞ、戀の幸は遠く離れむとするに非ずや、否、愚なる我は離れむとするといひて、未だ全く離れたるを知らざるに非るか、あ、むしろ我は死を願ふなり、一握の拳銃頸に向は、萬事終らむ、されど如何せむ、家に父母あり、兄弟姉妹あり、父母はわが業の成るを待ち、兄弟姉妹は皆我を頼るなり、萬斛の涙を注ぎつ、もなほ生き存ふべき身ならずや、食うて味を知らざる米鹽もて、このありて甲斐なき肉塊を養ふべく餘儀なくさる、なり、我はこの限なき憂と恨とを人爲もて消さむとつとめたり、時に高樓に大杯を傾けて歡呼せり、時に紅閨に

阿嬌を擁して嬉戯せり、されどその歡やその嬉やたゞ一時なりき、
深き骨に徹するの重傷も能く治し得べし、たゞ心裏に銘したる深創、
十萬斛の美酒を以てするも十萬人の美女を以てするも療し難し、憂
と恨とは永久に命數のあらむ限り、罔雨と共に身を離れざるなり、
戀てふもの、かくまで怖しきものとは知らで陥りしわが愚さよ、今
の世や血なし涙なし、乾燥なり、無意味なり、たゞ極めて冷刻に極
めて淡泊にくらすべき世なりしなり、水の如き世に在て一點の火を
點せむと試みしわが愚さよ、愚なりと悟りてなほ今も惱み狂ふわが
愚さの限りなき哉……

戀は青年一時のイルージョンに過ぎざるか。到底人はコンヂショ
ンの下に動かざるべからざるか。われはこの文に對してさる冷靜な
る疑をおこす違もあらざりしなり。わが胸は躍りぬ、わが眼はくる

めきぬ。われは繁き職務をかへり見る能はず、あくる朝の一番汽車
にしの、めの霧を衝いて、京なる彼が寓にむかひぬ。



歌謠の拍子辭

「翁が舞ふ時、とうく、たらりたらりら、と唱へ出せば、何だか莊
嚴な心持が起る。「活惚」の初め、よいさな、よいく、と唄ひ出せば、
既に席が大陽氣になる。これ等は拍子を取る言で、こゝに所謂拍子
辭である。何の意味もない、單に音の配列に止まるものであるが、
自然に、快活なものもあり、陰鬱なものもある。莊嚴なもの滑稽なもの

ある。これ等を分類して研究するも面白いことである。

大體からいへば、拍子辭の多い唄は快活なもので、内容の悲哀な唄には拍子辭を入れることが少い。例へば

今津海津に朝通ひさ、く、蒔繪の指櫛桐のとふもん、く、く、もん、つ、く、く、朝通さ、

といふ踊唄があるが、斯様に長い拍子辭が用ひてある。其れに反して、隆達節の如きは、拍子辭の形が極めて小さい。

獨寝もよやの、曉の別思へばの、

月待つ月は冴えもせで、君待つ月は冴ゆるよの、

この通、一音のみのが多い。

それから、この拍子辭も、言語が時代によつて變遷するやうに、矢張りいろく、に變遷發展して居るやうに見える。催馬樂に、

美作や久米の久米の佐良山さらく、になよや、なよや、

といふのがあつて、こ、になよやといふ拍子辭が見えて居る。それから三弦の原始時代に起つた唄に、

待つ夜に其身がくるみでもなし、なよさで、まことにくるみでもなし、

といふのがあつて、こ、になよさでといふ拍子辭が見えて居る。このなよや、なよさで、は確に一の系統のものである。

三絃唄「端手組」の中に、

君と我とはのや、

思ふまゝなるのや、こよひ哉

等とあつて、のやといふ辭が出て居り、裏組の唄の中に、
宮へは三里へのうゑい

柴の庵もまたのんえい

といふ文句が見える。數年前に一寸流行した野毛の山からのうえ云々といふ唄即のうえ節のうえは、こゝ等の拍子辭の子孫であるらしい。

近頃まで流行した、「いそ節にいそ」といふ拍子辭があるが「げんごしう」といふ長唄にも、

さんさ鳥もなく、いそ、夜も明けそ、

といふがある、又すつと古いところで、催馬樂に、

しながざり猪名の湊に、あいぞ、入る舟の櫂よくまかせ、舟かたぶくなく、

といふのがあるが、このあいぞもよく似た拍子辭である。間が餘り距つて居るが、ごうも關係の深いやうな心持がする。

しかし中には思ひの外の横の方から轉じて來たものがある。今も大流行の、あの「ホウカイ節」のホウカイの如きは、一寸聞けば、「然うか」といふ意味の様に思へるが、實は支那語である。

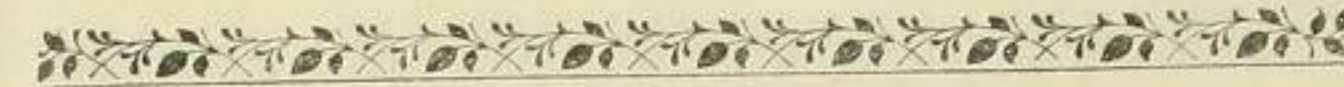
「ホウカイ節」の原譜は清樂の「九連環」であることは誰も知つて居る通りだが、其の「九連環」の原歌は、

看々兮賜奴的九連環九呀九連環雙手拿來解不解拿把刀兒割々不斷了也々々

といふので、この「仕四合」のところは丁度「不解」である。この言を日本化して拍子辭として用ひたものである。

拍子辭の種類の中には、歌の文句中、或物の音聲を摸し或は其の様子を摸した、わが所謂摸樣言を拍子辭に用ふるのがある。

狂言の小歌の中に、



ざんざん、濱松の音は、ざんざん、濱千鳥の友呼ぶ聲は、ちりやちり、ちり、ちり、ちり、ちり、と友呼ぶところに、鳴かけよりも船の音が、からりこりり、からりこりり、と、曉の明星の、西へちりり、東へちりり、ちりり、と、する時は、等とあるのは、調子を助ける爲に、著しく繰り反して用ひ、且つ謠ひよきやうに模様してある。これ等は拍子辭と見なしてよいであらう。この初めに挙げたざんざんは、後の長唄に至つて、種々に發展して居る。「新蘆荊」に、
松風こそはざんざん、
とあるが、これは古體の儘であり、「雪げしき」に、
はやし立て、遊んだ、ざんざん、ざんざん、濱松の音は幾千代、
となつて居、又濁音を除き、且つ軽く略したものが、「あき草」に見



える。
波のよるく、さんさ、身を盡し、
さてこれが遂には音に關係なき處にも用ひらるゝに至つた。「げんごしう」に、
いとしげんしうに逢ふ夜さは、さんさ、鳥も鳴く、
とあり。「やへうめ」に、
うつ、か夢か、稀に逢ふ夜に語るまもなき、さんさ、短夜や、
とある。こんな風に轉じて來た例は、まだ外にも多いであらう。
又、終に挙げた、「曉の明星」は、長唄の「吉原雀」にも出て居る。
樂器の譜を用ひたものもある。笛の譜は催馬樂時代にもあり、狂言小歌の中には鼓の譜を用ひたものも見える。今の口三味線の類であらう。



こ、に又、古き拍子辭を其儘に用ひ、而してその辭を巧に用ひて滑稽的に落したものがあつた。「種蒔三番叟」に、
 今様姿とりく、に、とうく、た、ら、り、く、ら、
 たらりあがりら、い、り、
 とう、ち、り、や、た、ら、り、や、女、子、た、ら、し、の、
 とあるは其一例で、たらりやの調から、軽く「女子たらしの」と落した處が面白いではないか。

拍子辭を重韻アリテラチオンに利用したものは随分ある。「志賀山三番叟」の、
 中、の、く、な、中、娘、を、

「玉うさぎ」の、

こ、れ、は、い、さ、の、よ、い、玉、兔、是、は、さ、て、お、き

の如きが其例である。殊にこの後者の如きは、慣用の拍子辭を利用して、アリテラチオンをせしめて、其上、語を轉じた處が自然で輕



妙ではないか。

三絃時代に初めて起つた一種の面白い拍子辭がある。其れは上の語の音から調よく續いて來て、知らぬ間に、下に來る語を惹起すやうになつて居るもので、假に移拍子とでも名づくべきものである。

「花軍」の、

小手鞠寒菊、

き、く、き、り、く、

き、り、く、

ま、は、る、水、車、

「卵の葉重踊」の、

や、れ、御、馬、乘、り、初、め、

弓、初、め、

こ、の、や、つ、つ、

つ、つ、

く、く、

く、く、

や、

等が其例である。

拍子辭に就いて、いろく調べて見ると、案外興味のある事が發見される。自分は少しこれを調べて置いたが、まだ完全にまとまつ

て居ないから、公にすることは出来ぬ。こゝには唯不秩序に其中の
數條を抜書きしたのみである。

日本固有の修辭、殊に音調の方面を、實際經驗的に研究するには、
この純自然な拍子辭は好材料であると信ずる。



炎

夜は更にけり。人力車の一つ二つ響き徐ろなるは空^{から}曳きて家に向
ふならむ。風すこし吹き出で、さゝと障子にあたる外は苦きわが息
のみ。氷囊のなまぬるくなりたるが寝反りすれば頬のあたりに垂る

るもうるさく、頭はなほ燃ゆるやうなるに、うす暗うなりし洋燈の
うとましき音を立て初めたるも腹立たしや。例の渴きのはげしけれ
ば、物うき身を半おこして、枕邊の薬のみ、氷囊をかたへの臺にあ
げ、火うち消して横になるに、太き釘うたる、如く頭のゆるぐばか
り痛みに痛みてたへ難く、眼少し動きても忽ち頭にひゞき、起きむ
とすればなほ痛みて、全身力なく、血は悉く腦に集りて、苦き惱さ
に強ひてねがへりしつる途端、こはいかに、今消したる洋燈に火あ
かあかと照れり。引よせて息強く吹けばもとの闇となるに、この刹
那何となう物さわかしき音の、遠うきこゆる心地するに、心押しし
づめてきけば、警鐘の如き銅邏の如きうち交りたるが、地の底より
あまねく響きわたると覺ゆ。怪しや何ぞとまた起きあがらむとする
折、見れば洋燈は一層明かに輝きわたれり。當らば碎けよと在合ふ

物にて扇げばもこの闇にかへる。かへりし闇の中に更に黒きものあり、わが胸わが頭わが手足を抑ゆ。病めりとてひるむ我かほと、あせつていらつて其奴はね除けむとするに、大磐石の如し。争ひ疲れてたゞ全身に力こめて小動きもせであるに、體やうく、軽く黒き物煙のやうにうすれゆきて、闇の色またやうく、淡くなりゆくに、不思議と思へばあな。洋燈はまた點せられてあり。何物か怪をなすと立ち上らむとするに五體はすくむ。火は太く長くもえたちて破裂せむばかり、眼もくるめく光明あたりを眞紅に彩りわが身も血に染める如し。消さむと吹くわが息かへりて勢を助け、ますく燃上るに避けむとすれば、後の襖にまた火あり。柱の花瓶にまた火あり。書棚の上にまた火あり。額の縁は悉く火となりぬ。壘の縁は悉く火となりぬ。炎と炎と煙と煙と、相もつれ相亂れて、左顧右眄火の外物

もなく、熱氣骨をも熔けむとする時、夜具の下より魔風起つて、身は限りもなく吹き上げられく、て村雲に包まれて、かぐるき大空にぞ漂へる。

無限の空に月もなく星もなく、上下前後のわかちも知らず、心はあらゆる絆離れて大なる自由を得し如くなるに、また何物かにはげしく縛らるゝこゝちもしつ。わが乗る雲の透より見降せば、あゝ罪に汚されたる下界は、今や神火に焼き盡さるゝなり。海原湧き上り陸地熔けわたり、人も獸も鳥も魚も木も石も分ちなく皆灰となつて散らんとすなる。神の裁判もなかりけり。彌勒の出現もなかりけり。聲ある者は悉く最後の悲鳴をあげて雲もふるふばかりなれど、天ただ寂寞として黒闇々、應ふるものもなく救はむ神もなし。すくふべきはわが務ならずや、我は神にあらずや、この念のむら

むらどおこるや、大なる響の中に「あ、君よ妾を助け給はずや」と呼ぶ
鋭きこゑの紛れず刺すが如くに耳に入る。

「雲よ風よ助けよ少女を」といふまゝに、白雲一むら自ら降り、猛火の
中に一條の白き風おこりて少女は事もなくかの雲につゝまれて昇り
來れり。「嬉しや君はそこなはれで」とさし招けば、少女は袖にすが
りて「君も恙なくて」といひさして泣く。我も喜びの涙止めどもなき折
下界は更に驚くべき光を放ちて、あとは、火も見えず物の姿も消え
果て、あゝ遂に世は亡びてけりな。

雲は二人をのせて徐ろに高くくのぼりぬ。諸の花の香帯べる微
風はそよ／＼と袂を拂ひて、あたりの雲はうすらぎゆきて、大なる
小き、紅なる、緑なる、星はるむが如く輝き出でぬ。月は今われら
に近く澄みのぼりて我も妹ものる雲もそのしろがねの光をあみぬ。

折しもあれや遠く近く天つ小琴のしらべぞおこりける。わが雲はし
ばしこゝにたゆたへり。

「悠々たりなわれ等が樂み、障り多かりしうき世は亡びぬ、かたみ
に狂ひし戀は今成りぬ、月も雲も星も風もわれ等が愛を助くるに非
ずや」と手を取れば、少女は月にはえて神々しきおもわに胸の底より
の笑をたゝへて「うさわびしさは限りありけり、限なき愛のみぞ残れ
る、限あるものは皆亡びぬ、限りなき宇宙と共にわれらが愛ぞここ
しなへなる」

小琴の調べは今ふしこまやかになりて、われらが雲はつれて快く
動き出でぬ。「いざや妹、琴の調べにうちあはせて今までのわが思を
うたはむ」「妾も同じ、ありし世の胸の中、君とかたみに歌ひかはさ
む」天つ小琴はしらべゆるらかにわれらが歌を待てり。

時し、一むらの紅のけむり、下の下より糸のごとくたち來りて、われらがあたりしばしめぐりて、やがて月をさへぎりて、ゆくへも分かず消えゆきぬ。「わがせの君、あれよ、やけしうき世の名残なるよ」あ、かくまで果敢なかりけるよと答ふるわが胸に、浮み出でしは二親の御身なり。あ、我はうみの父母の上をも忘れ果て、たゞ戀人のみぞ助けたる。汚れたりとはいへど、久しく住みし世の、一片のけむりとなりしをも悲まで、たゞわが戀の成りしをのみぞ喜べる。神となれる身にも、こは罪ならでやは、まこと離れぬわが心の疾しからでやは、うれし涙にぬれしわが袖は更に深き悔と大なる悲の涙に朽ちなむとす。妹も煙のゆくへ仰ぎて玉なす涙は月にきらめきぬ。言はねど語らねど二人の胸はたゞ親の上のみ。すみし月も、きらめきし星も、また黒雲に蔽はれ、天樂こゑたえて、

罪ならず百雷一時にはためき烈風横さまに吹きおこるや、乗る雲寸斷、妹先づ墜ち、われも逆さにと、思ふ耳に不思議や母上の御聲「母上いかにして、あ、妹はく、」
「何をか夢みつる、汗しと、なり、さめよく、」とのたまふに、眼みはれば、わが臥す床の枕邊に母上のる給ひて、
「心地やいかに、牛乳のあた、まりたるに、いざのますや」この御言葉も、身にしみわたる寢覺かな。



ストーム

寄宿舍に入りて程なき土曜の夜なり。舎内いと静けく、老いたる小使が聲高に新聞讀めると、何號室にや劍舞の稽古する響の、耳立ちて聞ゆるのみ。

我が室に居残りたるは我たゞ獨、昨日讀みかけし書の面白ければ、さしおき難うて、今宵も此處の電燈の下に孑然として坐せるなり。頁改まる毎に興益々新しく、現境の外に遊ぶ折、扉あけて入り來るは二年級なる友なり。

しばし物語りて去るに臨み、君よ用心し給へ。今宵なにがしの大會あれば、十時頃には必ずストームあるべしといふ。ストームとは何ぞと問へば、ストームはストームなり。暴風なり。この舎内への

み吹き荒る、暴風なり。その猛烈なる時には自然のストームをも凌駕することあり。新入生は一度は必この爲に肝を潰さるゝなり。といひ棄て、笑ひつゝ去れり。やがて同室の誰彼も歸り來れり。十時にもなりぬ。時に遙かに爆竹の如き響聞ゆ。人の歌うたふ聲も交れり。其音次第に近く、はや此舎の玄關に迫れり。皆何事ぞと廊下に出で、ながむれば、

舎生の一隊凡そ二十人。いづれも酔ひに酔ひて、满面朱を注ぎたり。先鋒には旗手一人、惡筆にて「彌次隊」と書きたる紙の旗を捧げたり。次に樂隊五人、一人は銅鑼を、一人は如露を、凹まむばかりにうちたゝき、三人は石油の空罐を荒繩もて曳すりたり。

後に續く勇士の面々打扮思ひくにて、校帽の上より頬冠りしたるあり。羽織の紐を頭の上に結びたるあり。拂塵子を兩手に打振る

あり。箒を銃の如く擔ぎたるあり。竹刀を腰に差したるあり。赤毛布に全身を包みたるあり。殿に麥酒壘提げたるを德利提げたるであるは兵站部なるべし。一同樂隊の奏樂に合せて、ヅボンボの曲といふ軍歌を、虎の吼ゆる如く歌ひつゝ、進行するなり。歌に曰く、
ヅボンボヤ、く、ヅボンボ腹立ちや、面憎や、池エエの、
鈍龜なりやこそ、酒の相手に、ヤレコロヤ、ヅボンボヤ、
ヅボンボヤ、
と、この樂とこの歌と足踏みと相合して、地震海嘯こき交せたる如く響き渡れば、臆病なる新入生は悉く舍外に遁れ出で、小使は階子段の下に身を潜めたり。
彌次隊、意氣八絃を呑み、向ふ所敵なく、某の絹傘は八裂きに裂かれたり。某の金時計は泥靴に蹂躪られたり。香水瓶の隠されたる

某の行李は微塵に碎かれたり。戀愛小説の入れられたる某の本箱は横倒しにぶちまけられたり。贅澤なるもの、氣障なるもの、生意氣なるもの、大どなく、小どなく、破壊されざるなし。
かくて樓上樓下悉く掃ひ清めて、軍氣愈々奮ひ、ヅボンボの歌更に高らかに、彼方の寄宿舎に向ひて進行せり。
秋や、深き頃とて、月おもしろう澄み渡り、運動場は風に戦ぐ淺茅の影さへ鮮なれば、やうく遠ざかり行く一隊の様も流石に趣ある哉。
異様なる樂器も月に銀と燦き、陋がはしき軍歌も秋風にをかきき節添ひ、怪しき姿の、直に、斜に、合ひつゝ、離れつ行く様よ。
思ふが儘に舉動ひて、装ひなき太古の民の、月の神讚する祭式にやと思はれて、珍らしければ、明日は父君の許にこのストームの話

かき送り参らせむとて、寢室に入りぬ。

月華

月影に耻ぢてや翳す京扇京の少女は優しかりけり
宮人の足結あしむすの小鈴こすずちりくりに亂れて遊ぶ月の萩原
薄原月のみ澄みて戀塚こひづかの因縁いんげん問ふべき人だにもなし
風渡る千草の原を住よしと月より天降る露のな小神よ
物思はで唯淺らかに暮すべき世と思へども月をし見れば



自惚

我は常に疑ふ、この宇宙事々物々の中、此は彼よりは優る、彼は此よりは劣るなど、批判する、或は断定することが出来るものであらうか。たとへば人と獸と比較して人の方が優る、獸と木と比較して獸の方が優る、木と石と比較して木の方が優るなど、いふことが出来るものであらうか。一體優るといふことは何をいふのであるか、動くものは動かぬものよりなせ優つて居るか、動くといふことがどうして價あることか、動くもの、方からいへば、動くことが價があるが、動かぬもの、方からいへば、動かぬといふことがどの位價があるか知れぬ、動物學者などは、器官の複雑なもの、方が、其簡單なものよりも優つてゐるなど、いふであらうが、なせ複雑といふこと

がそんなに價があるか、又簡單なりといはる、其の物も、たゞ現今、否このモーメントに一部の學者といふ者が或道具を使つて調べて見て簡單だといふに止まるので、其物實際の状態は詳述し得られないのである。あゝ氣に食はぬのは優劣といふ考である。

人間は、人は萬物の靈なりといふ。日本人は宇内最善美を盡したる國は日本だといふ。文學者は人の爲す業の中最高尙なものは文學事業だといふ。個人に付いていつても、皆己れはえらい、少くも己れはえらい處があると思つて居る。この様な考はいかにも自惚である。自惚であるが、自惚至極結構である。自惚あるが故に吾人が活潑に運動する。自惚あるが故に團結して事業もおこす。自惚あるが故に國家も維持して行かれる。水蔭さんが、自惚心が無ければ小説が書けるものかといつたさうだが、これは一理ある言である。しか

し、しかし、この自惚が單に己れに惚れる（廣い意味の己れに）といふでなく、己れと他と比較する、己れをえらいと思ふ、己れの爲す業が他の業より勝れたものと思ふ、などの意味を持つて居るならば、大に氣に食はないのである。

或女が或男に惚れて、君と添うなら深山の奥で手鍋さげても厭やせぬ、共に命を捨て、もかまはぬといふ、この女が、人から、また外に其男より優つた個様々の男があるといはれても、決して心は動かぬであらう、この女は思ふ男と他の男と比較して、思ふ男がえらいから惚れてるのではない、たゞ他の男より好きなのである、えらくもえらくなくも、其んな優劣の考は微塵も無い、一步を進むれば他の男と比較するといふ考も無い、たゞ其の人が好きでくたまらぬのである。即所謂惚れぬいて居るのである。

若し、金があるから惚れたといふ者であつたならば、他に其よりも金持の男があれば、すぐ其方へ向くであらう、若し、顔のよいのに惚れたといふ者であつたならば、他にそれよりも美男なものがあれば、忽ち今の男と切れるであらう。しかし、あの男を好く、單に好くといふ女であつたらば、どんな事があらうが、決して其の男と離れない、好くほど強固なものはない。

とかく他と比較するといふことは、つまらない無益なことで、又往々不幸な争をおこすものとなる。文學者と實業家と争ふ。又文學者の中でも、考證に得手なものと創作に得手なもの、即學者と作家と互に他を輕蔑するやうなことが往々ある。くだらないことである。考證が好きだから考證をやる、創作が好きだから創作をやる、文學が好きだから文學に従事する、日本が好きだからこの國の爲に

盡すといふ風にありたい。好く即ち愛するといふことは、比較の考を超越して絶對の力を有するものである。

鷗外さんの「文づかひ」に、「何故と問ひ給ふな、それを誰か知らむ、戀ふるも戀ふる故に戀ふるところ聞け。嫌ふもまたさならむ」とあつたが、まことに好きといふことには別に理由がないのである。しかし、理由をつけければ、勿論付かぬことも無いが、それはいらぬことである。ウォールヅウォースさんの詩の中に、エドワードといふ小兒が、なせお前は海岸が好きかと聞かれて、大に窮したが、繰反して聞かれるので Weather-Cook が無いからと答へたとあるが、強ひて好きの理由をいふのは、どんな高尚なことを列べ立て、も、畢竟このエドワードの答と五十歩百歩なのである。

我々は、おのれの住む國に惚れ、おのれの爲す業に惚れ、おのれ

に惚れなければ、健全でない。しかし、一の事物に惚れるといふことが、同時に、他の事物を排斥するといふことであつては淺薄極まる。他と比較して其の事物を優れたものとしたがるのは若い。又其の事物に惚れ、惚れる理由を喋々するのも若い。他との關係を離れて、其の事物に惚れ、惚れるが故に其物に熱心であればそれでよいのである。

さて一事一物に惚れると共に、一方に於ては一切平等の考があつて欲しい。どんな事どんな物にもそれ／＼特點があつて、棄て難いものであることを念つて居て欲しい。有形界でいへば、人も鳥も獸も蟲も魚も皆平等の價がある。無形界でも同じくである。たゞ我が其中の或物であり、其中の或物に惚れて居るといふ汎い考を持つては如何であらう。我が所謂大乘の自惚といふのは、側面に博愛の色

を帯んで居るものである。かういふ自惚心が鼓吹したいものである。



常磐樹

霞うらゝに風温ぬるき
櫻は艶あまに咲き匂ふ
されど常盤樹
露冷やかに霜結ぶ
紅葉千入の色深し
されど常盤樹

春さり來れば誘はれて
常盤樹はたゞ緑なり
秋さり來れば染められて
常盤樹はたゞ緑なり



あ、常盤樹よ
 汝が心はいかに冷たき
 變らぬを偉なり
 誇る汝が様疎ましや
 佐保姫の息にも觸れず
 緑の色は汚されじと
 誇る汝が様疎ましや
 斯るを尊き道としいは、
 斯れと説くが教ならば
 嬉しや櫻よ
 我は櫻とともに浮かれむ
 誘寄らば誘はれむよ

汝が心はいかに堅き
 動かされぬを偉なりと
 龍田姫の手にもさはらず
 道を踏ますて我行かむ
 教躡りて我行かむ
 嬉しや紅葉よ
 紅葉とともに色かへむ
 誘はるゝぞおもしろき



迷來らば迷はされむよ
 迷はさるゝぞおもしろき



自我の主張

こゝに何某といふ先生ありと假定せよ。先生頗る書を好み、新刊の書ありと聞きては海外の書林へも注文状を飛ばし、珍書出でたりと聞きては直に車を驅つて古本屋を訪ふ。斯くの如くにして藏書幾千萬卷、しかも尙際限なく増加しつゝあるなり。先生これを亂抽して他を顧みず、和といはず漢といはず、洋といはず、殆ど涉獵せざるなし。人、先生を訪ひて問うて曰く、某國某時代の文學如何と。先

生答へて曰く、某國某時代の風潮は云々なり、當時の文學者には某、某あり、作物には某、某、某あり、就中、某の如きは最注意すべきものなりと。問うて曰く、某の歿せしはいつ頃ぞ。答へて曰く、何年何月何日、某書によれば其日曇天なりきとありと。曰く、某といふ書今存在せりや。曰く存在せり、初め某氏の庫中にありしものなるが、某年何々の理由により某氏の手に渡り、その人米屋の拂ひに窮して其の書を某町某屋といふ質店に投じ、其儘流れたるを、某年某月某日某氏これを求めて今某處に保存せらる。問ふに従つて答へ聞くに従つて語る、響の物に應ずるよりも速なり。問ふ者呆然として自失し、肅然として容を改め、再拜三拜して曰く、何ぞ先生の博學にして強記なる、先生は實に千古の碩儒なりと。之を語り傳へ言ひ傳へて、門前に車馬絶えず駐まり、先生の名聲は天下に徧し。

書肆、雑誌記者、新聞記者、は踵を接して先生に寄稿を乞ひ來る。先生乞に應じて記すところ、紀傳あり、解題あり、註釋あり、翻譯あり、かくの如くにして讀書社界は悉く先生の名に親めり。大學は先生に講座擔任を依托せり。文部省は先生に博士の學位を授けたり。かゝる先生ありと假定せよ、吾人はかゝる先生に對して十分の尊敬を拂ふべしや否や。吾人はかゝる先生を理想として進むべしや否や。吾人はかゝる先生の世望を擔ふを祝すべしや否や。余は世望を擔ふの故のみを以て漫然先生の足下に跪くこと能はず。靜に先生の眞價の那邊に存せるかを見む。先生の眞價が單に多く知りよく記憶せりといふにあらば余は學界のため重寶なる人として、寧ろ便利なる器械として之を愛せむ。然れども愛するのみ。尊ぶに非ず。敬ふに非ず。尊ぶに足らず敬ふに足らざればなり。

それ世は廣し、人は多し。而して眞に尊ぶべく敬ふべき大人物は、いかなる國にても、いかなる時代にても寥々として曉天の星の如きは如何。その大人物は他の大多數の人間と比していかなる點が秀でたるか。大人と小人との區別は何の標準によりて成れるか。大人とは如何なる人を意味するか。

この問題の解決は個々人々によりて異なるべし。兒童中には、日清戰爭中の最大人物として原田重吉の如きを推すもの多からむ。何となれば重吉の行爲は兒童に最了解せられ易ければなり。余はまた余自ら最了解し易くして、余自ら至當なりと信ずる標準によりて人物の大小を別たむ。其標準とは如何。曰く自我の主張是なり。前述の博識先生の如き若し自我の主張なくんば焉んぞ大人物と稱する價あらむや。

伊勢貞丈は稀有の學者なりき。其の知識の廣大なる、其の考證の確實なる、今なほ人をして驚歎に堪へざらしむ。而して彼の本領は何なりしか。彼の本領は博く知るといふにありしなり。

本居宣長は稀有の學者なりき。其の知識の廣大なる、其の考證の確實なる、今なほ人をして驚歎に堪へざらしむ。而して彼の本領は何なりしか。彼の本領は博く知るといふにありしか。非ず。敬祖、尊王、國家の自重、國民の自尊、これ等の精神が宣長の最終目的なりしなり。彼が知り得たる博き知識は悉くこの精神の鼓吹の材料とせられたりしなり。彼が三十五年の長日月を費して著述したる古事記傳の大篇も、單に古事記の註釋に留まらずして、なほこの鼓吹の材料とせられたるならずや。

宣長は學界に對して多大の貢獻をなしたりと雖、彼が自尊的精神

を以て根本とせしが爲に、學者として往々失敗したる迹あり、信ずべからざる説をなせる箇所多し、獨斷的研究に失せる箇所多し、こは余輩が屢先輩の講述に聞き、屢先輩の著書に見たる所なり。學者なるもの、本領が、深く究め、精しく探りて、而して其の知り得たる所のものを極めて忠實に、現代に對し、後世に對して表示す、こいふのみにあるものならば、伊勢貞丈の如きは實によく其の本領を發揮したるものといふべし。學者として大成効をなし、者といふべし。而して本居宣長の如きはその根本に於て既に已に學者としての資格を缺きしものともいふを得べし。

然れども學者といふ小範圍を離れて、人間としての價值如何に就て二人を見よ。貞丈は、其の著書中に所々自己の所感を記せりと雖、大體に於て彼は自我の主張を缺けりといふを得べし。宣長は然らず。

一生の事業は悉く自我の主張なりしならずや。學者てふ小範圍に蠢蠢たるべく餘り大なる傑物なりしならずや。彼の感化は廣く學界以外に及ぼしたるに非ずや。人間としての價值に於ては貞丈輩と日と同じくして談るべけむや。

徳川幕府隆盛を極め、諸學勃興せし時代より以來、學者就中儒學者にありては、單に古書の註釋講義をのみなすを以て寧ろ耻辱とし、自己の主張信仰を實行するが本領なりとせる思潮ありしなり。所謂諸先生の私塾なるものは、文字以外書籍以上に大なる理想ありて結ばれしなり。彼等は學問の奴隸たらずして學問を活用せんと志し、なり。

翻て現代を見よ、現代の學界を見よ、比較的研究をなす學者あり、歴史的研究をなす學者あり、故人の事業を調査する學者あり、古書

の註釋を事とする學者あり、故事を分類編纂する學者あり、珍書を
翻刻する學者あり、外人の著述を紹介する學者あり、年表を作る學
者あり、解題を作る學者あり、辭書を作る學者あり、索引を作る學
者あり、晝といはず、夜といはず、或は書齋の明窓の下に、或は圖
書館の電燈の下に、營々として彼等がこれ等有益なる事業に従事す
る勤勞は、晝に現代に對する大なる貢獻となるのみならず、遠く千
載の後の學者をして、明治時代の學者の恩澤を謝せしむるに足るべ
し。實に彼等は鳴謝せらるべき人士なり、報酬せらるべき人士なり。
而して社會は作家に對して冷淡なるに拘らず、彼等に對しては十
分の尊敬を拂へるなり。かくの如くにして彼等の繼嗣者は無限に續
出せむとす。學界の多福喜ばずして可ならむや。

余とても彼等の存在の必要を認むる者なり。彼等が永世繼嗣せら

るべき必要を認むる者なり。然れども余は思ふ、彼等が單に事實に
忠實に、單に無我に、單に研究するのみなる限り、彼等は到底便利
なる器械なりと斷言し得ざるを奈何せむ。余は余が冒頭に假定せし
博識先生が彼等の最大理想なるを悲む、余は貞丈の亞流の多きを喜
ぶと共に、宣長の亞流の餘りに少きを悲む、外山博士の唯一人のみ
なりしを悲む。高山博士の唯一人のみなりしを悲む。子規居士の唯
一人のみなりしを悲む。知るのみに留まらず、知りて而して言ひ、
盛に自我を主張せし是等大なる人が悉く他界の人となり果てしを念
ひて余は涕泣嗚咽禁する能はざるなり。古來大なる人の生涯が何が
故に短きかの理由を天に向つて詰問して措かざるなり。嗚呼林の如
き博識者中に大人の繼嗣者たるもの無きか。大人たらむと欲する者
なきか。

今の博識者は、自ら其の博識たるのみを以て満足し、人をしてまた博く識らしむることのみを貢献と信するなり。時に自己の所感の鬱勃たるものあるも、或は故人に同説ありしかを恐れ、或はおのが真髓の見透かされむを危み、現在よりは過去に生活するを寧ろ安全なりと信じ、自我の沒了を憂へず、パッシヴの態度を以て健全なりとす。かくて彼等は芝居の囃子方を以て安んじ、礎の石を以て甘んせむとす。何ぞ不活潑なるの甚だしき、何ぞ臆病なるの甚だしき。斯る現象は學術界に於てのみ之あるか、噫不幸にして然らざるなり。創作界に於ても之れあり、技藝界に於ても之れあり、其處に著き無我の現象は摸倣となりてあらはるゝなり、トルストイの摸倣者あり、ゾラの摸倣者あり、ハイネの摸倣者あり、ミレの摸倣者あり、アールヌボールの摸倣者あり、眞の意味に於ての創作をなす者の餘り

に僅少なるには失望せざらむとす。雖能はざるなり。

傍人曰く、君のいふところ一理あり、されど君は餘りに神経質なり、餘りに短慮なり、没我の修業時代を経て而して後に大我の光明は輝くものなり、現時は暫く待つべきの時代にあらずやと、傍人の言善し、然りと雖、大我を期待しての没我ならば暫く待つも可なり、没我其の事を大なりと誤解する現時は、待つに堪へざる時代ならずや。

かゝる没我は形而上に於ける自殺を意味す、學術界、創作界、技藝界に斯る多數の自殺者を生ずるを見て誰か慶すべしとなすものあらむ。宜しく臆病を去れ、内氣根性を去れ、勇敢なれ、大膽なれ、五を知れば、五の自我を主張せよ、十を知れば十の自我を主張せよ、忌憚なく主張せよ、鼓吹せよ、後顧せずして前進せよ、天下に呼號

せよ、天下を感化せしめよ、自我の勢力をして宇宙の大勢力の如く
あらしめむことを期せよ。



松 露

西瓜太郎躍出でよと割^わてけり
鬼灯や餘所の嫁入そねみつ、
鬼灯にかく久松の似顔かな
秋風や石に落ちたる蟬のから
辻堂の椽や椎の實枯松葉

後の月霧の有明となりにけり
友去て我肌寒の獨り哉
笠見れば巡禮もある案山子かな
孝經の上でひつたり屁放蟲
初嵐額^がから下がる長い煤



西鶴の文章

西鶴の文章の徳川文學史上に於て頗る異彩を放てるは今更言ふま
でもなし。嘗に徳川時代に於てのみならず、西鶴の前に他の西鶴な

く、西鶴の後にも、或は其の文を摸せむとしたる者ありしが竟に比肩するに至りしもの無く、復た西鶴を見ざるなり。實に古今獨歩といふべきなり。

然るに西鶴は意外の方面より、種々の攻撃を受け來れり。或者は曰く、西鶴の小説は甚だ淫靡なり、士君子たる者の玩賞すべからざるものなり、風俗を壞亂するものなり、年少者をして邪道に陥らしむるものなりと。これ最も有力なる攻撃にして最も普遍的なる攻撃なり。

されどこの攻撃の有力なりといふ所以は、文學者以外の多數の人より發せらるゝものなるが故なり、多數決にせらるゝ恐れあればなり。苟も文學を味ひ得る人に斯る侮蔑的の批評を取てするもの無し。今めかしき言ながら文學は時勢の反映なれば、西鶴の如く其の時勢

を直寫したるはよくおのが天職を完うしたるものといふべし。其の材料に淫靡なるもの、多きは事實なれど、我未だそを彼の如く美しく書き流したるものを見ず。彼の如く無邪氣に書き流したるものを見ず。否西鶴は寧ろ嘲笑的に遊蕩荒淫を描き出して、讀む者をして己れ等の住める社會の如何に濁れるかを耻ぢしめむとしたる者の如し。かの武家義理物語、胸算用、本朝櫻陰比事、等の書の意味が、一代男、五人女等の意味と反對にして作者の主張はいづれにあるかを疑はしむるは、大に西鶴の爲に注意すべき點ならずや。

一方に正を寫して一方に邪を寫し、一方に美を描きて一方に醜を描く、其の西鶴の西鶴たるどころの那邊にあるかは、精讀すれば自ら明白なるが如し。かの二代男に、蕩兒の宴を張るを描けるどころに、國元より親が相果て申すと呼びにおこせしも、斯様の雪の夕暮

なれば、各吉例に任せ、今宵は一層勇み給へど、頓て酒宴を始めける」とあるを見よ。親の死を吉事といふ、誰かこの事を興あることとして、快く寫すものあらむ。「なんぼう、淺間しき事ならずや」なる文字の、顯然と見透かさる、筆つきに非ずや。これ等の筆法を了解して西鶴物を精讀せむには、彼の採て材料とせしものは想像少くして、當時活社會の實事を有の儘に描寫せしものなること、おのれ濁界に對する閻魔となりて、塵もかゝらぬ淨玻璃の鏡を四方八面に輝かし、こと、其の閻魔たる彼は他方の善男善女に對しては佛の如き無量の同情を注ぎしこと、を會得せむ。

文學者中に又西鶴を攻撃する者あり。曰く西鶴の筆誠に神なりと雖、何ぞ其の椽大の筆を揮つて大小説を著さざりし、好みて短篇を物せしは彼の爲に大に惜むべきことなり、と。されどこは彼の文の

文字の數を數へたるのみの論なり。意味の長きを味ひ得ざるもの、論なり。西鶴の文はコンデンセチーブなるが故に短なるなり。他人の二行三行にて顯はす意味は彼は僅々二字三字を以て示し、或は一字をも費さずして五行六行の意味を傳心せる所往々あり。コンデンセーションは韻文の一要素なり、而して世界の韻文に於て日本の俳諧ほど美しきコンデンセーションを成功したるものあらず。コンデンセチーブの美を味ひ得るもの亦世界の人類に於て日本人程敏なるものあらず。

この俳諧より俳文なるもの生れ出でたり。其の俳文を最も自由に操りて社會を描きしものは是れ西鶴の小説なり。故に西鶴の文の妙味は其のコンデンセチーブなる點にあり。短なるを以て排すべからざるや論なし。かゝる次第なれば西鶴の文は譯すべからざる文なり、

古事記萬葉をも味ひ得る歐人も此れを味ひ得ざるなり。この般の美を解し得る能力ある我國の文學者がかゝる皮相的の攻撃をこの大文士に加へて可ならむや。又これも文學者の側よりの攻撃なるが、内容より形式を重視する者の曰く、西鶴の文は文法に合はずして理通せず、文片言めきしところも甚だ多し、彼は己れ獨り了解して他をして了解せしめ得ざる條々頗る多し、と。確にこの攻撃は彼の弱點を衝きしものなり、西鶴は文法的智識に乏しかりしに相違なし、物の名稱等にも正しき語を知らざりしもの多かりしなるべし。元祿太平記に、「元より西鶴文盲にして書法を知らず、其の證據には、好色一代男世の助島渡の段にいのこづらと午膝と別に書けり、午膝の和名をいのこづらといへば名は二つあれども本一種なり、西鶴が心にはいのこづらと午膝とは別の物と思ふにや、斯様に世俗まで辨へた

る事さへ考へぬ西鶴なれば、況して其外の事取るに足らず、或は曾子の詞を孔子の語となし、枕草子の文を源氏物語にゆづりたるも可笑、凡て西鶴が作れる草子には大小の誤あらずといふことなく、只管片言を載せずといふ事なし」等といへるも、確に彼の弱點を衝き得たるものなるべし。されど西鶴が破格の文を綴りしところあるは、或は不注意の爲なるもあるならむも、多くの場合に於ては、破格なるが爲に面白く、彼が知りながら故更に破格となし、痕歴々たるものあり。

余はこゝに漫然西鶴を辯護するものに非ず。苟も文學に趣味ある人が、淺墓なる攻撃を聞きたる爲に棄て、顧みざるあらむを憂ひ、高潔なる眼を以て、いふべからざる西鶴の文章の妙味を味はれむことを切望するものなり。今西鶴物を讀まむとする人の爲に、左に西

鶴文の特調ともいふべき點を擧げて聊か參考に資せむとす。

第一、てにはを略せる事、

例、この僧極めて孝なる事氷に臥せるたぐひ(俗徒然)

唱へざるに松風自ら法の聲(俗つれく)

朱椀龍田の紅葉を散らし、白箸武藏野に立つ霜柱の如く、(日

本永代藏)

試みに、「朱椀は龍田の紅葉を散らし」なごせむには著く文勢弱くなるなり、芳賀先生の國文學史十講に、「西鶴の文章は疑もなく俳諧者の文章であります、天仁遠波をば成るべく省いて、文章はいくらでも續けて行くのである、云々」かねて御話した通り天仁遠波助動詞等が多いから、自然文章の形が單調になつて氣力も弱くなる傾がある、俳文は其弊を拯はむと試みたものである云々」とあるはこれ等をい

はれたるなり。されどこは西鶴のみこれをなし、には非ず。他の俳人の文、謠曲、淨瑠璃、等にもあれど西鶴は著くこの類の省略をなし、が故にこゝに擧げたるのみ。

第二、詞と地文との間に「と」を略せる事、

例、人間の命は何とて救ひまさぬぞ○あてくしく申せば、(二代男)

さあ是までと取附し時、太夫思はずも悲しや○聲を揚げければ、(二代男)

あれに掛りし友禪繪の風呂敷、古けれど破れぬが不思議なり

○まことしやかに語りぬ、(武道傳來記)

普通の文ならば○印の所には必ず「と」をおくべきを、態と略したるなり。謠曲淨瑠璃等にも大抵かゝる所に「と」をおけり。地文と

詞とを接続せざることを左程味深きことにはあらざれど、これを合點し
おかざれば解し難き所往々あり。

第三、詞と地文とを打違ひに重ねたる事、

例、是非に今宵はわが笹葺に一夜とゞめられしに、(五人女)

「わが笹葺にとまり給へとて一夜とゞめられしに」とあるべきところ
を、詞の一端と地文の一端とを違棚の如く重ねて、其限界を判然せ
しめざるところに面白味あるなり、これも記憶しおかねば意味の取
れにくき所多し。

第四、前句と後句とを打違ひに重ねたる事

例、比は卯の花山を眺め過ぎ、(武道傳來記)

はや色里より祝儀状ながめ入り、

通天の紅葉見るに今は梢に残少なき人も散りぢりの夕暮

「はや色里より祝儀状來れり、それをながめ入り」とやうにあるべき
を、二句の中間にある「祝儀状」を鎖として直に連結したる類なり。
こは「いつか我身の尾張なる熱田の八劍」などの「かけ詞」の筆法
を、異なる方面に應用したるものなり。但第三の例の「残少なき」
は見様によりては後句に續かぬが如しと雖、「残少なき」又は「残少
く」とせずして「残少なき」としたる所を味へば猶ほこの種の例た
ること明なり。

第五、前句完結せずして後句に續ける事、

例、母には病死となりとも、夫程の偽は天も許し給へ、(新可笑記)

其死人の名を六時二刻計呼び續けしに、不思議や左右の手を
耳に當て、是に各力を得

女房どもの隠す事まで人中で語らせ、世に身過ぎ程悲しきも

のはなし、(二代男)

「母には病死なりともいひやらむ、夫程の偽は」といふべきを、「病死なりとも」といひさしの儘にて後に飛びうつる所に妙味あるなり。この飛びうつりの曲藝を、嚴格なる人は見て以て輕佻浮薄なる文體と罵れども、西鶴の主義は、いはずとも解る定り文句は出来るだけ取除く、といふにあれば、これ等の筆勢を非として西鶴の文は味ふべからざるものとなり了るべし。

第六、常に其語に隨伴する語を以て其語の代用となせる事

例、曙は深く尙頻りに車軸して、(二代男)

ほのくより鞍鐙をあらためて美々しく粧はせ、(武道傳來記)
さるすみまへがみに惚れて、(三代男)

「大雨ふりて」といふ意を、大雨といへば必ず出で来る「車軸」なる

語にて現せる類にて、一種面白く通がりたる省略法なり。

第七、短句にして至妙なるもの多き事、

例、人間は慾に手足のついたるものぞかし、(三代男)

禿も召使ひなればとて、さのみ荒く當るべき事にもあらず、

次第送りの皆朋輩ならずや、(二代男)

今三十餘まで臺所を見ず暮しぬ、(三代男)

幾程なくこの家絶えて其名は踊歌に残れり、(日本永代藏)

人の召仕、竈に近き者と申す、(二代男)

或時雪の可愛らしく降る日、(二代男)

西瓜を香の圖に切り散らし、(二代男)

桃の花を手折りに酒なき徳利にさしすて、(五人女)

軒の玉水袖に除けて雪に繪などかきて糸む、(三代男)

筈など深く被りて袖もる水に夏も恨めしく、(二代男)
男の鬢撫付てまことに十九年の馴染此明ぼの、夢かど泪に目
も暗く、(本朝櫻陰比事)

此事においては身を八割きにあひても詮議遂げずには置くま
じ女も女もよるべしと一筋に胸を定め、(本朝櫻陰比事)

この類擧げ來れば殆際限なし。見よいかに寸鐵の鋭利なるかを。は
じめの二例は諺ともなすべく、「臺所を見ず」、「竈に近き」の短句は其
人の全體を寫して餘りあり。雪を「可愛らしく」と形容したるは清
新これに及ぶもの稀なるべく、「西瓜を香の圖に」切る事、「雪に繪な
ご」かく事の能く元祿的動作を描き盡したる、「十九年の馴染云々」
の句は前後の關係を見ずとも涙を催さしめ、「女も女によるべし」の
句は事の如何を問はず毗を裂かしむ。或は人物畫の如く風俗畫の如

く濃艶なる色彩髣髴として顯はれ、或は名優の劇を見る如く、忽ち
泣かしめ忽ち怒らしむ。而してこれ等皆僅々數文字の力なるを思へ
ば、まことに西鶴の筆には神宿れりといふべきなり。

第八、文末に輕き短句をおける事、

例、大方ならぬ因果とや是を申すべし、悲し、(五人女)

何をか見付けられげむ、をかし、(二代男)

この座に有合ふ大盡取持ち是非に貫うて不思議の縁組、知れ
ぬ世なり、(二代男)

大なる趣のあるにはあらねど、さらりといひ捨て、軽く結びたるが
面白きなり。

第九、突然「枕詞」を挿める事、

例、かの里にて見し遣手いその上古の杉といひし萬ほしがり帳を

ひかへて、(三代男)

石上ふるき高橋に思ひ懸けざるはなし、(二代男)

長山人の氣を汲みて山の井の淺くは人に見られず、(二代男)

文中に枕詞を挿むこと珍らしくも無けれども、右の例の如く西鶴の枕詞は往々普通の文字中に突然挿めるところが面白きなり。當時の時代語中に忽ち古代の雅語の顯はるゝがコントラストにて快く感ぜらるゝなり。遣手の名に枕詞をつけたる等不調和の調和ともいひつべし。

第十、突然漢語を挿める事、

例、頃は極月の下旬しかも其夜降雪馬蹄三尺深く袖打拂ふ暇なく

戦ひけれども、(武道傳來記)

次第のぼりに太夫残らず買ひ出し、時なる哉都の末社四天王

願西神樂あふむ亂酒にそだてられ、(日本永代藏)

蜘蛛の絲筋千度の網に飛ぶ蝶羽を留められ遽々然としてあれで

果つべき、(二代男)

これ等の妙味も第九のそれと同じ。

第十一、かけ聲を挿める事、

例、のりかけに菅笠して、はい、馬の聲、(三代男)

意外なる語を挿みたるが面白きこと、第九第十と同じ。

この例數多くは見當らねど、思ひきりたる筆つきにていかにも輕妙なれば特にこゝに出したり。

第十二、和歌和文を變形して引用せる事

例、人の親の目に見えぬにはあらねども子がだます道にぬかれぬ
る哉とはいかなる粹がよみけむ、(三代男)

粹ならばいざ言問はむ都鳥我思ふ君は氣のとほるやと、(三代男)

袖行く水のしかも又同じ泪にもあらず、(二代男)

これを見て哀と思へ山櫻花より外に秋は友とする人もあらず
やと師弟の約束、(二代男)

屑屋の軒に貫きしは味噌玉か何ぞと人のひもじかる時、(二代男)

おのれは飯貫ひの分として慮外者と叱れば現はれ渡る瀬々の
立浪の羽織をこくくに着て、(二代男)

さてはと明石(女郎の名)ほのくくと夢さむる心して、(三代男)
揚弓の會も詠め暮らし山の端にげし酒嫌ひを引留め、

右の中第一第二の例の如きは卑しき地口にて餘り價值なきやう覺ゆ

れど、終りの三は本歌の一端のみを何の苦もなく使ひこなして妙味湧くが如し。

第十三、漢詩漢文を變形して引用せる事、

例、是を譬へて楓橋の夜泊かと思はれ、心は空に鳥鳴いて明方の
別れを惜むもあり、(新可笑記)

京屋の端居して山鉾の咄べんくくと月落鳥啼秋の初霜おきわ
たして軒も物凄き半天を怪しき光の飛ぶは人魂なり、(二代男)

魂も君が袖にや覺えず更くる月に驚き、歸んなむ、いざ菓子
盆まさにあれなむとすと戯れ、(三代男)

揚屋北に構へて近うして西に九軒町、二川溶々として鮎堀長
堀流れ入る、一步に局十歩に太夫格子大溝の漲るは呑みさし捨
つる雫なり、煙の口に横るは薫烟草の壳、太鼓の立町に驚くは

長持の還りをよくるなり、(二代男)

第一第二の如き修飾は謠曲にもあり。第三がいかにも西鶴的にて輕妙なり。阿房賦赤壁賦の地口は往々人のすることなれど、この頃には珍らしきものなるべし。俳文家は元來詩歌等を引用すること度に過ぐる程なれど、西鶴の使ひ様は第十二例第十三例の如くすべて輕きを旨としたれば胃に障らす。

第十四、文法を破れる事、

氣骨ある文章には大抵文法を輕じたり。西鶴の如き氣骨あるものは、著くこの事あること當然の事なり。

今こゝには見當りたる二三を擧ぐるのみ。

例、床に日月の懸繪著古曆を飾り置かれり、(二代男)

孝ある娘のことを語り傳へり、(新可笑記)

近き頃に呼び迎へり、(新可笑記)

古代家下に神變ある事を語り傳へり、(新可笑記)

朗詠等にも「霽れり」といひたる例あれば、これは咎むるにも足らざるべし。

例、大盡も内端なるこそ奥床し、(二代男)

身過ぎ大事と思はる、こそ可笑し、(二代男)

これも口語風の文と見做せばよかるべし、且古代の文法には斯る結び様もあり。

例、是藤太殿何方への御越なるぞと申されし、(武道傳來記)

新座の人進みて兼ねて願ふ所と御請を申されし、(新可笑記)

「きり」「けり」等用ひては加行音耳立ちて強すぎる場合に、只輕く「し」としたる方適當なるべし。

今の小説家の文法心得たる人がなほこの例の如く記すればそゝるなる事にはあらず。

例、人知れぬ泪の袖口へ禿が狀一つ差込み、心は先へ飛びて箱階子の下り様あらけなく、(二代男)

「心は云々」の主格は太夫なり、されば「差込み」は「差込めば」なごあるべきところを、連用段にいひさして、急に次句にうつらせたるは、意味の急なるがためなり。淨瑠璃にもかゝる類ありて、嘗て坪内氏が「破格の名文」といふやうなる題にてこのことを論せられしことあり。

例、この廣き野山までと、ころせきなく、小提開くべき方もなし、(三代男)

昔の鯉賣の事はいひ出す人もなく、(日本永代藏)

これ等は全く「片言」にて何の理もなきことなり。よく識別して味ふべきことなり。

第十五、かけ詞の事

例、何をかもとに、僉議の役人退屈して、(新可笑記)

國を治めて風枝に音なき松永霜臺、(新可笑記)

これ等の筆つきは戯曲等に事舊りたり。されど、

例、残り三百五十兩は我住みし屋敷の泉水の北の方なる岩組の根にあり、と申渡し、(新可笑記)

譬へて見たれ、柳に雪の消えもせぬ夕景色、(二代男)

の類に於ては自ら奇趣あるを見る。

第十六、新造語の事

例、十月十二日の月雪もあらはに野邊も見えわたり、(二代男)

此義堪忍ならずと果し、眼にて腹立、(武道傳來記)

あはうさ哀れさ悲しさ虚さ、折節は誠さも稀に、(三代男)

寒いも恐いも忘れ、夢になりてぞ來る、(俗つれく)

皮癬なほりて未だ間もなき手を打懸けらる、も嬉し悲しくありける、(俗つれく)

玉水の裾にきはつくも始末心に端折り、(二代男)

點を打ちたるは新造語と思はる、ものなり。「虚さ」、「嬉し悲しく」

の如きは氣障にて面白味少けれど、他は無理ならぬ造語にて襲用すべきものなり。短くして面白くせむとすれば自然新造語の出づる理なり。俳句にこれの多きもこの故なり。

第十七、後の文學に趣向を與へたる事、

西鶴の小説は短篇數多く材料豊富にて、且多方面にわたりたれば、

其一部を敷衍しても長篇の作を出だし得べし。

庭鳥のとまり竹に湯をしかけて夜深に鳴かせて夢をさまざませ

て追ひ出し、(一代男)

この趣向は菅原傳授手習鑑の道妙寺八聲の場なる、

それを鳴かすが秘密事大竹中へ熱湯を入れ其上にとまらすれば湯氣の廻るを陽氣と心得時を作る止り竹も挾箱に入れて來た、

のところ其儘に用ひられたり。

又俳句に趣向を與へたりしもあり。即ち、

夢見よかど入りて汗を悲む所へ、秋まで残る螢を數包みて禿に遣し、蚊屋の内に飛ばして、水草の花桶入れて、心の涼しき様なして、都の人の野とや見るらむといひ様に、寢懸姿の美し

く、(二代男)

の趣向が、蕪村の

蚊屋の内に螢はなしてア、樂や

の句となりし類なり。西鶴物讀む人か、る影響の如何を調査せむも興味あるべく、敷衍して脱胎の作物を出さむも有益なるべし。

以上長々と陳べ來りしこと未だ秩序なく連絡なけれど、西鶴讀まむ人の爲にもならむかとして物せしなり。されどいづれも短節短句等に就きていひしのみなり。内容全體に關して論せむとするは、容易ならぬことなれば、後を期してこゝには略せり。



琵琶島

井戸田の里の假庵に、

假の情を交しつる、

あ、其縁今絶えて、

君は都に我はこの、

野末に残る一本芒、

袖うちふれど甲斐ぞなき、

君ははや遠し、

月うすれ風さむし、

あはれ幽けき鐘の音、

しみぐ思ふわが身の行末、

君なくてながらふべしや、

たまはりし白菊の琵琶、

かきならす力もなしや、

あなつれなや堪へがたや、

よつの緒のしらべにかけて三つ瀬川

沈み果てしと君に傳へよ



月影散るや水烟
月影散るや水烟

その世の恨今もなほ、
知るや知らずや賤の男が、
琵琶島川の堤ぞひ、

花の姿は波に紛れぬ。
残る琵琶塚琵琶の池、
小唄うたうて行き通ふ、
松風咽ぶ秋の夜なく。

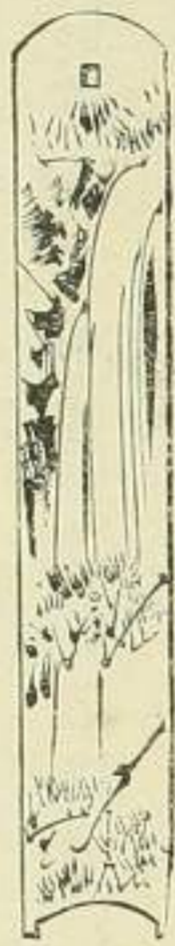


猿 酒

木犀や侍女物言はず燭を剪る
蟲の音の駒形あたり小提灯
河岸の月積薪の上にか、りけり



鴟一羽鶏頭の愚を呵して去る
夜寒さを長き伯父御の異見かな
朝寒のほつれ毛かむやくの字形
小春日の峰や道士の影幽か
深川や芋屋の行燈一時雨



玉手函

昔々大昔、この老世界が、まだ罪のない赤ン坊であつた頃、お父
様もお母様も無いエビメシアスといふ男の兒がありました。この兒

の遊び友達になつたり又互に助け合ふ爲に、遠い國からパンドラといふ女の兒が來ました。この子もやはり父も母も無い子でありました。

パンドラがエピメシアスの居る小舎に入る時に、一の大きな函が先づ目に着きました。それでパンドラは門を潜るや否や、第一番に問ひました。

「エピさん、この函には何が入つてるの」

「可愛らしいパンさんや、」エピメシアスは答へました、「其れゝ秘密です、貴女ネ私への義理だと思つて、其事を聞きつこなしにして下さい、この函はネこの儘大事にしておけつて、置いて去つた人があるんです、だから私だつて何が入つてるだか、少とも知りません、」

「それぢや、誰が此處へ持つて來たの、」パンドラは尋ねました、

「そして何處から、此れゝ來たの、」

「それも秘密です、」エピメシアスは答へました。

「ぢれつたい、」とパンドラは唇を尖がらして叫んだ、「私こんな大

きな厭な函、何處かへ打捨ると善いと思ふワ、」

「サア此方へおいで、もうそんな事考へるのは止しなさい、」エピ

メシアスは叫んだ、「外へ出て、外の小兒達と面白い事して遊び

ませう、」

このエピメシアスやパンドラの居た時は、今から何千年といふ大昔のことですから、世界の様子が、今日から見ると、悉皆違つてゐます。

この頃は誰も彼も皆小兒ばかりでした。しかし危険といふことも、

困難といふことも無い時代で、着物を製することも要らず、飲み物や食ひ物は、いつでも餘る程あるのですから、つまりお父様やお母様の必要も無かつたのです。

小兒の食べ物は木に生つてゐるんです。朝、木を見ると、その日の晚餐になる實の花が咲いてゐます。夕方に見ると、翌日の朝飯の蕾が見えます。なんと愉快な生活ではありませんか。

労働をする必要もありません。課業に出精する必要もありません。たゞもう遊んで居ればよいので、一日中、小兒が可愛らしい聲で話す聲、鳥のやうに歌ふ聲、面白さうに笑ひ興する聲、が響いて居ます。

最も不思議なのは、この頃は、小兒同士の間で決して喧嘩も無ければ、泣くといふことも無ければ、一人仲間を外れて濼面作つて居

ものなごもなかつたことです。

實に善い時代ではありませんか。今こそ「苦勞」といふ厭らしい、小さい、羽のある怪物が、まるで蚊のやうに無數に飛びまはつて居ますが、この時代にはそんなものは更に無かつたのです。

ですから、バンドラが、かの不思議な函の秘密を發見し得ないための心痛は、この世で始めて經驗された非常な大煩悶であつた、といふことは、尤な次第であります。

この事は、初めは「苦勞」の、ほんの淡い陰影に過ぎなかつたが、それは目を重ねるに従つて、漸々漸々と固つて來たので、兎に角、エビメシアスとバンドラの居る小舎には、外の小兒の舎よりは、目の當り方が弱い、といふ有様になりました。

「何處からこの函は來たんだらう、」バンドラは絶えず獨言に云つ



たり、エピシマスに尋ねたりして居る、「そして一體どんな物が
入つてゐるんだらう、」

「いつもく、函の事ばかり言つてるぢやありませんか、」エピメシ
マスは終に斯ういひました、「もう此事をいはれるのが厭で厭で
堪らなくなつたので、願ひだ、愛らしいパンさん、どうか外
の話をしてくれませんか、サアおいでなさい、一處にいつて無
花菓の甘いのを採つて、二人の晚餐にして、樹の下で食べませ
う、而して貴女がまだ食べたことのない、甘くて、ポタ／＼汁
の垂れる様な、葡萄もありますよ」

「いつもく、葡萄や無花菓の事ばかり言つてるのネ」バンドラ
は憤れて叫んだ。

「それぢや斯うしませう、」其時代の小兒並みに、至つて氣質の良



いエピメシマスはいひました、「これから驅出して行つて、お友
達と一處に面白く遊んではどうだネ、」

「そんな事、もう飽き／＼しちまつたワ、構はないで頂戴、私澤
山よ、」怒りつぽいバンドラが答へた。「私何もしくつてい、」

この厭な函、この事ばかり始終考へて居るワ、何が入つてるか
話して下さると、い、のにネ、」

「もう何度も何度も話した通り、私は知りません、」エピメシマス
も少し激して答ました。「それなのに、どうして、中に何が入つ
てるか、話せますか、」

「開けて下さつたて、い、でせう、」バンドラはエピメシマスをジ
ロりと視ながらいひました。「さうすれア二人とも見えるんだも
の、」

「バンさん、何を考へてます。」エビメシアスは叫んだ。この大切な函、決して開けぬといふ約束で依託せられたこの函を、無法にも開けて見ようといふ怖しい了簡を聞いて、エビメシアスは悚然として思はず顔色を變へた。その様に、流石のバンドラも、全然忘れてしまふがよいと思つた程であつた。しかし矢張バンドラには、函のことを考へたり話したりする事を止めてしまふことは、到底出来なかつた。

「せめて、」バンドラがいひました、「どうしてこの函が此處へ來たのか、その情況だけでも話して頂戴、」

「貴女の來た丁度前にネ、」エビメシアスは答へました。「人が來て此處の戸の所へ置いて行つたんです。其人はネ大變莞爾くして居て、伶俐らしい人で、この函を下へおろした時には、今に

も笑ひ出しさうにして居ました。妙な、外套見たいなものを着てネ、帽子も變な帽子で、羽細工をしたところがあつてまるで翼の生へた帽子の様に見えました。」

「杖はごんなのを持つてたの。」バンドラが問うた。

「アー貴女が見たことも無いやうな、奇妙な杖でしたよ。」エビメシアスは叫んだ。「その杖にはネ蛇が二疋纏着いてるところが彫つてあつたが、私が初め見た時にア、活きてるかと思つた程、巧く出来て居た。」

「私その人知つてます。」バンドラが考へながらいひました。「さういふ杖を持つてる人は外に在りアしない必とクイックシルヴァーに違ひない、私を此處へ連れて來たのも、あの人だつたから、この函を持つて來たのも、あの人に違ひないワ。必とこの函は

クイツクシルヴァーが、私の所へ持つて来てくれたんだよ。此中には、私の着る綺麗な着物もあるだらうし、二人で食べられる甘いものも必と入つてますよ、

「それア、然うかも知れませんが、エビメシアスが外の方へ向き直りながら答へました。しかし、クイツクシルヴァーが、歸つて来るまでは開けるなど言つたんだから、それまでは蓋を開ける権利は無いです。」

「なんて馬鹿な人だらう、」エビメシアスが小舎を出て去つた時に、バンドラは呟いた。「もう少し確りしてなけア仕様がなないネ。」

バンドラが来てから、エビメシアスがバンドラを誘はないで、獨りで外へ出掛けたといふのは、抑この時が初めてゞした。エビは無花菓や葡萄を探したり、今までの遊び連中の外の仲間で、何か面白

い事はないかと探したりしようと思つて、行きました。エビは、もう函のことを聞くのが死ぬ程辛いので、クイツクシルヴァーといふ人か誰か知らんが、この函を他の兒の舎へ置いて行つてくれたら、バンドラの目に着くことも無かつたらうに、と、つくづく思つたのであつた。

バンドラも、まアどうして、彼様に一つ事ばかり悪執着く噂るんだらう。函、函つて、函の外の話は、何にも仕やしない。あの函は何かの魔力でも持つてるやうで小舎の狭い故か、バンドラが、いつも函に躓く、エビメシアスも同じ様に躓く、畢竟あの函は四本の脛を絶えず傷つけるのである。

エビメシアスは實際可哀想で、朝から晩まで、函が耳に附いてるのは、厭でく堪まらないでせう、殊にこの幸福な時の小人類は心

配といふものは、どうするものか知らぬ程ですから、なほ更尤な次第です。だからこの小さな心配も、今日我々が出逢ふやうな、とても比較にならない大きな心配と、同じ位な煩悶を來たしたのである。エピソードが去つた後でバンドラは一心に函を視詰めて、立つて居ました。

パンは幾度もく、口を極めてこの函を罵つたが、決してそんなに厭な函では無い、どうして厭なところか、非常に美しい器物で、如何なる部屋へ備付けても立派な裝飾になるべきものでありました。其れは美しい木で製つてあつて、黒い、光澤のある木理が澤山に見えて、それがまた十分磨き込んであるので、バンドラの小さな顔も、ありく／＼と映るのである、別に鏡といふものも無い時であるから、この點だけでも、バンドラがこの函を餘程大切にしないで

らぬ譯だのに。

函の角や縁には、驚くべき細工が施してある。縁の周りには、上品な男女の姿や、種々な花や葉の塊つてる中に、見たことも無い様な可愛らしい小兒が遊んでるところや寝轉んでるところが、それはそれは見事に彫刻してある。而してこの花や葉や人などが、様々の美を結び付けた花束のやうに、調和の妙を極めて居ます。

併し處定めす葉の彫刻の背後から餘り愛らしくない顔や甚だ醜くて總ての美を打壊すやうな顔が覗くの、バンドラが一二度見たやうに思つた。ところが傍へ寄って指で觸れて見ると何にも無い。美しい顔の見えることもあるが、それを横から見ようとすると、直に厭な顔になつてしまふ。

これ等のうちで最も美しい顔は蓋の眞中の高い凸彫の中に顯は

れるのである。其處には木の黒い滑かな光澤と額のまはりに花環のあるこの一の顔の外には一物も無い。バンドラはこの顔を屢熟視して、その口などは全で活きてるやうで、笑を含むことも憂を含むことも出来さうだと思つて居た。これ等の顔は皆活き／＼とした寧ろ不祥な素振で、ともすると其の口が物を言ひさうであつた。

若しこの口が物を言ふなら、

「怖くはありませんよバンドラさん。この函を開けたからつて、何の害があるものですか。あはれな一本氣のエピメシアスを氣に懸けることは要りません。貴女は彼よりは伶俐です、彼よりは十倍の精神を持つていらつしやる、函をお開けなさい、非常に美しいものが出るかどうか開けて御覽なさい。」

多分こんなことを言つたでせう。

今までお話することを忘れて居ましたが、この函は錠が掛けてあるとか、又は外に何か仕掛があるとかいふそんな面倒な事はしてなくて、唯金の紐をかけて、それに大變込入つた結目がしてあるだけである。この紐は見たところでは本も末も無いやうである。こんな奇妙な出入の多い結目はまたとあるまい。いかに器用な指もこれを解くことは出来まい。併しこの困難がある爲にバンドラはこの紐を調べて、どういふ風にしてあるか見ようと思つて一層心を誘はれた。既に二三度バンはこの函の前に屈んで、拇指と食指の間に紐を挿んだが、敢てそれを解かうとはしなかつた。

「私は確にどんなに結んであるか見よう、ナーニ解いた後で又結んで置く事は出来ることも、なにも祟なんかある筈は必と無いよ、エピソードだつて其丈けの事で私に小言はいふまいから、なにも

この函を開けようと云ふんちや無い、たとひ紐を解いたつて、あの馬鹿な小僧さんと相談なしでは無論開けはしないサ。」
パンドラの爲には、何かしなければならぬといふ仕事でもあるか、或は外に心を注ぐことでもあつた方が、絶えずこの一の物の爲に煩悶する苦がなくてよかつたであらう。併し「苦勞」がこの世に現れない前は、子供達の生活はいかにも容易で、あまり暇ひまがあり過ぎたのである。彼等は花の叢で隠れん坊をしたり、花環で目かくしをして鬼ごつこをしたり、この世界が赤ん坊であつたうちに考へられた其外の種いん々な遊戯をして、永久日を送ることは出来なかつた。生活が總べて遊である時代では勞作こそ眞實の遊である。この當時はすべき仕事しごとが絶對的何もないのであつた。
私が想像するに、小舎こやのまはりを少し掃除して、美しい花を採つ

て、(それも到る處にあつたので)そして其を瓶の中へ入れて整理する、この位な事をすれば、もう憐れな小パンドラの一日の仕事はお仕舞であつたでせう。さて其丈の仕事しごとを濟せば、後の時間を費す爲にかの函がある。

だから一方からいへば、この函はパンの爲に幸福なもので無いとも斷言が出来かねる譯わけである。それはパンをして考へしめ、又耳を貸す人があれば、いつでも話さしめるだけの思想を供給して居た。パンが機嫌の善い時には、その函の照輝いて居る光澤つやや、縁えりのまはりを飾つて居る美しい人面や葉などを賞めることも出来た。又心持の善くない場合には、それを押遣つたり、意地の悪い小さい足で蹴くけることも出来た。

この函は度々蹴くられた。(併し御存じの通りの悪い函だから蹴くられ

る位は當り前です) 併しこの函でも相手にしなければ、わが活動的の小平ンドラは如何にして時を費すべきかを知らなかつでせう。この中に何かがあるかを推測することが實に終なき仕事であつた、一體全體それは何でありませう。

わが幼き讀者諸君も、身に引き比べて考へて御覽、クリスマスか新年に貴君の所への新しい綺麗な贈物が入つて居さうな大きな函が家に來て居たらどうですか、どんなに心が騒ぎませうか。貴君等はパンドラ程は熱心にならぬと考へますか。若し貴君がその函の傍に獨りつ切り居たら、その蓋を開けたいとは思ひませんか。どうしてどうして、とてもヂツとはして居られないでせう。その中に玩弄品があると思つたら、一寸覗く機會を見遁がすことは實に難いこととせう。パンドラは果して玩弄品があらうと考へたかどうか私は存じ

ませぬ。世界そのものが大きな玩弄品であつたこの時代にはまだ特に玩弄品を造り出す者もなかつたのでせう。併しパンドラはこの函の中には甚だ美しい尊い物が何かあるといふことを確信したから、今こゝに居られるお嬢さん達の思ふ程に是非覗いて見たいと思つたのです。而してその度が少し多かつたのでせう。しかしそんな細かいことは存じませぬ。

然しながら、度々申しましたやうな、この特別な時代に、パンの好奇心は大に増して、函に近づくに至つた。出来るならば開けて見ようかと半分決心した、といふ位には止まらなかつた。あゝ、執拗なパンドラよ。

先づパンは函を持擧げようとした。それはパントラのやうな子供の細腕では、とても擧らぬ程重かつた。やつと函の一隅を床から一

二寸程舉げて手を離すと、随分大きな響がした。すると暫時函の中で、物の動く氣情がした様であつた。パンは耳を寄せて聞いた。壓されて呟くやうな物音がしたやうであつた。或はたゞパンドラの耳が鳴つたのであらうか、或は心臓の鼓動であつたらうか。この子に取つては、實際何か聞いたか聞かないか位の事は好奇心を充たすに足りなかつた。パンの好奇心は非常な度に達したのである。

パンは首を後に引いて、金の紐の結目に眼を凝らした。

「この紐を結んだ人は餘程賢い人に違ない。」パンドラは獨語した、併し私は確に解くことが出来ると思ふ。少くもこの紐の兩端を見付けることは出来る。」

かくてパンは紐を手にとつて、力を籠めて、指を綱繆の中へ突込んだ。殆ど考へもせず、又自分が何をやつて居るかも知らないで、

忽ち其を解くことに熱中した。其時日光は開けてある窓から燦然と差込んで、遠方で子供の遊んで居る樂しげな聲が聞えて來た。そのうちにはエピメシアスの聲も交つて居るでせう。パンドラはそれを聽かうと、暫く手を止めた。實に天氣のよい日でした。パンがこの難かしい紐を棄て、函のことは一切考へないで走つて遊び仲間に這入つた方が賢くもあり幸福ではないでせうか。

しかし絶えずパンの指は半ば無意識に紐をたどつて居た、而してこの魔函の蓋の花環を着けた顔が、目に付いた時に、それが如何にもパンを嘲つて居るやうに見えた。

「この顔は大變不吉に見える。」パンドラが考へた、私が悪い事をして居るのを笑ひはしないか、と思ふ、私は世界に比類のない寛い心になつて此處を立ち去らうかしら。」

併し丁度この時に偶然紐を捻るやうにしたが、それは實に驚くべき結果を惹起した。金の紐は魔術をかけたやうにスル／＼と自ら解けて、後に函だけ自由に開けられるやうに残つた。

「こんな奇妙な事は始めてだワ」バンドラは言つた。「エビさんは何と言ふでせう、そしてマアどうしたら結べるでせう。」

バンは紐を元通りにしようと思つて。一二の工夫をして見たが、とても自分の技倆では及ばないと悟つた。紐の解けやうが餘り俄であつたから、どんな工合にしてあつたか覺える暇も無かつたから、紐を元のやうな恰好にしようとした時には、何の記憶も止まつて居なかつた。もう斯うなれば致方が無い、エビメシアスが歸つて來るまで、この儘にして置くより詮方も無かつたのである。

「しかし」バンドラが言つた、「エビさんがこの紐の解けてるのを

見たら、無論私がしたと思ふだらう、私が函の中は見なかつたといふことを、どうしたら思はせることが出来るだらう。」

そのうちに、考が遂に悪い思ひ付に及んだ。それはどうせ疑はれるんだから、一度見た方が宜いといふのであつた。嗚呼極悪極愚のバンドラよ。汝はたゞ正しい事をなさむと思ひ、不正な事をなすまじと思ふがよい。遊び仲間のエビメシアスが何と言はうが思はうがそれはどうでもよいのである。若し函の蓋の妖顔が魔力を以て誘ふやうに見えなかつたら、函の中の小さい泣く聲が、前より一層明に聞えるやうに思はれなかつたら、バンとても多分この主義を立て通したでありませう。バンにはそれはたゞ妄想であつたかどうか解らなかつた。しかしバンの耳には確に喧しい耳語が聞えた、それは好奇心の耳語であつたかも知れない。

「私達を外に出して下さい、愛らしいパンさんや、どうか出して下さいよ、私達は貴女のよいお友達になりませう、一寸出して下さいよー」

「何だらう、バンドラは考へた、函の中には何か活き物が居るだらうか、さうだく、一寸一度覗いて見ることに決めた、一度つ切り、あとで前のやうに蓋を閉ぢて置けばよい、一寸一度覗く位に何の禍もありアしないサ」

さて今やエビメシアスは何をしてるか、注意すべき時です。

かの小さい友達が同棲せむとて來た以來、エビがパンを伴はずに遊びに耽らうとしたのは、この時が始めてアあつた。併し萬事うまく行かなかつた、いつもの様に幸福を得ることは出来なかつた。エビは甘い葡萄や熟した無花果を見付けることが出来なかつた、(若し

エビメシアスに一の過誤ありとすれば、それは無花果を少し好み過ぎる事であつた) 熟してるのは餘り熟し過ぎて胸の塞がる程甘いのであつた、いつも面白くなると、快活な聲を出して夥伴の樂を増すが、今日はそんな面白味も感じない。外の子供はエビメシアスはごうかしたらうかと思ふ程いかにも不安で不満足になつた。エビ自らも何の爲に厭な心持がするか知らなかつた。今こゝにお話する時代は、幸福であるといふことが、あらゆる者の性質で、又不易の習慣であつたから、世はまだ幸の外の状態を経験しなかつた。この美しい地上で嬉遊する爲に、子供が送られた以來、一の心も一の體もまだ病みも惱みもしなかつた。終に氣が付いてエビメシアスは遊びを一切止めて、やはり自分と氣の合ふバンドラの許へ歸る方がよいと思つた。併し先づパンを喜ばせる爲に、花を集めて頭の飾になるや

うにと花環を作つた。花は皆可愛らしくて薔薇もあり百合もあり橙の花もありその外まだ澤山あつて、エピメシアスがそれを持つて歸つて行く跡へ一道の芳香を漂はせた。私の見る所によると、小さい女子の指は、花環を綴るのに最適してゐるやうであるが、この時代には男の子でも今よりは餘程器用に造れたものである。

而して私はこゝに、目を蔽ふまでには至らないが、大きな黒い雲が空に凝らうとして居た事を記す必要がある。しかし、エピメシアスが小舎の戸まで來た時に、恰もこの雲は日光を遮つて、俄にうす暗く物悲しい景になつた。エビはうまく密つとバンドラの背後へ忍んで行つて、自分の來たことに氣が付かないうちに、頭へ花環を投げてやらうと思つて、こつそりと戸の中へ這入つた。併しこの場合には、なにもそんなに、こつそりと足を踏むことも要らなかつた。

思ふ様足を踏んで、大人のやうに足音をさせても、いはゞ象のやうな足音をさせても、バンドラは聞付ける氣遣ひは無かつた。バンは自分の目論見に非常に熱中して居た。エビが小舎へ這入つて來た時こそ、かの悪兒が蓋に手をかけて、この不可思議な函を開かうとして居る時であつた。エピメシアスはパンを見た。若しエビが叫んだら、バンドラも多分手を放して、其儘函の禍ある神秘も遂に知られずに濟んだでせう。

併しエピメシアス自らも、口にこそ出さね、函の中が知りたいといふ好奇心を、幾分か持つて居た。バンドラが愈秘密を發かうと決心した所を見て、エビは同じ小舎に居ながら、彼のみ物識りにするには堪へなかつた。又若しその中に美しい或は尊い物が在つたらば己れも半分は取りたいと思つた。かくの如く今まで好奇心を禁制せ

むとて、パンドラに對して、あらゆる潔白な言葉を發した後でエビメシアスは全く愚に返つて、パン同様の過誤に陥つたのである。故に吾人がこの事件に就いてパンドラを非難する時には、必ずエビメシアスの行爲に對しても頭を振ることを忘れてはならない。

パンドラが愈蓋を舉げた時に、小舎は甚だ暗く物凄くなつた。黒雲が今や日を活きながら葬つたやうに蔽うたからである。しばらく低い響が聞えて居たが、直に激甚な雷鳴になつて來た。さりながらパンドラは少しもためらはず、殆ど真直まっすぐに蓋を開けて覗き込んだのである。すると中から翼のある物が澤山函の外へ飛び出したやうであつたが、同時にパンは悲痛を極めたエビメシアスの聲を聞付けたのである。

「あー痛い」エビメシアスは叫んだ、「悪いパンドラよ、なせこの

厭な函を開けたんだ、あー痛くつて堪らない」。

パンドラは蓋を手放して、立上つてエビメシアスがどうかしたのかと眺めまはした。

雷雲は室内の見えぬまで眞黒に群つて居た。しかしパンは澤山の大きな蠅か大きな蚊か、又は鼠姑が刺狗蟲のやうなものが飛びまはつてるやうな不快な羽音を聞いた。而して目が暗さに慣れて來ると、毒々しい様をした、蝙蝠のやうな羽が生へて、尾に怖い長い針がある、醜い小さい物が群つて居るのが見えた。この物がエビメシアスを刺したのであつた。間も無くパンドラも刺されてエビメシアスと同じく、驚き且苦んだ。その時まはりに非常に紛雜を極めて居た小さい怪物はパンの額にとまつたが、若しエビメシアスが走つて來て、それを拂ひ退けなけり、どんなに深く刺されたか知れない。この函から出

た厭な物は何かといふに、これは地上の「苦勞」の一族であつたのです。憎むべき「慾情」も居ました、「懸念」の様々な種族も居ました、百五十あまりの「悲哀」も居ました、瘦せて痛ましい姿をした「不安」も居ました、話し切れぬ澤山の種類の「罪惡」も居ました。つまり人類の精神肉體を苦しめるべき、あらゆる物が、この不可思議な函の中へ閉ぢ込められて、世の幸福な子供が彼等の爲に難儀をしないやうに番をすべく、エピメシアスとパンドラに與へられたのであつた。彼等が信を保つて居たら。何事もよい工合に行つたのである。その時から今日まで大人も決して悲むことなく、小兒も涙一滴こぼすこともなくて済んだのである。

さりながら——一人の惡行の爲めに全世界の禍を招いたといふことは注意しなさい——パンドラがこの禍の函の蓋を開けた爲に、又

エピメシアスの敢て留めなかつたといふ過失の爲に、「苦勞」は遂に吾人の間に立雜ることを得て、とても逐ひ拂ふことが出来ぬやうになつた。この二人の子は己が小舎の中に、この厭らしい群を入れておくことは無論出来なかつたから戸や窓を開いた、すると翼のある「苦勞」は外へ翔つて行つて、到る處に小さい住民を苦しめたので、その後暫時は例の笑聲も絶えてしまつた。又奇妙なことには、今まで決して色も褪めず露を帯んで、艶麗に咲き満ちて居たいろ／＼の花が、一兩日のうちに萎れてしまつて、葉も落ち初めたことである。その上永久幼稚である如く見えた子供達は一日／＼と年を取つて、直に少年となり少女となり、丈夫となり婦人となり、さうかうしてる間に老人になつてしまつた。

その間悪いパンドラも、まづは同じ位悪いエピメシアスも小舎に

住んで居ました。この兩人ともひどく刺されて痛みに悩んだが、それは開關以來始めて覺えた痛みであるから、いかにも堪へることが出来なかつた。固より彼等は全く經驗の無いことであるから、何事であるか薩張了解なかつた。その上又自らも相互の間にも非常に機嫌が悪くなつた。その不機嫌を極端に放縱にする爲に、エビメシアスはバンドラに背を向けて、隅の方に濫面作つて坐つて居ると、バンドラは床の上に倒れて、恨めしい函の上へ頭を押つ附けて、心臓も破れむばかりに泣き咽んで居た。

突然、蓋の下からコト／＼と柔さしく打つ音が聞えた。

バンドラは首をもたげて、「何だらう」と叫んだ。

併しエビメシアスは其音を聞かなかつたか、そんなことに氣が向かなかつたか、兎に角返事もしなかつた。

「私に口も聞かないつて、餘り不親切だワ」とバンドラは更に咽

びながら言つた。

またコト／＼と音がした。それは妖精が小さな指で戯れに軽く叩くやうな音であつた。

「お前は誰だい」バンドラはまた少し好奇心を起して尋ねた、「この厭な函の中に居るのは誰だい」。

中から可哀らしい小さい聲が、

「まづ蓋を舉げて頂戴、お目にかゝりますから、

「いけない／＼」バンドラは又泣き出して答へた、「私、蓋あけることはもう澤山よ、この函の中に居るなら、お前も必度厭らしい物に違ない、いつまでも中に居るが宜いワ、この世にはお前の醜い兄弟姉妹が、もうあちこちに飛びまはつてるよ、それに

又お前まで出させる程そんな馬鹿ぢやないよ。
パンは自分の揮つた智慧を賞めて呉れるだらうと思つて、エビメ
シアスの方を振向いた。しかるに沈鬱なエビはたゞ、「今頃賢くなつ
てももう遅い」と呟いた。

「あー」再び愛らしい小さい聲が言つた、「貴女は私を出した方が
宜いんですよ、私は尾に針のあるあんな物等とは違つて居ます
よ、一寸私の姿を御覧なされば、彼等が私の兄弟でも姉妹でも
無い事が忽ち解ります、ねー、ねー、愛らしいバンドラさん、
私は貴女が必と出して下さるに違無いと思ひます」

その聲や快い魔術のやうで、この小さい聲の乞ふ事は何事も拒む
ことは出来ない程であつた。バンドラの心は、函から發する言葉を
聞く毎に、漸々漸々と浮かされて來た。寂然として隅に居たエビメ

シアスも半身體を振向けて、氣分が大變快くなつたやうであつた。

「わが親愛なるエビさんよ、バンドラが叫んだ、「貴君はこの小さ
い聲をお聞きですか」

「無論聞きました、前のやうな快活な調子ではなくエビは答へた、
「それでどうしたといふのです」

「また蓋を開けちやごうでせう」バンドラは問うた。「貴女の勝手
次第です、エビメシアスは言つた、「貴女は既に非常な損害を興
へました、この上少し位したつて、どうせ同じことです、こん
な世界に飛びまはつてる群の中へ、もう一匹「苦勞」が殖えた
つて大した差はありません」

「も少し優しく言つて下すつたつて宜いちやありませんか、パン
ドラは目を拭ひながら呟いた。

「あー頑固な男子だネー」、函の中の小さい聲は、賢さうな笑ふやうな調子で叫んだ。「彼人だつて私に逢ひたがつてゐることは解つてます、サア愛らしいバンドラさん、蓋をお開けよ、私に新鮮な空気を與へて下さい、すると意想外の、厭でない物が現はれますから」。

「エピさん」、バンドラは叫んだ、「どうなるか知らないけど、私は蓋を開けることに決心しましたよ、」

「蓋は大變重さうだから」エピメシアスは部屋の中を走りまはりながら叫んだ。「私も手傳ひませう」。

かくて兩人一致して蓋を挙げました。

飛び出したのは、輝いた、笑みを含んだ小さい人物で部屋を翔つて、至る所に光を放つのである。貴君等は日光が鏡から反射して暗

い隅に影の躍るのを見たことはありませんか。うす暗い小舎の中にこの妖精じみた奇女が快活に飛翔する所は、丁度そんな工合でした。その女はエピメシアスの方へ飛んで行つて、「苦勞」に刺された傷口へ指をヒョイと觸れました。すると忽ち痛みが去つてしまつた。又バンドラの額に接吻すると忽ち悩みが癒えてしまつた。

かういふ善い務をしてから、輝いた奇女は、子供等の頭の上を、面白さうに翔りまはつて、嬉しげに兩人を眺めて居た。兩人はその爲に、函を開けて良かつた若し開けなかつたら、その愉快なお客さんが、あの厭な邪鬼等と一處に禁錮されねばならなかつたらう。と思ふやうになつた。

「マア、貴女はごなたですか、美しい方」とバンドラは問うた。

「私の名は「希望」ですよ、光る女が答へた、「そして私はこんな

愉快な小さな身體からだですから、醜い「苦勞」の群が、いつか人間の中へ出た時の補ひになる爲に、函の中へ閉ぢ込められて居たのです、怖くもなんともありませんよ、私達は彼等がどうしようも構はず随分宜い鹽梅に行つていきませう。」

「貴女あなたの羽はねは虹のやうな色ですネ、パンドラは叫んだ、「ほんとに美しいこと。」

「さうです、虹のやうですよ、希望」が言ひました、「私の性質わたしがさうなんですから。私は涙と笑と半分づゝで出来て居るんです。而して貴女あなたはいつまでもく私達と一處に居て下さいますか、エピメシアスが問うた。

「お好次第、いつまでも、希望」は愉快な笑みを含んで言つた、「貴君等がこの世にいらつしやる限り、永くく付いて居ますよ、

決して貴君等を見棄ないといふことを堅くお約束します、ともすれば私が全く消え去つたと思ひなされる場合も折々はあります。うが、一寸お氣が付けば、何度でもくこの小舎の天井に、私の羽の光が見えて來ます。さうです、愛らしいお子さんよ、私はこれから貴君等あなた等に上げるべき善い美しい物を知つて居ますよ。」

「お一話して下さい、彼等が叫んだ、「一體どんなものですか話して下さい。」

「聞いちやいけませんよ、希望」は薔薇のやうな口に指を當て、答へました、「たとひ貴君等がこの地上にいらつしやる間に、それが出来て來なくつても失望してはいけませんよ、私の約束をよく信じなさい、眞實ですから。」

「信じますとも」どエピメシアスもパンドラも一齊に叫んだ。

かくて兩人は「希望」に信頼した、唯に兩人のみならず、爾來この世に生活した者は、悉く彼に信頼したのである。而して實をいへば私は喜びの情を禁じ得ない。(バンドラのした事は非常に悪かつたのは確だけれども)併し愚なバンドラが函を覗いた事に對して、私は實に喜びの情を禁じ得ないです、疑なくく「苦勞」は今もなほ世界を飛びまはつて居て、その數は減るどころか、寧ろ増して行くが、それは實に醜惡な邪鬼の夥伴で、尾には最毒々しい針を持て居ます。私は既にその針の痛みも感じました。まだこれから年が寄るに従つて、益感することせう。しかし希望の愛らしい輝いた姿があります。

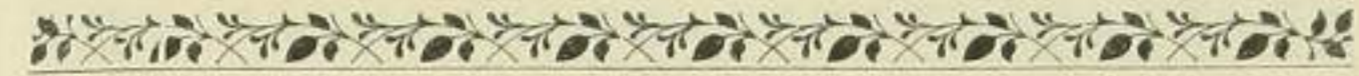
「希望」が居なかつたら、吾人はこの世で何事をする事が出来ま
すか、「希望」こそこの下界を神聖にするものです。「希望」はこの世

を常に新しくする。最も完全な最も光輝ある状態にもするのである。
「希望」はこの世をば、後來の無限の幸福の兆候にするものである。
(ホーソン)



戀

久方の天の男神
荒金の地の女神
相交りし樂みはも嬉しみはも
時も無く



處も無く
 物の別も無く
 限てふもの、未だ起らざる前
 闇の色に包まれ
 闇の氣を吸ひ
 闇の香に酔へる二神
 たゞ一つの如相合ひて
 相交りし樂みはも嬉しみはも
 あ、人の祖神
 人の祖神は物の別を好めり
 人の祖神は事の限あるを喜べり
 人の祖神は世に光あるを欲りせり



天と地と別たれぬ
 上と下と別たれぬ
 前と後と別たれぬ
 海と陸と成りぬ
 日と月と星と成りぬ
 春と夏と秋と冬と起りぬ
 人の祖神の稜威は盛なりき
 人の子は澤に蔓延りぬ
 天の安の河原に世の開けし祝宴の酣なる折
 天地の神は限無き憂さと限無き恨とに猛りぬ
 あ、世開けて千萬年
 天地の恨は解くる期あらじ



春草踏みてはしき少女の歌謠ふ
 その地の底には今もなほ恨の炎燃ゆるなり
 秋の月澄みて蟲の魂をも透すなる
 その天の上には今もなほ憂の暗の残るなり
 地は天に通はむと山の嶺より炎を吐けど
 天の下の下に棚引く雲を焼けるのみ
 天は地に通はむと八重の雲より雨を降らせど
 地の上の上に固まれる土を潤すのみ
 地の恨は時に大地震となりぬ
 天の憤は時に大雷となりぬ
 されど人の神の稜威はそを續かしめず
 人の子の唯僅を亡すのみにて止みぬ



花匂ひ鳥歌ひ人の國は愈益榮え行く
 こゝに天地の恨は人の子の心にぞ徹れる
 天地の恨は人の世の戀に悉く涙あらしめぬ
 益荒武雄の鐵の腕も戀の涙に潤へり
 貴人の錦の袖も戀の涙にそぼてり
 人の子は雷よりも地震よりもこの戀の涙に艱みぬ
 人の子は地震よりも雷よりもこの涙ある戀の爲に殺されぬ
 あゝ戀の力の限無く進まむ時
 あゝ人の世は亡びむ
 あゝ人の子は絶えむ



雪の賦

四季の雪といふ唄に、雪月花のうちにも雪こそまさされ、春の梅櫻、夏の卯の花、秋の月の影、皆雪の色なりといへり。

あはれこの雪見むに何處もおかしからぬは無きに、月の名所は須磨明石、雪は越路かな、とはやされ、越路の雪か、みよしの、花と唄はる、を見れば、かの國こそこのもの、名所なるらめ。

雪の名所やがてかほよ人の名所なりとか、降る雪と白きおもてと縁あるは理かな。

悲しき思ひ白妙の雪の姿は身にしみくごと、忘れかぬるは、いかなる人を思ふにかあらむ。わが身にしむは雪の冷たきに似たれど、かの人の白き肌には温かき情をつゝみてほし。

白き肌といへば芙蓉の峰よ、ちらと見せたは冬立つ空に、降りくる雪の肌自慢、實にや日の本の名山も雪の肌故なりけり。

戸無瀬に落つる大井川、くだす筏にふる雪は、散りかふ花と見まがひて、山しづかなる峰の雪、は暇ありし大宮人のながめあきけむ。雪の苦屋に友呼ぶ千鳥、ちりやちりく散りかゝる、吹雪の花の面白さは、國しのびする配所の人を慰めけむ。

あれてやさしき伏見の里の、雪に雪降る吳竹の、折れさうなる様は、弱き操にも似たるを、いつそさらりと浮いて暮して、思ひぞ積る丸山の、けさも來て見る雪見酒、の味は知る人ぞ知る。

人の雪見にほだされて我もほろ酔のこ、ちよく人が傘をさすならば、我もさしかけ雪見傘と勇み出でたるは、あごけなけれど、或は我物と思へば輕き笠の雪、或は積る夜の通ひ車や雪車の人知れぬ戀

の路こそ罪深けれ。

戀にやつる、は人の性とや、知恵もきりやうも皆淡雪と、消ゆるばかりの物思ひ、する甲斐もなく、様は左程に思はざるらむ、風吹いて道も絶えなむ雪の夜半、來ぬがましぞとあきらめたるぞ切なき。

其の切なさも逢ふ夜のうれしさに忘れて、かけてもつれてほどけて結ぶ、無理いはぬ夜の雪の音、きく折は、雪より深き樂みならめど、樂みもとより限りあり、睦言もなほいひ足らぬを、思ひは積る雪の朝、簾か、ぐる別れ、やいかに、どうでも今日は行かんすかど、いひつ、立つて連子窓、障子細目に引明けて、それ見やしやんせ此雪に、と怨じたる朝顔やいかに。
しかりとはいへど、しかりとはいへど、泣くも笑ふも露のまなり。

廻る月日もふるやふるく、雪も霜も霞も、消えてたまらぬ諸行無常のことわりを思へ。恨みられしも恨みしも、ともに消え行く春の雪のはかなさを思へ。

あはれ恨めしや我縁、うす雪の契りか、消えにし人のかたみとて、涙ばかりや残るらむ、と嘆ちたるは、誰がはかなき戀の果にやあるらむ。



銀竹

頼杖や見入る冬草冬の蟲
初雪や浮木の上の都鳥

寒月や刃に似たる岩の角
冬の海濛々として暮れかゝる
櫂や回顧つたる髯男
ちよと物を伺ひまする頭巾哉
淺漬やちやぶ臺小さき女夫住



悟

鴻儒一齋言ひけらく、
圓缺晴翳の間に在らず。
紅紫香臭の外に存す。

「月を見るは清氣を觀るなり、
花を見るは生意を觀るなり、
偉なる哉この言や。」

清氣の美をば悟る人、
生意の美をば悟る人、
圓缺紅紫知り悉すとも、
物の姿は知り悉すとも、
眞實を知るは悟るなり、
眞實は人に教ふべからず。
悟は人に強ふべからず。
夫れ凡百の學問は、
言といふも文といふも、
言や文章の妙なるは、
たゞ近きのみ。近きのみ。
眞實其のもの寫し出す、

月の眞實を悟れるなり。
花の眞實を悟れるなり。
花月知るとは言ひ難し。
眞實知るとは言ひ難し。
姿は人に教ふべし。
悟は人に傳ふべからず。
皆これ姿の教なり。
姿示すに適ふのみ。
たゞたゞ眞實に近きのみ。
言葉は在らず文章は在らず。



聲の外に響なき聲あり、
 文字の外に形なき文字あり、
 悟りの能を缺ける者、
 生涯終に得る所なし。
 文字の末に泥みつゝ、
 悲しきかなや、學びの奴。
 異才金峨教へけらく、
 卷物にあるに非ず。」と。
 英雄宗矩教へけらく、
 以て自ら得べきのみ。」と。
 大聖黙して華を拈し、
 達磨心を心に傳へ、

その聲能く眞實を語る。
 その文字能く眞實を示す。
 萬卷の書を讀破すとも、
 姿調べに身をやつす、
 「刀槍は修練にこそあれ、
 凡そ術は訓練思慮、
 迦葉黙して微笑しき。
 敢て文字を立てざりき。



あ、悟なる哉。悟なる哉。
 されば文字輕んずべきか。
 されば姿輕んずべきか。
 與衆豈に直に超人を學ぶべけむや。
 「之を思ひ、之を思ひ、
 之を思うて得ずんば、
 管子の言の高い哉。
 やがて眞實を悟るべき。
 姿を窮め窮むるは、
 悟らむ爲に姿窮めよ。
 讀まむが爲に文字も調べよ。
 説く者も、聽く者も、
 記す者も、讀む者も、

されば書籍輕んずべきか。
 否々然らず。然らざるなり。
 又重ねて之を思ひ、
 鬼神將に之を告げむとす。
 姿を窮め窮めてぞ、
 眞實を悟る手段なり。
 窮めむ爲に書をも讀め。
 されど是皆手段なり。

ゆめな忘れそ、手段たること、手段は總てにあらぬことを。



朽葉

伊左ほどの粹も盡さで紙衣かな
醉醒めて茶の花寒き月夜かな
新學士白足袋はいて來りけり
出て見れば火事遠かりし寒かな
方丈や觀音の軸水仙の花
鏡臺に手の届かざる巨燵かな
告別の握手をた、く霞かな

眠る山呼んで見たれば木精かな



西眼に映じたる俳諧

いかにかけ離れた外國の文でも、適當な方法で學べば、意味を解し得るやうには直になれるものである。しかし其意味といふのは其の文の文字に表はれて居るだけの意味であつて、その裏面にある、即ち文字外の意味といふやうなものは、なか／＼容易には解されな。殊に趣味感情を立脚地として居る、文學に至つては、表面の意味だけ解せられても何にもならぬ、なか／＼所謂腑に落ちぬものである、これは理の當然である。

久しぶりで歸省して親の顔を見たといふ折に、日本人ならば、子が御機嫌伺ひの挨拶でもする、親もこれに答へる。而して互の心の中に非常に嬉しく思つて居る。これが西洋ならばどうかと云ふに、戸を開けて互に顔を見合はすや否や、大聲で「オーわが父よ」とか、「わが愛らしきものよ」とか叫んで、兩方からかちり付いて頬なり口なりに接吻する。久しぶりの親子の對面の嬉しさ、これは東西の別は無いが、其嬉しさの性質が餘程違つて居る、即ち感情の相違があるのである。

日本人は、床の間に淡黒い古名家の書簡でも懸けて、花瓶に時の花を池の坊かなんかで生けて、老子出關の置物位を唯一つ据ゑて置く。而して主人は大得意で居る。客も凝つたものだと大に感服をする。若し始めて日本へ來た西洋人がこんな座敷へ入はいつたら、その陰

氣なのに辟易して日本は美的思想に乏しい國だなど、言ひふらすであらう。西洋人は油繪や水彩畫や寫眞や石膏像や銅像や鏡や何やかや部屋中處狭しと綺羅々々しく飾り立て、居る。主人はこれ見よがしに誇つて居る。客もいかにも賑やかで美しいと思ふ。若し純日本的生活しか知らない者が洋行してこんな部屋へ飛び込んだら、「なんだい、道具屋の店開きぢやあるめいし」と罵りたくなるであらう。即ち趣味の相違があるのである。

まづこんな工合に、趣味や感情は國により人種によつて根本的に違つて居るものだから、文學、就中詩の如きに至つては、日本と西洋とのやうな、かけ離れた處のものは、互に味ふことが容易な事でない。嚴密にいへば到底不可能のことかも知れない。

我俳諧の如きものは、詩の中でもまた極めて特性のあるもので、

文字に表はれたもの、みでは殆んど意味をなさないで、其要素は文字外にあるものであるから、日本の文學者にも俳味に對しては無感覺な人がある。況して西洋人に於てはなほ更である。

それなのに西洋人で俳諧を味はつた人は随分ある。そこでどんな程度まで西洋人が解し得るか、いかに感ずるか、ごういふ句を賞めるか、ごういふ様なことを調べるのも興味のあることであるから、左に自分が見た書物で、俳諧に關した條を拔萃譯述して、(原文の體を損せぬ爲に故更直譯風にした所が多い) 年の順にならば、自分の評註をも加へて東西趣味接觸の一方面をお目にかける事にした。

一、*Seas and Lands*: (エドウィン、アーノルド著、一千八百九十

四年上梓)のうち、

彼等日本人は單に想像を呼び起す爲に、繪筆を一抺する熟練な手

を一轉する、すると十里も二十里もむかうの蒼く霞んだ遠景でも、眞に飛んで居る鳥の羽でも、忽ち描き出される。この特質はまた詩の方面にも表はれて居る。日本のミューズが子等の敏活な想像をどの位信任するかを確めるには、その詩を書いた一片紙を手に入ればすぐ解るのである。或る日本の女子が、朝井戸へ行つたら、夜の間まに朝顔が赤や紫の花や緑の蔓を桶に捲き着けて居つた。いかにも美しいので除るに忍びないから、女子はこの愛らしい盜賊に汲桶を委して隣家へ水を貰ひに行つた、ごういふことがある。

この事を歌つた有名な唄があるが、それは行數が三、語數が五しかない。即ち、

アサガオ

ツルベ トラレテ

モライ ミヅ

といふのである。これを直譯すれば、

Convolutus

Bucket taking,

I borrow water.

となるこの寫實的簡略なものが、日本人の耳、心にはよく快味を傳へる。併しこれを歐人にも解るやうにするには、少くも次に示す位に引延ばさねばならない。

The Morning glory

Her leaves and bells have bound

My bucket-handle round.

I could not break the hands

Of those soft hands.

The bucket and the well to her I left:

Lend me some water, for I come bereft.

丁度この様にすべて巧妙な、日本の詩や美術は、西人に解るやうにするには餘程敷衍しなければならぬのである。

(これは主として日本畫の趣味を紹介して居る所で、朝顔の句は客として出してあるのみであるが、日本畫の精神が簡潔な所にあることを説いて、それを俳句で以て説明したのは妥當である。

千代の朝顔の句は理窟臭いから妙でないといふ人もあるが、それは兎に角、譯しても妙味の損せられない句であつて、西洋人にも味はれ易いのである。この譯詩が、千代が隣人に水を乞ふ時の言葉になつて居るのは、面白い工夫である。

この句が實際あつた事を詠じたのだ、といふのは少し正直過ぎる。「アサガオニ」のニをぬかしたのは可笑しい。

二 Japanese Dichtungen (ノローレンツ著 一千八百九十四年上
梓) のうゑ

Augentäuschung. (Arakita Moriake)

Wie? schwebt die Blüte, die eben fiel,
Schon wieder zum Zweig am Baum zurück?
Das wäre fürwahr ein seltsam Ding!
Ich näherte mich und schärfte den Blick—
Da fand ich—es war nur ein Schmetterling.

(これは守武の「落花枝にかへると見れば蝴蝶かな」の譯である。)

Frau und Nebenfrau. (Khorai)

Bei der lustigen Blumenschau.
Ist die Weinflasche unsere rechte Frau,
Und auf die guten Gattinnen Schanen
Wir nur herab wie auf Nebenfrauen.

(これは其角の「酒を妻妻を妾の花見かな」の譯であつて Khorai の
あるのは誤である。)

Falsche Abhilfe (Hokushi)

Niedertträchtiges Volk von Fröschen, ich habe das Reisfeld.
Euretwegen verkauft, do ihr zu viel mir gelärmt.
Doch ihr verschenecht mir noch immer mit eurem Quaken den Schlummer—
Seit ihr mir nicht mehr gehört, ärgert mich doppelt das Schrein.

(之は北枝の「田を賣ていと寝られぬ蛙かな」の譯である。これは
餘程骨折て譯してあつて原意の損せられて居ないのは感服である。
總じてこの書の譯し方は、餘り敷衍し過ぎて原作の面白味が殺が
れて居るといふ評が一時やかましくあつたが。前述アーノルド氏も
言つて居る通り致方がないと見える。)

三 Gleanings in Buddha-fields. (ケルン著 一千八百九十四年上梓)

のうち

月夜よし念佛トナイテ腹鼓

On fine moonlight-nights, repeating the Nembutsu,

I play the belly-drum.

(小泉八雲氏を西人と見てこの論中に入れるのは不妥當かも知れないが、便宜上から致したのである。)

この條は氏が大阪の一心寺の墓地を巡られた時の記事の中に紹介された句で、井上傳之助といふ人の碑に刻してある句である。

句の羅馬綴に、Tonate を Tonate と誤つてある。)

四、 Handbook of Colloquial Japanese (チャムバレン著、一千八百九

十八年上梓)のうち

牡丹燈籠對譯のうち

煙草には摺火のうまし梅のなか

To the smoker

How sweet for striking a match

Is the entourage of the plum-blossoms!

梅ほめて紛らはしけり門違ひ

In belauding the plum-blossoms

I got confused,

And delauded a lonely girl instead.

(この終りの譯は誤つてるやうである)

日本詩論のうち

詩形が美しく、その詩の文章は往々の動詞も無いことがある。事實上、確言法より寧ろ情呼法である。これ等の短詩は歐人をして日本畫工が放逸に畫筆を數掃したのみで、月前に翔ける鶴や風に戦

ぐ竹を現した小品書を想ひ出さしめる。

前世紀に勢力を張つて居た女詩人チヨが作つたホツクといふ短詩をこゝに示さう。

朝顔に釣瓶取られて貰ひ水

直譯 Having had my well-bucket taken away by the convolvuli,—gift-water!

この意味は次の如くである。

チヨが或朝水を汲む爲に井戸へ行つたれば、井戸繩に朝顔の蔓が巻き付いて居たことを發見した。女詩人であり趣味ある婦人であるから、チヨはこれを亂すには忍びなかつた。それで朝顔に自分の井戸を委して隣人に水を乞うた、といふことである。

これは實に可愛らしい小さい飾文字ビキチヂヂであつて、僅か五つの語で顯はされて居る。しかしかゝる事柄が實際あつたか否かといふことは

言ひ得ない。なせなれば我國の古代詩人が、實在しないクローヤアメリア等を造り出して居るやうに、日本詩人も架空の美的事蹟を想成する才を持つて居るからである。

(Seas and Lands に實際あつた事と言つてあるよりは、この方が氣が利いて居る。

クローは Daphnis and Chloë の中にある女羊飼の名、アメリアはフィールング作 Amelia の主人公で、ともに假作の人名である。)

茲にまた十七世紀の末期の詩人で、ホツク作者中最著名なバシヨ一の作つたホツクがある。その題は「ゲツゼンノホト、ギス」即ち The Cuckoo in Front of the Moon といふのであつて、次に示すのがそれである。

一聲は月が鳴いたか郭公

直譯 As for the single note, did the moon sing? —cuckoo!

この意味はかうである。郭公が鳴いたので驚いて其聲の來た方を見上げると、郭公は在らずして唯月の輝いて居るのみである。月が果して歌つたのであらうか、否決してさういふ筈はない、やはり郭公に違ひないといふのである。

日本詩人は戯言、地口、奇想を好む。前述のバシヨールが或田舎道を通つて居た、ところが彼の従者で、他日有名な詩人になつたキカクが赤蜻蛉を見付けてかういふ詩を詠んだ。

赤蜻蛉羽根を取つたら唐辛子

Pluck off the wings of a red dragon-fly, and you have a cayenne pepper-pod.

しかるにバシヨールはそれは、甚だ残酷な思想であると言つて、その詩をかういふ風になほした。

唐辛子羽根を附けたら赤蜻蛉

Add wings to a cayenne pepper-pod, and you have a red dragon-fly.

五、*In Ghostly Japan* (ヘルン著、一千八百九十九年上梓)の

うち、

こゝに日本人の理解力に對しては十分感情的な一小詩がある。

蝶々に去年死したる妻戀し

Two butterflies.....Last year my dear wife died!

日本では、蝶は幸福なる結婚に關して一の符號になつて居て、オチヨール、メチヨールといつて、紙で造つた大きな二ひきの蝶を、結婚の際の贈物にする、といふ古い習慣がある、といふことを知つて居なければ、この詩は實につまらぬものに見える。

(この句を解するには、必ずしも雄蝶雌蝶を持出す必要は無い。むしろそんなことは考へないで、單に蝶其もの、睦じさうに飛んで居

るのを見て、亡妻を戀ふ、とのみ解した方が自然である。
また近頃或大學生の作で、好評を博した句がある。
ふる里に父母あり蟲の聲々

In my native place the old folks (or, my parents) are—Clamor of insect-voices!

(*紫袍郎の句)

又こゝに更に感情の深い句がある。

身にしみる風や障子に指のあと

Oh, body-piercing wind!—that work of little fingers in the shoji!

一層直譯にすれば、

Body-through-pierce wind—ah!—shoji—in the traces of fingers!

これ等は、日本詩の特質なる「言つたきり」であつて、言外に言があるのである。十七シラブルまたは二十一シラブルの日本詩の意

味を現はすには、その倍の英字を以てしてもなほ足りない。

(こゝに「言つたきり」とあるのは、この篇の前に、日本詩は何の工夫をも加へず思ふ所を「イッタキリ」にして、後の回想に資するものである、といふ事があるのを受けて來たのである。

西人には倍の字數にしても足りない、といふのは、アーノルド氏の言と同じである。)

これ等の詩は、屏風や扇や盃に描いてある畫のやうに、自然より受けた感銘を、再び呼び起したり、旅行又は巡拜中の幸福な出來事を想起させたり、美しい日の記憶を呼出したりして、快感を與へるのである。この明な事實が十分解れば、世界的の教育を受けて居るにも拘はらず、現在の日本人が、古風な詩形を熱心に愛することが理のある事だ、といふことが知れる。

古寺や鐘物いはず櫻散る

Old temple: bell voiceless; cherry-flowers fall.

(*洒竹の句)

山寺の紙帳明け行く瀧の音

In the mountain-temple the paper mosquito-curtain is lighted by the dawn:
sound of water-fall.

(*悠々の句)

雪の村鶏啼いて曉白し

Snow-village:—cocks crowing;—white dawn.

(*繞石の句)

この小篇を終るに臨んで、この詩の中の、別な種類のものを引用しよう。それはやはり繪畫的でもあるが、まづは座輿の戯句である。

四角と三角と圓とを十七シラブルに詠み込めと言はれて、チヨが直に一句を詠じた、といふ言傳へがある。

蚊帳の手を一つ外して月見かな

Detaching one corner of the mosquito-net, lo! I behold the moon!

(原書には、こゝに蚊帳を上から見た圖、一手外した形まで入れて説明してある。)

もう一つの戯句は十七シラブルで、困難の極を寫したもので、これは多分書生の無錢旅行とでもいふ様らしい、而してこの句は餘り考へて作つたものでもないらしい。

盗んだる案山子の笠に雨急なり

Heavily pours the rain on the hat that I stole from the scarecrow!

六、 Japanese Literature (アストン著、一千八百九十九年上梓)

のうち、

「ハイカイ」の條

(ハイカイといふ稱を用ひたのは、この書が始めであらう。)

三十一シラブルのタンカで、もう簡略省略は極に達した、といふ事は、自然に想像されることである。

しかしまだ先きへ一步、この方向へ進む餘地が残つて居たのである。十六世紀にハイカイといふ名で知られた一種の詩が現はれた。それは實に十七シラブルのみより成立つて居る。ハイカイはタンカから終の十四シラブルを減じたもので、五七五シラブルの三つのフレーズから成つて居る。即ち次に示すやうなものである。

フルイケヤ!

カワヅ トビ コム

ミヅ ノ オト

これをタンカと比するに、詩形の長短の相違と共に、又昔の詩風よりも用語、詩材、の撰擇が自由である所に相違がある。

ハイカイでは、漢語俗語を用ふる事も許し、又元來構へこんで居るタンカの方では、觸れることを厭ふやうな事柄をも、屢詠して居る。

これを完成した熱心な先達^{フロフェンザ}は、ヤマザキ、ソーカン(一四四五―一五三四)といふ僧侶であつた。彼の詩には滑稽なものが多い。例せば、

Even in the rain, come forth,

O midnight moon!

But first put on your hat.

暈は日本語でカサといふ、この語はまた廣い帽ハット或は傘アンブレラといふ意味を持つて居る。

(これは「笠を着ば雨にも出でよ夜半の月」の譯である。)

又古代ハイカイ作者に、アラキダ、モリタケ、(一四七二—一五四九)といふ人があつた。次に示すのは彼の作である。

Thought I, the fallen flowers

Are returning to their branch;

But lo! they were butterflies.

(これは、「落花枝にかへると見れば胡蝶かな」の譯である。)

降つてエド時代になつて、この方面で第一に名を記すべきは、マツナガ、テイトク (一五六二—一六四五) である。彼のハイカイで有名なのは次のものである。

For all men

'Tis the seed of siesta—

The autumn moon.

換言すれば、秋の月は人がそれを観て夜の半も起きて居る程美しい、だから翌日は午睡をして、睡眠の缺乏を補はなければならぬ、といふのである。

(日本文學史に貞徳の句が三つ出て居て、その中で譯しい、のが、この「皆人の晝寢の種や秋の月」であつたから、こゝに出したのであらうが、いかにも殺風景な句だ、當時の風調で致方がないが、同じ理窟臭いのも、「雪月花一度に見する卯木かな」かなんかを紹介した方がよかつたであらう。)

マツラ、バシヨ (一六四三—一六九四) 及その門下が出て來な

かつたら、ハイカイといふものは殆ど論するに足りないもので終つたであらう。

(マツヲを誤つて Matsuna としたのは、目立つ誤である)

彼はタンカの強敵となるまでに、ハイカイの貫目を重くした。この頃タンカは一般の嗜好とは非常に懸け離れて居た。その保護者であり作者であり批評家であつたフジワラ家は、極めて頑固に、昔から傳はつて来た法を守つて居た。それで國民は詩才を働かすことの出来る新しい自由な野を得たのを大變喜んだ。

一寸したタンカを書くのにも、その術の練習が要る。しかるに多數の人はそんな時を持つて居ない。然るにハイカイに於ては、詩才あつて一寸練習すれば誰にでも出来るのである。

サイカクは無學な人であつたが、スミヨシ社へ行つて一日のうち

に二萬の句スタシヂを作つて、その爲に、The twenty-thousands old man の稱を得た、といふことである。

(西鶴一日住吉の社頭で二萬三千句を吟じて、それより二萬翁と稱したといふ、この稱は得たのではなくて自稱らしい。)

これは明に空談に相違ないが、しかしハイカイを書く事が容易であるといふことを示して居る。

バシヨはイセのツのダイミヨに代々仕へて居たサムライ族の人であつた。彼はエドで水道工事を務めて、よくその職を成して信用を得て居たが、しかし或理由でその職を棄て、僧籍に身を投じた。

彼はエドのフカヰワに小舎を自から建て、窓の傍に banana 樹を植ゑた。それが成長して茂るやうになつたから、彼はバシヨ (banana) といふ名を號にして、その名に依て後世まで傳つたのである。

彼はゼンといふ佛派及道教クワイムの勤勉な弟子であつて、また書をも能くした。彼は殆んど絶えず日本の僻遠な地方へ長い旅をした。その旅をした跡には所々に彼の詩を刻した石碑が今日までも残つて居る。かゝる旅行をして居る間に、急に病に罹つて五十一歳でオーサカで死んだのである。

ショーテイ、キンスイはバシヨ一の漫遊中に起つた次の事を話して居る。

(ショーテイ、キンスイは松亭金水である。)

この話は、最低い社會にもハイカイの嗜好があつた、といふ事を顯して居る。

或時バシヨ一が旅の途中、ハイカイを作りながら或片田舎を通つて居た。それは満月の夜で、空には一面に光が溢れて晝よりも明であつた。月がかくまで輝いて居るからバシヨ一は宿を求めようと思はず、

なほ旅行を續けて居た。

そのうちに或村で、人が寄つてサケや食物を持ち出して、戸外で月光を賞して居る所へ來かゝつた。彼等はそこでハイカイを作る事に耽つて居たのである。

バシヨ一はこの美しい文藝が、こんな片田舎でも行はれて居るのを見て、非常に喜んでその様を眺めて居た。するとかの仲間のうちの愚物が一人彼を見付けて言つた。「そこに行脚らしい坊主が居る、あれは多分乞食だらうが、構はないから我々の仲間へ入れてやらうぢやないか」

一同はこれは大滑稽だらうと考へた。バシヨ一は拒絶せずして、その連中の末席に連つた。愚物はその時言つた。「こゝに居る連中は、満月に就いて何か作る事になつて居るから、お前も何か一つ作らに

やならんぞ、バシヨは辭した。彼は田舎の賤しい者だから、名譽ある會合の興を助ける事が出来る筈が無い、といつて、ごうか許して呉れるやうにと歎願した。

「否々」と彼等は言つた。「我々はお前を許す事は出来ぬ。善くても悪くても、一句だけは是非作らにあならん、彼等は遂に彼を説き伏せてしまつた。

バシヨは微笑して手を拱いて、而してこの一座の執事クラックの方へ向いて言つた。「よろしい、それぢや一つやりませう、

‘Twas the new moon—

‘New moon だつて、この坊主はなんて馬鹿だらう」と一人が叫んだ。「満月の詩を作るんだぞ。」やらせて見よう」と他の者が叫んだ。「その方が一層滑稽だらうせ。」そこで皆圓く圍んで、彼を嘲り且つ笑つた。

バシヨは何の注意をも拂はないで續けた、

‘Twas the new moon !

Since then I waited—

And lo ! to-night !

[I have my reward]

一座の者は悉く驚いた。彼等は坐に直つて言つた。「貴君あなたはこんな立派な詩を書きなされる、とても並々の僧侶ではいらつしやらぬでせう、ごうか御名を承りたうございます、バシヨは微笑しながら答へた。「私の名はバシヨです、私はハイカイを修行する爲に行脚をして居るのです。田舎漢は一生懸命にこの高士に對しての無禮を謝し、そして彼等はハイカイ好きの友人の家へ使を遣つて、彼の名譽の爲に、野宴アル、フレスコ、フィーストを更に張つた、といふ事である。

(こゝに所謂芭蕉の句は「三日月の頃より待ちし今宵かな」である

が、これは實説ではない、寛平歌合に、初雁の題で友則が、

春霞かすみていにし雁がねの

今ぞなくなる秋霧の上に

と詠じたが、この五文字をよんだ時、右方の人が悉く笑つた、といふ話や、花園大臣の侍が、はたおりといふ題で、

青柳のみごりの絲をくりかへし

夏へて秋ぞはたおりはなく

とよんだ時、初五文字を聞いて女房たちが笑つた、といふ話、から着想した小説であらう。

ハイカイはバシヨのやうな大家の手を以てしても、なほ文學として或價值を持つには範圍が狭きに失して居る、といふ事が論せられた。カンガクシヤたるダザイシユンタイがこれをツタナキモノ(タナヒ)

pid sort of thing) と呼んだ、而してシヨライ、キンスイも、この傑士の目には疑なくかくの如く映じたといふ事を承認して居る。

(春臺は獨語の中で俳諧を罵倒して居る。)

しかしその流行は決して否認する事は出来ない。バシヨの名は實に牧牛者カウ、ヘードにでも知られて居る。彼は十人の弟子を持つて居たが、其の人等はまた次々に弟子を持つて居て、それ等の名を列擧したら限りもない事である。俳諧好きの人々の月モンスリー、コンフェレンス次會は、首府でも地方でも規則正しく開かれて居つた。

文學の首要な位置にハイカイを進めようとするのは、譯のわからぬことであると思ふ。どんな形式を取つてもバシヨがした以上の事はすることは出来ない。

(これは全く皮想の論である、前記の Ghostly Japan の説とよい對照

をなして居る。

散文とこれ等の小滴と異なる所は單に形にあるのではない、その中には往々真正の感情、優美な想像の、小さいけれど純粹な眞珠を含んだ、巧な句が存して居る。

A cloud of flowers!

Is the bell Uyeno

Or Asakusa?

(芭蕉の「花の雲鐘は上野か淺草か」の譯である)

英國の讀者には、何の曲もなくて、寧無意味のやうにも見えるだらう。しかしエドの住民は、こゝに現はれて居る文字の外に、許多の意味を感じるのである。彼がこれを聞けば、スミダ川の岸に連なつて、長い櫻の並木があつて、ウエノ、アサクサの有名な寺も近い、かのムコージマの楽しい群集の中に身をおく想を起すのである。彼

は次のやうな風にこのの句意を擴げるには、何の困難も感じないであらう。

The cherry-flowers in Mikōjima are blossoming in such profusion as to form a cloud which is sounding from the distance is that of the temple of Uyeno or of Asakusa I am unable to determine.

しかし我輩がこれ等に對しては、到底不可解 (brevis esse labarar, obs-curus fit) である。バシヨ一のハイカイの大部分は、朦朧たる暗指であつて、縁の遠い外國人には、とても理會力が及ばない。

次に比較的解り易いものを擧げた。しかし暗指といふ性質はこれにも必ず入つて居る。

An ancient pond!

With a sound from the water

Of the frog as it plunges in.

(古池や蛙飛び込む水の音の譯)

I come weary,

In search of an inn—

Ah! these wistaria flowers!

(くたびれて宿かる頃や藤の花の譯)

Ah! the waving lespedeza,

Which spills not a drop

Of the clear dew!

(白露をこぼさぬ萩のうねり哉の譯)

'Tis the first snow—

Just enough to bend

The gladiolus leaves!

(初雪や水仙の葉のたわむまで)の譯)

Of Mindera

The gate I would knock at—
The moon of to-day.

(三井寺の門たゝかばやけふの月の譯)

解釋 How beautiful the scenery about the temple of Mindera must look on a fine moonlight night like this!

I would that I were there to see it.

On a withered branch

A crow is sitting

This autumn eve.

(枯枝に鳥のこまりけり秋の暮の譯)

The cry of the cicada

Gives no sign

That presently it will die.

(やがて死ぬけしきは見えず蟬の聲の譯)

次に示すのは他の作者のである。

"Tis the cuckoo—

Listen well!

How much soever Gods ye be.

(宗因の「ほと、さすいかに鬼神もたしかに聞け」の譯)

'Tis the first snow,

Yet some one is in doors—

Who can it be?

(其角の「はつ雪や家に居さうな人は誰」の譯)

The club-shaker's

Rising and falling in the water

Until it becomes a mosquito.

(祇丞の「子子や蚊になるまでの浮き沈み」の譯)

子子が蚊になるまでは、尾を早く震はせて動きまはる、これを、

「棒振」^{クラブシェーカー}といふのはこの爲である。日本では、後に必ず悪人になる、いたづら小僧の符號にこれを用ひる。

O ye fallen leaves!

There are far more of you

Than ever I saw growing on the trees!

(也有の「木において見たより多き落葉かな」の譯)

Alas! the width of this mosquito-net

Which meets my eye when I wake

And when I lie down.

(千代の「起きて見つ寝て見つ蚊帳の廣さ哉」の譯であらうが、一向要領を得て居ない。

この次にチャムバレンの Hand book of Colloquial Japanese にある千代の朝顔の句解を引用してある。

これは前記の通りであるから略す
「ハイブン」の條

(西人にして俳文を説いたのは、これが始めであらう)
ハイブンは、散文の一種で、ハイカイの附屬物としてあらはれたものであり、ハイカイと同じ様に、コンサイエスチツス、サウレンチフチツス簡略、暗指をするのを目的にして居るものである。ハイブンの作者中最有名なのはヨコイ、ヤユ一(二七〇三—一七八三)といふ人で、オワリのナゴヤの高位の役人である。彼は次に示す名文の記者である。

An earthen vessel, whether it be square or round, strives to adapt to its own form the thing which it contains: a bag does not insist on preserving its own shape, but conforms itself to that which is put into it. Full it reaches above men's shoulders; empty, it is folded up and hidden in the bosom.

How the cloth bag which knows the freedom of fulness and emptiness must laugh

at the world contained within the jar!

O thou bag

Of moon and flowers

Whose form is ever changing!

換言すれば、

How much better it is to yield our hearts to the manifold influences of external nature, like the moon and flowers, which are always changing their aspect with the weather and the season, than, self-concentrated, to try to make everything conform to one's own narrow standard!

(これは鶉衣にある袋贅である、この原文を次にあげる。
器は入る物をして己が方圓に従へむとし、袋は入る、物に隨て己が方圓を必とせず、實なる時は餘り虚なる時はた、みて懷に隱る、虚實の自在をしる布の一袋、壺中の天地を笑ふべし。

月花の袋や形は定まらず。

「トーキョー時代」のうち。

タンカやハイカイの時代は、もう過ぎ去つたやうに見える。今日ではこの詩形は除け物にされて、用ひられないのである。

(これは事實を誤つた論である)

七、Shadowings (ヘルン著 一千九百年上梓) のうち。

「セミ」のうち。

聲に皆なきしまうてや蟬のから

日本戀唄

The voice having been all consumed by crying, there remains only the shell of the Sēmi !

(これは戀には關係の無い句である。作者は土芳)

あな悲し鳶に取らる、蟬の聲

嵐 雪

Ah ! how piteous the cry of the Sēmi seized by the kite !

初蟬やこれは暑いといふ日より

大 無

The day after the first day on which me exclaim, "Oh, how hot it is !" the first Sēmi begins to cry.

あの聲で露が命か油蟬

Speaking with that voice, has the dew taken life?—

Only the Aburazēmi !

蝸やすて、置いても暮る、日を

す て

O Higurashi !—even if you let it alone, day darkens fast enough !

(原書には、これより前の方にヒグラシの語釋が出て居るから、こはこの儘で西人に解るのである。一體、蟬と蝸とは、「蝸や蟬を洩れ来る秋の聲」といふやうに、全く別の趣のあるもので、蝸の方は

季も秋になつて居て淋しい感じを主にして居る。だからこのセミの條下にヒグラシの句を擧げるのは聊當を得ないと思ふ。

蝸や今日の懈怠を思ふ時

里 桂

Already, O Higurashi, your call announces the evening! Alas, for the passing day, with its duties left undone!

(きせといふ女の句に、「蟬なくや我怠りを思ふ時」といふのがある。暗合であらうが、かゝる自省の心の起るのは、寧ろ蝸の鳴く頃であるのが自然と思はれる。)

死に残れ一つばかりは秋の蟬

Now there survives

But a single one

Of the Sēmi of autumn!

松の木にしみこむ如し蟬の聲

Into the wood of the pine-tree

Seems to soak

The voice of the Sēmi.

(芭蕉の句に、「しづかさや岩にしみ入せみの聲」といふのがあるから、この句は一向詰まらないのである。芭蕉の句の方を紹介されなかつたのは遺憾である。)

我一人暑いやうなり蟬の聲

ブ ン ソ ー

Me seems that only I,—I alone among mortals,—Even suffered such heat!—

Oh, the noise of the Sēmi!

(作者名を Bunsō としてあるのは Bunsō 即ち文素の誤)
うしろから掴むやうなり蟬の聲

除 風

Oh, the noise of the Sēmi!—a pain of invisible seizure,—
Clutched in an enemy's grasp,—caught by the hair from behind!

(髪といふ字を加へて、原句の意を一層明に譯してあるのは、綿密である。)

山の神の耳の病か蟬の聲

テイコク

What ails the divinity's ear?—

How can the God of the Mountain

Suffer such noise to exist?—

Oh, the tumult of Sēmi!

(耳に病があるか、又は老人になると、耳が鳴つて、丁度蟬のなき聲のやうである。花月草紙にも、老人の事を言つた所に、「耳はかの時知らぬ蟬の聲に」といふ語がある。この句は、蟬の聲を、山の神の耳が鳴る響であらう、と興じたのであるから、この譯は當つて居

ない)

底の無い暑さや雲に蟬の聲

左 簾

Fathomless deepens the heat: the ceaseless shrilling of Sēmi.
Mounts, like a hissing of fire, up to the motionless clouds.

(原句は一向につまらないが、この譯では雲に不動といふ形容を添へ、また蟬の聲を、炎の唸聲に譬へ等してある爲に、譯の方が原句よりも明白でまた面白くなつて居る。)

水涸れて蟬を不斷の瀧の聲

ゲンウ

Water never a drop: the chorus of Sēmi, incessant,
Mocks the tumultuous hiss,—the rush and foaming of rapids.

陰ろひし雲また去て蟬の聲

几 董

Gone, the shadowing clouds!—

Again the shrilling of Sēmi

Rises and slowly swells,—
Ever increasing the heat!

抱いた木は葉も動かさず蟬の聲

可 風

Somewhere fast to the bark he clung; but I cannot see him:

He stirs not even a leap—Oh! the noise of that Sémi!

隣からこの木憎むや蟬の聲

ギューカク

All because of the Sémi that sit and shrill on its branches—

Oh! how this tree of mine is hated now by my neighbor!

この句は也有の句を思ひ出させる。

(何といふ句を指したのだらう、或は「柚が来てつもる梢や蟬の聲」

か)

又我輩はセミに屢訪はれる木を憐に思ふ詩人を發見する。即ち、

風は皆蟬に吸はれて一木かな

鳥 醉

Alas! poor solitary trees!—

Pitiful now your lot,—

Every breath of air having been sucked up by the Sémi!

往々セミの聲を動↑ヒンゲ、フオリス力として記されたものもある。即ち、

蟬の聲木々に動いて風も無し

ソーヨー

Every tree in the wood quivers with clamor of Sémi:

Motion only of noise—never a breath of wind!

(簡にして且つ要を得て居る譯である。)

竹に來て雪より重し蟬の聲

トーゲツ

More heavy than winter-snow the voices of perching Sémi:

See how the bamboos bend under the weight of their song!

諸聲に山や動かす木々の蟬

All shrilling together, the multitudinous Sémi.

Make, with their ceaseless clamor, even the mountain move.

楠木も動くやうなり蟬の聲

バイジャク

Even the camphor-tree seems to quake with the clamor of Sèmi!

又往々水の沸騰する響に比較されて居るのもある。即ち、

日盛りは煮えたつ蟬の林かな

In the hour of heaviest heat, how simmers the forest with Sèmi!

煮えて居る水ばかりなり蟬の聲

大 無

Simmers all the air with sibilation of Sèmi,

Ceaseless, wearying sense—a sound of perpetual boiling.

他の詩人は蟬の聲の多數と遍在ユレチチユレチ ユレタイチとを特に罵つて居る。即ち、

ありたけの木に響きけり蟬の聲

How many soever the trees, in each rings the voice of the Sèmi.

松原を一里は來たり蟬の聲

セ ン ガ

Alone I walked for miles into the wood of pine-tree :

Always the one same Sèmi shrilled its call in my ears.

(これは全く誤譯である。この句は、松原を既に一里ほども來た、

この長い松原に蟬の聲が隙なく鳴き連なつて居る、といふ意で、

「來たり」といふのは、己れが來たので、蟬には關係ないのである。)

往々この題目は滑稽的誇大法で取扱はれて居る。即ち、

鳴いて居る木よりも太し蟬の聲

The voice of the Sèmi is bigger (thicker) than the tree on which it sings.

杉高しされども蟬の餘る聲

High though the cedar be, the voice of the Sèmi is incomparably higher!

(この第二の句は、蟬の聲が高いから餘るといふ意は無い。たゞ

高い杉の木にも餘る。といふのみの意である。)
聲長き蟬は短き命かな

How long, alas! the voice and how short the life of the Sèmi!

或詩人が、蟬の聲の停止の後に續いて來る。快感の消極的狀態を
賞讃して居る。即ち、

蟬に出て螢に戻る涼かな

也 有

When the Sèmi cease their noise, and the fire-flies come out—Oh! how refresh-
ing the hour!

(この句の、出る戻る、といふのは人の動作であるが、譯にはそ
れが顯はれて居ない。)

蟬の立つあと涼しさよ松の聲

バイジャク

When the Sèmi cease their storm, Oh, how refreshing the stillness!

Gratefully then resounds the musical speech of the pines.
森の蟬涼しき聲や暑き聲

乙 州

Sometimes sultry the sound; sometimes, again, refreshing:

The chant of the forest-sèmi accords with the hearer's mood.

(これも誤譯である。この句意は、涼しい聲や暑い聲が打雜つて
聞える、といふのである。)

涼しきも暑きも蟬のさころ哉

フハク

Sometimes we think it cool,—

The resting-place of the Sèmi;—

Sometimes we think it hot, (it is all a matter of fancy.)

涼しいと思へば涼し蟬の聲

If we think it is cool, then the voice of the Sèmi is cool, (that is, the fancy
changes the feeling.)

蟬を聞け一日鳴いて夜の露

其角

Hear the Sēmi shrill! So from earliest dawning,

All the summer day he cries for the dew of night.

夕露の口に入るまでなく蟬か

梅室

Will the Sēmi continue to cry till the night-dew fills its mouth?

而して實に次の小品書は、日本流の傑作である。残念ながら自分はこの作者の名を知らない。

蟬一つ松の夕日を抱^かへけり

Lo! on the topmost pine, a solitary cicada.

Vainly attempts to clasp one last red beam of sun.

(この句の妙味などは小泉さんでなくては解らない。これも原句よりは譯の方が勝つて居る。)

我と我がからや弔ふ蟬の聲

也 有

Me thinks that Sēmi sits and sings by his former body,—

Chanting the funeral service over his own dead self.

世の中よ蛙の裸蟬の衣

Naked as frogs and weak we enter this life of trouble;

Shedding our pomps we pass: So Sēmi quit their skins.

(この譯は當を得て居ないやうである。)

魂は浮世に鳴いて蟬のから

Here the forsaken shell: above me the voice of the creature.

Shrills like the cry of a soul quitting this world of pain.

やがて死ぬ景色は見えず蟬の聲

芭蕉

Never an intimation in all those voices of Sēmi.

How quickly the hush will come,—

How speedily all must die.

蟲の悲聲で、自分の寂寥から來る夏の憂感の一端が、この小さな詩の中に顯はれて居るやうに思はれる。こんな小さい幾百萬の生物が、不知不識のうちに、東洋の古來の知識即ち無常の契經を説教しつゝあるのである。

(この句の題は無常迅速といふのであるから、この註はそれに當つて居る。)

八 A Japanese Miscellany (ルン著 一千九百一年上梓) の
うち。

「蜻蛉」のうち

秋の季の赤蜻蛉に定まりぬ

The autumn season has begun is decided by the [appearance of the] red

dragon-fly.

(これは白雄の句)

おのが身に秋を染めゆく蜻蛉かな

O the dragon-fly!—he has dyed his own body with (the color of) autumn!

(*麥醉の句)「蜻蛉は、句の音數の都合で、トムポーともトボとも讀む、この句などはトボの方である。然るにこの原書にはかゝる場合にも皆 Tombo としてあるのは微瑕である。)

秋の日の染めた色なり赤蜻蛉

Dyed he is with the color of autumn days—O the red dragon-fly!

(*桂秋の句)

紅の陽炎走る蜻蛉かな

Like a fleeting of crimson gossamer-threads, the flashing of the dragon-flies.

(*吳筵の句)

蜻蛉を詠んだものはホックには甚だ多いがドバイツにもタンカにも甚だ稀である。わが友人が圖書館でタンカの集を調べてくれたが、蜻蛉を詠んだもの一首を得るのに、實に五十二部を涉獵した、このことである。

この理は、タンカでは蟲といへば、鳴く蟲ばかり詠んで、蜻蛉は馬牛犬等のやうに、雜の題に入れてあつたからである。

然るに十七シラブルに限られて居るホックには、蜻蛉の詩は、初秋の蜻蛉自らのやうに澤山ある。これはこの形式に於ては、作者は題目、方法に就いて、束縛される事が少ないからである。ホックに就いての殆ど唯一の規則といふのはむづかしいものではない、唯この詩はリットル、ウオード、ビクチュエ小詞畫でなければならぬこと——見たり感じたりした或物の

記憶を呼起さねばならぬこと——感覺の或經驗に訴へなければならぬことである。

予が引用せむとする詩の多數は、確にこの要求を充たして居る。讀者はこれ等が實際の畫——ウキヨエ派の小さい色刷畫であることを了解されるでせう。

實に次に示すもの、殆どどれも、日本の繪師が繪筆を一拂すれば、その儘面白繪に寫すことが出来る。

(和歌と俳句との比較は、いかにも要を得て居る。俳句の唯一の規則も、氣の利いた觀察である。)

「蜻蛉に就いての繪畫體詩」

稻の穂の蜻蛉とまり垂れにけり

An ear of rice has bent because a dragon-fly perches upon it.

(*繞石の句)

蜻蛉の枝にいたり忘鍬

See the dragon-fly resting on the handle of the forgotten mattock.

(*素磨の句)

蜻蛉の嗅いで行きけり棄草鞋

Dragon-flies has gone to swift a pair of cast off sandals of straw.

(*許白の句)

袖につく墨か尾花に鐵漿蜻蛉

Is it an ink-stain upon a sleeve?

No: it is only the black dragon-fly resting upon the obana.

日は斜關屋の槍に蜻蛉かな

See the dragon-fly perching on the blade of the spear leaning against the

rampart-wall!

(これは蕪村の有名な句である)

蜻蛉の草に倦んでや牛の角

O dragon-fly! how have you wearied of the grass that you should thus perch upon the horn of a cow!

(*太無の句)

垣竹の一本長さ蜻蛉かな

One of the bamboo-stakes in that fence seems to be higher than the others—
but no! there is a dragon-fly upon it!

(*蘆雀の句)

垣竹と蜻蛉とうつる障子哉

The shadow of the bamboo-fence, with a dragon-fly at rest upon it, is thrown

upon my paper-window !

(* 悟月の句)

釣鐘に一時ヤスミ蜻蛉かな

See ! the dragon-fly is resting awhile upon the temple-bell !

(* 梅路の句) Yasumi とあるのは Yasumi の誤であらう。この譯は當を得て居ない、一時は awhile の意ではない、この句の工夫のあるところは、釣鐘にいつまでも〜蜻蛉が休んで居るが、一時立つと、鐘を撞かれるので止むを得ず飛んで行く、即ち一刻の間だけ休むといふのである。

尾を以て鐘に向へる蜻蛉かな

Only with his tail he thinks to oppose (the weight of) the great temple-bell—

O silly dragon-fly !

(* 來川の句)

亡き人の印の竹に蜻蛉かな

Lo ! a dragon-fly rests upon the bamboo that marks the grave !

(* 几董の句)

イッテワ來て蜻蛉絶えず舟の綱

About the ropes of the ship the dragon-flies cease not to come and go.

(* 太巢の句) 往てはこゝではイッテワと訓むべきである。イッテワとしてあるのは誤である。

蜻蛉や舟は流れて止まらず

The dragon-fly ceases not to flit about the vessel drifting down the stream.

(* 青扇の句)

蜻蛉や帆柱當てに遠く行く

O the dragon-fly!—keeping an eye upon the mast, he ventures far!

(*梅室の句)

蜻蛉や日の陰出来て浪の上

Poor dragon-fly!—now that the sun has become obscured, he wanders over
the waves.

綿取りの笠や蜻蛉のつづ、

Look at the bamboo-hats of the cotton-pickers!—there is a dragon-fly perched
on each of them!

(*也有の句)

流れ行く泡に夢見る蜻蛉かな

Lo! the dragon-fly dreams a dream above the flowing of the foam-bubbles!

(*仙溪の句)

萍の花に遊ぶや赤蜻蛉

See the red dragon-fly sporting about the blossoms of the water-weed!

(*雨柳の句)

蜻蛉の一層赤し淵の上

Much more red seems the red dragon-fly when hovering above the pool.

釣下手の竿に来て寝る蜻蛉かな

See! the dragon-fly settles down to sleep on the rod of the unskilful angler!

(*也有の句)

蜻蛉の葉裏に寒し秋時雨

Lonesomely clings the dragon-fly to the under-side of the leaf—Ah! the an-
tumn-rains!

(*白圖の句)、この句は、紅葉の「芋蟲の雨を聞き居る葉裏かな」と

いふ句に似て居る)

蜻蛉の十ばかりつくカラエかな

Only ten dragon-flies—all clinging to the same withered spray!

(これは士朗の句、KaréとあるはKaréの誤である。)

よそ事の鳴子に逃げる蜻蛉かな

Poor dragon-fly! scared away by the clapper that never was intended for you!

(*民花の句) これは丈草の「我事と鯰の逃げし根芹かな」と同じ趣で、

劣つて居る。)

青空や蚊ほご群飛ぶ赤蜻蛉

High in the azure sky the gathering of red dragon-flies looks a swarming of

mosquitoes.

(*繞石の句)

古墓や赤蜻蛉飛ぶ枯櫛

Old tomb!—[only] a flitting of red dragon-flies;—some withered [offerings of]

shikimi [before the grave].

(*如翠の句)

淋しさを蜻蛉飛ぶなり墓の上

Desolation!—dragon-flies flitting above the graves!

(*繞石の句)

蜻蛉飛んで事なき村の日午なり

Dragon-flies are flitting, and the noon-sun is shining, above the village where

nothing eventful ever happens.

(譯しにくい句を、よく譯しこなしてある。)

夕月にうすき蜻蛉の羽影かな

O the thin shadow of the dragon-fly's wings in the light of sunset !

(これは、夕月が夕日に誤まれて居る。)
蜻蛉の壁を抱ふる西日かな

O that sunlight from the West, and the dragon-fly clinging to the wall !

(*活荷の句) これは shadowing に引用してあつた蟬一つ松の夕日を
抱へけり」と同趣である)

蜻蛉とる入日に鳥の目付哉

O the expression of that cock's eyes in the sunset-light—trying to catch a

dragon-fly !

(*成美の句)

蜻蛉の舞ふや入日の一世界

Dance, O dragon-flies, in your world of the setting-sun !

(*倚菊の句)

生壁に夕日さすなり赤蜻蛉

To the freshly-plastered wall a red dragon-fly clings in the light of the
setting-sun.

(*蘆帆の句)

出る月と入日の間あひや赤蜻蛉

In the time between the setting of the sun and the rising of the moon—red
dragon-flies.

(*二丘の句)

夕影や流れに浸す蜻蛉の尾

The dragon-fly at dusk dips her tail into the running stream.

(*如泊の句)

「蜻蛉と日光」

蜻蛉や日のさす方へタテ行く

O dragon-fly! even towards the sun you rise and soar!

(たてゑあるのは tate の誤である。)

日當りの土手や終日蜻蛉飛ぶ

Over the sunlight bank, all day long, the dragon-flies flit to and fro.

(*繞石の句)

五六尺己が雲居の蜻蛉かな

Poor dragon-fly!—the [blue] space of five or six feet [above him] he thinks

to be his own sky!

(*蓼太の句)

蜻蛉の向きを揃へる西日かな

Ah, the sunset-glow! Now all the dragon-flies are shooting in the same direction.

(*嵐外の句)

蜻蛉や空へ離れて暮れかゝり

Dusk approaches: see! the dragon-flies have risen toward the sky!

(*太無の句)

星一つ見るまで遊ぶ蜻蛉かな

O dragon-fly! you continue to sport until the first star appears!

(*左梁の句)

「蜻蛉の飛翔」

遠山や蜻蛉つい行きつい歸る

Quickly the dragon-fly starts for the distant mountain, but as quickly returns.

(この句は「つい戻る」であつたらうと思ふ。 作者は秋の坊)
行き逢うてごちらも外れる蜻蛉かな

Lo! the dragon-flies that seemed to fly in line all scatter away from each other.

「戀唄に用ひられたるもの」

蜻蛉や身をも焦さず鳴きもせず

Happy dragon-fly!—never self-consumed by longing,—never even uttering a cry!

(これは鳥酔の句)

「奇と美」

蜻蛉の顔は大方目玉かな

O the face of the dragon-fly!—almost nothing but eyes!

(*知足の句)

聲なきを蜻蛉無念に見ゆるかな

O dragon fly! you appear to be always angry because you have no voice!

(*可昌の句)

蟬に負けぬ羽衣持ちし蜻蛉かな

O dragon-fly! the celestial raiment you possess is nowise inferior to that of the

cicada!

(*太無の句)

「蜻蛉の身軽」

燕より蜻蛉は物も動かさず

More lightly even than the swallow does the dragon-fly touch things without

moving them.

(*西羊の句)

蜻蛉や鳥の踏まれぬ枝の先

O dragon-fly, you perch on the top of the spray where never a bird can tread!
(*太無の句)

「蜻蛉の愚鈍」

打つ杖の先に止まりし蜻蛉かな

O dragon-fly! you light upon the end of the very stick with which one tries
to strike you down!

(*康瓠の句)

立歸る蜻蛉とまる礫つよつかな

See! the dragon-fly returne to perch upon the pebble that was thrown at it!

(*鵓白の句)

「蜻蛉と蜘蛛」

蜘蛛の巢のあたりに遊ぶ蜻蛉かな

Ah! the poor dragon-fly, sporting beside the spiders web!

(*波音の句)

サ、ガミの網のはづれて蜻蛉かな

Good dragon-fly!—he has extricated himself from the net of the spider!

(*麥津の句) sasagami とあるのは sasegami の誤)

蜘蛛垣も破るさほひや鬼蜻蛉

Through even the spider's fence he has force to burst his way!—

O the demon-dragon-fly!

(*雅勇の句)

「花に對しての冷淡」

蜻蛉や花野にも目は細らせず

Ah, the dragon-fly! even in the flower-field he never half-shuts his eyes!

(*柳居の句)

蜻蛉や花には寄らで石の上

O the dragon-fly!—heedless of the flowers, he lights upon a stone!

(*湖上堂の句)

蜻蛉や花なき杙に住み習ひ

Ah, the dragon-fly! content to dwell upon a flowerless stake!

(柳居の句)

寝た牛の角にハラレヌ蜻蛉かな

O great dragon-fly! Will you never leave the horn of the sleeping ox?

(*花鐘の句] hararénu とあるは hanarénu の誤)

杙の先何か味はふ蜻蛉かな

O dragon-fly! What can you be tasting on the top of that fence-stake?

(*榮來の句)

「蜻蛉釣」のうち

飯時も戻り忘れて蜻蛉釣

Even at the hour of the noon-day meal they forget to return home,—the children catching dragon-flies!

(*樂遊の句)

裸兒の蜻蛉釣りけり晝の辻

The naked child has been catching dragon-flies at the road-crossing,—heedless of the noon-sun!

(*閑更の句]このやうな様は、今日では都會には無いが、まだ田舎には随分ある。こんな句を紹介されるのは恥かしいやうな気がするが、實景だから致方が無い。) しかし、この遊戯に關した、最も名高い詩は感情的のものである。

それは有名なカガの女詩人チヨが、小兒を亡くした後で作つたものである。

蜻蛉つり今日は何處まで往つたやら

Catching dragon-flies!...wonder where he has gone to-day!

この詩は、母の感情を暗指せむとして居る。

(顯はさうとはせずして)

彼女は蜻蛉を追うて走つて行く小兒を見て、その遊び仲間にも入つて居た亡兒の事を想ひ出した、さうして「無限の不可思議」を見て、あの小さい魂は、一體何處へ往つたらうかといふ事を怪んだのである。あゝ、兒の魂は何處へ往つたのであらう、ごんな幽界の遊を今して居るであらうか。

○

まづ以上記したやうなものであるが、この中で最數多く且つ年代も廣く渡つて俳句を紹介した人はヘルン氏で (氏の著書 *Exotics and Retrospectives* 及 *Koto* にも俳句が載せてあるといふことだが僕はまだ見ない)。歸化して居られた人だから、前述の通り、並々の外人と一緒に列べるのは不當であるけれども、長く趣味感情を異にして居た人でありながら、かくまでよく俳句を知り得、味ひ得て居られるのは感すべきである。歐米の讀者も、氏の著書によつて俳句のいかなるものなるかを會得するであらうと思はれる。

次にはまづアストン氏であらう、俳士の傳も調べ、俳文まで譯し、俳諧に關しての意見を述べてある、十分その當を得ぬといふ事は免れ難いけれども、兎に角西人の一箇の見識として感すべきである。西人には、俳人の中で芭蕉と千代が最もよく知られて居るらしい。

これは「古池」の句と「朝顔」の句が人口に膾炙されて居るので、自然西人の耳によく觸れた爲であらう。

趣味の味ひ難い俳諧なるものが、今日までに、こんなに西人に紹介されて居るのは愉快な事である。嘗て「めざまし草」に或獨人が俳句を譯したのが載つて居たさうだが、自分はまだ見ない。またついでこの頃、某といふ佛蘭人が鬼貫を大變賞めて、「日本」(新聞)に論じて居たといふことであるが、これもまだ讀まない。こんな工合で、益この方面を味ふ西人が出て来るであらう。數年前亡くなつた蘇山人は支那人でありながら俳句をよくして、斯道の大家に肩をならべる程であつたが、この後西人で作る人が出来るかも知れない。

この篇は大谷繞石氏の教示によつて添削した所が多い、*印を施したのは氏より教へられた事である。

終

明治三十八年九月二日印刷
明治三十八年九月五日發行



著者

沼波武夫

發行者

立田長作

印刷者

野村宗十郎

印刷所

株式會社 東京築地活版製造所

東京市京橋區築地三丁目十五番地
東京市京橋區築地二丁目十七番地

發行所

東京市本郷區湯島切通坂町八番地
電話 下谷 一三三〇番
南江堂書店
東京市本郷區本郷四丁目廿七番地
青年堂

轉
正價金四拾五錢



井上圓了博士新著

心理療法

全一冊

菊判紙數百八十餘頁
定價金四拾五錢
郵稅金六錢

心理療法とは醫學醫診によらずして諸病を治する療方ないふ井上博士が多年妖怪學と共に此法を研究せられしは世の既に知る所なり幸に博士が弊店の需に應じて其大要を記述せられ此に發刊の運に至り是れ實に他に比類なき斬新の著述なれば讀者請ふ争うて一本を購求あれ

醫學士 佐藤佐 阿久津資生校閱 平野治著

增訂 食餌療法新論

全一冊

菊判洋裝假綴
紙數四百六拾餘頁
正價金壹圓五拾錢
郵稅金拾錢

食物の品質を詳にし食餌を以て病を治し病體を健全に復せしめ且小兒を養育するの法を論述せる書にして醫師、看護婦、產婆諸君は勿論荷も食餌衛生と生命財産との貴重を知り百歳の壽を全せんとする者は一日も座右を缺く可らざるの寶典なり

本書ノ目次大要左ノ如シ

- 食餌總論
- 強壯食餌
- 含水炭素減殺食餌
- 葡萄療法
- 代乳食餌
- 便秘及下痢症食餌
- 慢性心臓病及肺病食餌
- 糖尿病食餌
- 肝臟病食餌
- 營養坐藥
- 食餌各論
- 減殺食餌
- 脂肪減殺食餌
- 乳汁療法
- 急性病食餌
- 貧血病食餌
- 「フライト」病食餌
- 痛風病食餌
- 慢性虛弱症食餌
- 人工血清注入法
- 食餌療法總論
- 水分減殺食餌
- 「パンチン」氏療法
- 小兒養育法
- 快復期症食餌
- 腺病食餌
- 蛋白尿病食餌
- 神經病食餌
- 肥胖病食餌
- 脂肪塗擦法
- 食餌療法各論
- 蛋白減殺食餌
- 「サリス」氏療法
- 人工小兒養育法
- 胃病食餌
- 勞病療食餌
- 腎病療食餌
- 不消化症食餌
- 營養灌腸法

陸軍軍醫總監正四位男爵石黒忠惠先生題辭 陸軍三軍醫正岡隆太郎先生纂著

通俗看病學

全一冊

改訂第二版發行
紙數三百六十餘頁
精圖三十六箇挿入
正價金六拾錢
郵稅金八錢

本書第一版發售に販了の後久しく讀者の愛に背きたりしが今や大に改訂増補し加ふるに「ハウエル」氏「セルロイド」氏等の原著を參照して簡易明晰に實地應用を旨とし傍訓を施し可憐親切に説述したり之れを第一版に比すれば全然面目を一新せり世の看護の職に従事するの人并に衛生を重んずるの士は一本を購ひ以て未だ雨降らざるに門戸を網繆するは其無益にあらずるを信す

富永勇 川村舜治編纂

袖珍看護寶函

全一冊

菊判半截印刷鮮明
總紙數五百餘頁
精密挿圖八十六箇
正價金五拾錢
郵稅金八錢

本書は疾病及外傷の看護に關する一切の事柄と、傷病救急の方法を記載したるものにして、文章平易に總假名付き、殊に「ボツケット」入の最小形製本なるを以て、看護者は常にこれを衣囊に貯へて、臨牀時の參考となすに適す、又素人にも傷病上の參考として一本を携ふる時は便あるべし

須田勝三郎校閱 鈴木彦馬編纂

化學工藝寶鑑

第三版 全一冊

四六判洋裝
紙數五百八十餘頁
正價(假綴)金六拾五錢
正價(本綴)金八拾錢
郵稅金拾錢

天地間の森羅萬象大概化學的作用に成らざるなし唯人々箇々其志想に乏しく之が研究を加へざるのみ鈴木氏茲に概する處あり此書を著し以て工藝上に關する化學應用を指導せられんとす世の製作事業に志ある諸士宜敷一讀すべき價値あるを見るなり

醫學士 寺田織尾校閱 佐藤信直編纂

普通學校衛生學

全一冊

菊判洋裝假綴
紙數百五十餘頁
正價金五十錢
郵税金六錢

本書は教育及衛生の原則に基き文部現行の法令に遵ひ學校衛生の原理及施行法を論じ加ふるに法令の明文及解釋を以てし一讀直ちに學校衛生法の大意を知らしむるの好著なり教育家衛生家諸彦は勿論官公吏員を始め苟も教育の重任を分擔せらるる諸君は速に購讀の榮を賜はらんことを乞ふ

關以雄著

衛生教育論

全一冊

菊判洋裝假綴
紙數百六十餘頁
正價金五拾錢
郵税金六錢

本書は教育家が衛生思想の喚起に冷淡なるを慨し學校衛生の普及發達せんことを切望するの餘瀝に出でたる著述なれば學事關係者は勿論師範學校生徒、小學校教員市町村長諸君は幸に一讀の榮を賜はらんことを

(四)

醫學書 藥學書 獨逸書 販賣

東京市本郷區湯島切通坂町八番地
南江堂書店

東京市本郷區湯島切通坂町二十七番地
南江堂圖書陳列所
(電話下谷一三三〇番)

新刊圖書

此廣告を切抜き
代價を添へて
圖書雜誌又
は繪葉書
を御注
成文被

繪はかき

獨英佛國
最近流行の
尤物着荷續々

繪はかきは繪
CARTE POSTALE

東京市本郷區湯島切通坂町
南江堂書店

東西古今の
装面影やの
事跡の流界四季の
新の意匠は百跡内外
寫したる意匠は百跡内外
繪はかきを極雅に迫り人名士
の華を雅に迫り人名士
色々々々趣集りて人の
是味百來る時
繪はかき

讀賣新聞萬朝報に掲載
せられて非常の喝
采を博せる弊
店獨特の

候御方へ
は大々的奮
發で特別割引
の上尙郵税を弊
堂で負擔致します

(五)

諸雜誌類

矢野龍溪先生序
永田駛川先生著

營口明覽

寫真石版畫及地圖入
洋裝頗る美本
全壹册定價金六拾五錢
郵稅金六錢

本書は編者が滿洲視察として、滿洲唯一の開港場にして、而かも其咽喉なる、牛莊（營口）に滯留し、親しく實際に就て、調査を遂げ、編纂したるものなり、之を繙けば、營口の事物、細大漏さず、同地の地理、沿革、人口、出入の船舶、輸出入品、商工、漁業等の實狀、物價等より官憲、官人、銀行、會社、商店は申すも更なり、料理店、下宿屋、理髮店、風呂屋に至るまで、網羅して、餘す所なし、苟も滿洲事業の企圖に、志ある人士は、座右に缺く可からざるの良書なり。

出版書肆

東京市本郷區四丁目

青年堂

清國一手販賣

清國營口西北街

加藤洋行